

平成 16 年度

久 留 米 市 内 遺 跡 群

山 下 遺 跡
(第4次調査)

櫛原侍屋敷遺跡
(第5次調査)

西 小 路 遺 跡
(第9次調査)

浦 山 古 墳 群
(第4次調査)

速 水 遺 跡
(第2次調査)

中 原 遺 跡
(第1次調査)

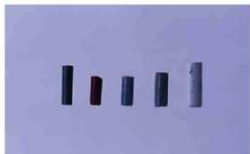
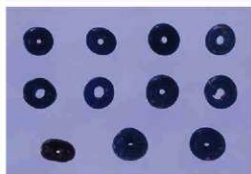
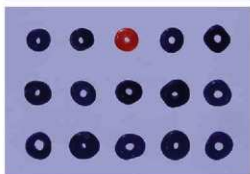
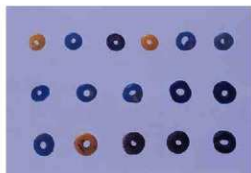
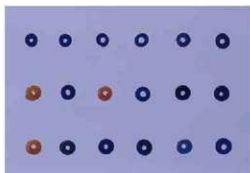
二 本 木 遺 跡
(第18次調査)

2005. 3

久留米市教育委員会



▲浦山古墳群第4次調査区全景（南上空から）



▲24号墳出土装身具

平成 16 年 度

久留米市内遺跡群

山下遺跡

(第 4 次調査)

櫛原侍屋敷遺跡

(第 5 次調査)

西小路遺跡

(第 9 次調査)

浦山古墳群

(第 4 次調査)

速水遺跡

(第 2 次調査)

中原遺跡

(第 1 次調査)

二本木遺跡

(第 18 次調査)

序

福岡県南部の中核都市として発展を続ける久留米市は、古来より筑後川の豊かな水と耳納山地の緑に恵まれ、様々な文化を創造してまいりました。

人々の営みはすでに旧石器時代から見られ、現在まで連綿と息づいています。律令期には筑後地域を統括する筑後国府、文化・信仰の中心施設として筑後国分寺・国分尼寺が設置されています。また江戸時代には久留米藩二十一万石の拠点として城下町が形成・整備され、現在の市街地の基盤となりました。

このように久留米市には数多くの貴重な文化財が存在していますが、一方では市の発展の代償として、地下に眠る埋蔵文化財が次々と姿を消しています。私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人たちの残した貴重な足跡である文化財を後世に伝えて行くための一手段として発掘調査を行い、記録保存の措置を講じています。

本書には、平成15年度及び16年度に発掘調査を実施した、山下遺跡、櫛原侍屋敷遺跡、西小路遺跡、浦山古墳群、速水遺跡、中原遺跡、二本木遺跡、久留米城外郭遺跡、京隈侍屋敷遺跡の報告および概要報告を収録しています。本書が久留米の歴史を学ぶ際の資料として、さらには文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました地権者の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成15・16年度に久留米市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査報告・概要報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、教育文化庁文化財保護課の大石昇・近澤康治・水原道範・白木守・小澤太郎・神保公久が担当した。

遺 跡 名	担当者	遺跡略記号	調査番号
山 下 遺 跡 (第4次調査)	小澤	YMS	200303
櫛原侍屋敷遺跡 (第5次調査)	近澤	LKK	200304
西小路遺跡 (第9次調査)	白木	NSJ	200305
浦山古墳群 (第4次調査)	神保	URY	200317
速水遺跡 (第2次調査)	白木	HYM	200322
中原遺跡 (第1次調査)	近澤	NKB	200401
二本木遺跡 (第18次調査)	近澤	NHG	200405
久留米城外郭遺跡 (第8次調査)	近澤	LNG	200407
京限侍屋敷遺跡 (第4次調査)	大石	LKG	200413

3. 本書に掲載した遺構実測図は調査担当者の他、井手輝子・今村美津子・柊島ミドリ・小林美佐代・田中樹子・橋原初美・廣木誠・藤木幸子・森啓恵・渡辺しげ子・渡邊やつ子が作成した。また遺物実測・拓本・製図は調査担当者と、非常勤職員の畠中和子・米澤美詠子・香椎佳子、臨時職員の江口里織・丸山裕見子が行った。
4. 空中写真を除く遺構写真は各担当者が撮影した。また、遺物写真は撮影器材トヨビュー45GⅡを使用し、白黒フィルムはT-MAX100 (6×9判)・カラーリバーサルフィルムはエクタクロームEPP (6×9判) を用いて、古賀元子の協力を得て久留米市埋蔵文化財センターにおいて園井正隆が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構図は主に国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成した。図面の方位は「N」を付したものは略北 (中原遺跡第1次・二本木遺跡第18次)、標記のないものはすべて座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構表記は下記の略号による。
 SB……掘立柱建物 SD……溝 SI……堅穴住居 SK……土坑
 SP……柱穴・ピット SX……その他の遺構
7. 本書に収録した遺物、および調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆は各担当者が行い、文責は本文目次に記した。また、全体の編集は担当者で協議の上、白木が担当した。

本文目次

I. はじめに	(白木)	1
II. 山下遺跡(第4次調査)	(小澤)	2
III. 櫛原侍屋敷遺跡(第5次調査)	(近澤)	10
IV. 西小路遺跡(第9次調査)	(白木)	18
V. 浦山古墳群(第4次調査)	(神保)	30
VI. 速水遺跡(第2次調査)	(白木)	71
VII. 中原遺跡(第1次調査)	(近澤)	81
VIII. 二本木遺跡(第18次調査)	(近澤)	85
IX. 久留米城外郭遺跡(第8次調査)	(近澤)	91
X. 京隈侍屋敷遺跡(第4次調査)	(大石)	92
報告書抄録		93

挿図目次

巻頭図版	▲浦山古墳群第4次調査区全景(南上空から)
	▲24号墳出土装身具

II. 山下遺跡(第4次調査)

第1図 周辺の遺跡分布図(1/25,000)	2	第7図 SP7遺物出土状況(北から)	5
第2図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	3	第8図 調査区全景(西上空から)	5
第3図 山下遺跡第4次調査遺構配置図(1/150)	4	第9図 土坑実測図(1/40)	6
第4図 SK5完掘状況(北から)	4	第10図 山下遺跡第4次調査出土遺物実測図①(1/4)	6
第5図 SK10完掘状況(西から)	5	第11図 山下遺跡第4次調査出土遺物実測図②(1/4)	7
第6図 SK20完掘状況(東から)	5	第12図 出土遺物(写真)	9

Ⅲ. 榑原侍屋敷遺跡（第5次調査）

第13図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	10
第14図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	11
第15図	榑原侍屋敷遺跡第5次調査遺構配置図（1/100）	12
第16図	調査区全景（南から）	12
第17図	SK1完掘状況（西から）	13

第18図	SK1実測図（1/60）	13
第19図	榑原侍屋敷遺跡第5次調査出土遺物実測図（1/4）	14
第20図	出土遺物（写真①）	14
第21図	出土遺物（写真②）	15
第22図	出土遺物（写真③）	16

Ⅳ. 西小路遺跡（第9次調査）

第23図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	18
第24図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	19
第25図	調査区全景（南東から）	20
第26図	調査区全景（北西から）	20
第27図	西小路遺跡第9次調査遺構配置図および 北壁土層図（1/100）	21
第28図	調査区北壁西半部土層（南西から）	22
第29図	調査区北壁東半部土層（南西から）	22

第30図	SD1完掘状況（北東から）	22
第31図	硬化面検出状況（南東から）	22
第32図	西小路遺跡第9次調査出土遺物実測図① (1/2, 1/4)	23
第33図	西小路遺跡第9次調査出土遺物実測図② (1/2, 1/4)	24
第34図	出土遺物（写真①）	25
第35図	出土遺物（写真②）	26

Ⅴ. 浦山古墳群（第4次調査）

第36図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	30
第37図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	31
第38図	浦山古墳群第4次調査区全景（南上空から）	31
第39図	調査前風景（北西から）	32
第40図	墳丘北西部検出状況（北西から）	32
第41図	浦山古墳群第4次調査4号墳墳丘測量図（1/150）	33
第42図	4号墳周溝断面（南東から）	34
第43図	4号墳墳丘面遺物出土状況（北東から）	34
第44図	中央トレンチ土層図（1/60）	34
第45図	祭祀遺構全景①（北西から）	35
第46図	祭祀遺構全景②（西から）	35
第47図	祭祀遺構大墓下部検出状況（南から）	35
第48図	祭祀遺構遺物出土状況（南西から）	35
第49図	4号墳祭祀遺構実測図（1/20）	36
第50図	4号墳出土遺物実測図①（1/4）	39
第51図	4号墳出土遺物実測図②（1/4）	40
第52図	4号墳出土遺物実測図③（1/6）	41

第53図	4号墳出土遺物実測図④（1/6）	42
第54図	4号墳出土遺物実測図⑤（1/6）	43
第55図	4号墳出土遺物実測図⑥（1/4, 1/6）	44
第56図	24号墳東周溝全景（南から）	45
第57図	浦山古墳群第4次調査24号墳墳丘測量図（1/100）	45
第58図	24号墳東周溝断面図①（1/20）	46
第59図	24号墳東周溝断面図②（1/20）	46
第60図	24号墳全景（南上空から）	46
第61図	24号墳石室実測図（1/60）	47
第62図	24号墳玄室全景（南西から）	48
第63図	24号墳墓道全景（北西から）	48
第64図	24号墳出土遺物実測図①（1/4）	49
第65図	24号墳出土遺物実測図②（1/4, 1/6）	50
第66図	4号墳出土土器実測図（1/4）・24号墳出土遺物 実測図③（1/2, 1/4）	51
第67図	出土遺物（写真①）	52
第68図	出土遺物（写真②）	53

第69図	出土遺物（写真③）	54
第70図	出土遺物（写真④）	55
第71図	出土遺物（写真⑤）	56
第72図	出土遺物（写真⑥）	57
第73図	出土遺物（写真⑦）	58

第74図	出土遺物（写真⑧）	59
第75図	出土遺物（写真⑨）	60
第76図	出土遺物（写真⑩）	61
第77図	浦山4号墳復元案（1/400）	67
第78図	久留米市城首長墓位置図（1/200,000）	69

VI. 速水遺跡（第2次調査）

第79図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	71
第80図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	72
第81図	速水遺跡第2次調査遺構配置図（1/100）	73
第82図	S15・10・15実測図（1/60）	74
第83図	SK20実測図（1/40）	75

第84図	SB25実測図（1/80）	75
第85図	SD30断面実測図（1/40）	76
第86図	速水遺跡第2次調査出土遺物実測図（1/4, 1/2）	76
第87図	出土遺物（写真）	78
第88図	速水遺跡第2次調査地の現況（西から）	80

VII. 中原遺跡（第1次調査）

第89図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	81
第90図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	82

第91図	中原遺跡第1次調査遺構配置図（1/100）	83
第92図	調査区全景（東から）	83

VIII. 二本木遺跡（第18次調査）

第93図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	85
第94図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	86
第95図	二本木遺跡第18次調査遺構配置図（1/100）	87
第96図	調査区全景（東から）	87
第97図	SB1実測図（1/60）	88

第98図	SB1全景（西から）	88
第99図	SD2実測図（1/60）	88
第100図	SD2全景（北から）	88
第101図	二本木遺跡第18次調査出土遺物実測図（1/4）	89
第102図	出土遺物（写真）	89

IX. 久留米城外郭遺跡（第8次調査）

第103図	遺跡の位置図（1/25,000）	91
第104図	調査区全景（東から）	91

第105図	SK1全景（北から）	91
-------	------------	----

X. 京限侍屋敷遺跡（第4次調査）

第106図	遺跡の位置図（1/25,000）	92
第107図	調査区全景（東から）	92

第108図	堅穴住居全景（西から）	92
-------	-------------	----

表 目 次

第1表	平成15・16年度久留米市内遺跡群発掘調査一覧表	1
第2表	山下遺跡第4次調査出土遺物観察表	8
第3表	櫛原侍屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表	17
第4表	西小路遺跡第9次調査出土遺物観察表(1)	27
第5表	西小路遺跡第9次調査出土遺物観察表(2)	28
第6表	西小路遺跡第9次調査出土遺物一覧表	29
第7表	浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表(1)	62
第8表	浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表(2)	63
第9表	浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表(3)	64
第10表	浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表(4)	65
第11表	浦山古墳群第4次調査24号墳出土玉類観察表	66
第12表	久留米市城首長墓一覧表	68
第13表	久留米市城首長墓編年表	69
第14表	速水遺跡第2次調査出土遺物観察表	77
第15表	速水遺跡第2次調査出土遺物組成表	79
第16表	二本木遺跡第18次調査出土遺物観察表	90

【遺物実測図凡例】

- * 図面縮尺は1/4・1/6を基本とし、石製品・土製品など小形のものは1/2とした。
- * 遺物の断面黒塗りとは須恵器、断面網掛けは瓦器、表面網掛けは丹塗り土器を示す。
- * 調整の一点破線——はヨコナデ・回転ナデを、破線——はケズリを表わす。

【出土遺物観察表凡例】

- * 法量の単位はcm。()内の数値は現存値、[]内の数値は復元値を示す。
- * 色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社発行、1997年版)による。なお、陶磁器の色調は基本的に釉色を表わす。
- * 胎土は、0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒とした。
- * 輸入陶磁器の分類は大宰府分類によった。

I. はじめに

1. 調査の概要

久留米市では平成5年度より、国・県費の補助を受けて実施した発掘調査の成果を『久留米市内遺跡群』として取りまとめ、報告書を刊行している。本書には平成15年度調査のうち未報告であった5遺跡の本報告、及び平成16年度調査分のうち2遺跡の本報告と2遺跡の概要報告を収録している。平成16年度における久留米市内遺跡群の調査は、発掘調査5件で、調査原因は専用住宅建設に伴うもの4件、農業用倉庫建設に伴うもの1件である。また久留米市では遺構の破壊を伴わない開発や、小面積の開発に伴う調査については、遺跡の時期や広がり等を把握する目的で確認調査として対応している。

2. 調査の体制

平成16年度における久留米市内遺跡群に関する調査の体制は次のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川 集充			
調査総括：教育文化部	部長	石原 廣士	次長	久保田 明	
文化財保護課	課長	関 知彦	課長補佐	堤 諭吉	
文化財保護課主査	立石 雅文	事務主査	松村 一良	大石 昇	
庶務担当	植藤 節子				
事前審査・調整担当	大石 昇	近澤 康治	神保 公久		
調査担当	水原 道範	白木 守	塚本 映子	小澤 太郎	
	神保 公久	熊代 昌之			
整理担当	畠中 和子	米澤美詠子	香椎 佳子		

発掘調査臨時職員

朝山 恵子・今村美津子・大坪 進・大淵 文子・椎島ミドリ・河野 好子・小林美佐代
佐伯 孝子・田代 圭子・田代 俊子・田山 和男・塚本 明美・堤 嘉博・野口カヲル
廣木 誠・藤井佳都子・森 啓恵・森 美佐子・森 美代子・安本カズ子・行武ツトミ

出土品整理臨時職員

江口 里織・丸山裕見子・森山知恵子・吉田 麻矢

第1表 平成15・16年度久留米市内遺跡群発掘調査一覧表

年	遺 跡 名	回数	所 在 地	調査原因	面積	調査期間	担当者	備 考
15	山下遺跡	4次	東合川三丁目1379-1	確認調査	197㎡	4月30日～5月22日	小澤	本 報 告
15	櫛原侍屋敷遺跡	5次	櫛原町125-3	確認調査	40㎡	5月7日～5月9日	近澤	本 報 告
15	西小路遺跡	9次	東合川町463-1外	確認調査	65㎡	5月27日～6月5日	白木	本 報 告
15	浦山古墳群	4次	上津町1391-1外	専用住宅建設	400㎡	10月29日～12月22日	神保	本 報 告
15	速水遺跡	2次	大石町98-1	確認調査	61㎡	12月25日～1月8日	白木	本 報 告
16	中原遺跡	1次	梅濱町566-1の一部	専用住宅建設	30㎡	4月7日～4月9日	近澤	本 報 告
16	二本木遺跡	18次	御井町561-4	専用住宅建設	28㎡	6月8日～6月10日	近澤	本 報 告
16	久留米城外郭遺跡	8次	篠山町242-3	専用住宅建設	67㎡	6月14日～6月30日	近澤	概要報告
16	京阪侍屋敷遺跡	4次	城南町7-5, 7-6	専用住宅建設	21㎡	9月30日～10月7日	大石	概要報告
16	念仏塚遺跡	5次	安武町安武本2498-1	農業用倉庫建設	75㎡	3月1日～3月16日	塚本	

(関連分：調査順)

Ⅱ. 山下遺跡（第4次調査）

1. 調査に至る経過

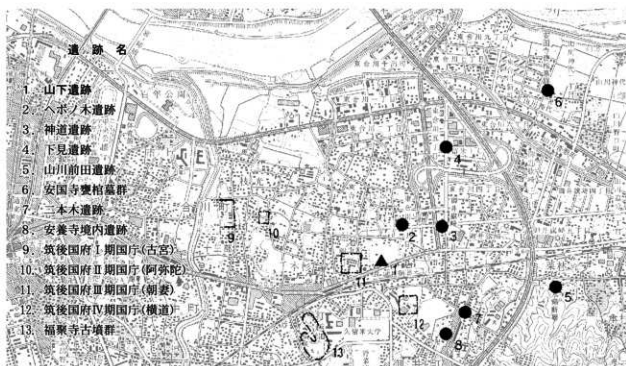
本遺跡は久留米市東合川三丁目字山下1379-1に所在する。平成15年1月27日付で、地権者の兼貞物産株式会社より、盛土造成に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認依頼が提出された。当該地の北に隣接して展開するヘボノ木遺跡からは、弥生時代～中世にかけての多種多様な遺構と多量の遺物が出土しており、当該地でも遺構と遺物の検出が見込まれた。試掘調査の結果、良好な状況で遺構を確認した。今回の開発は、東隣接地と同一レベルにするために、高さ約2mの盛土を施し、その上に作業施設を建設するというもので、盛土で保護されるため、建物の基礎は遺構面には影響を与えない。しかしながら、ヘボノ木遺跡と南側の断層崖の中間に位置する当該地への遺構の広がりを把握するために、地権者側と協議の結果、確認調査を実施することで合意した。

調査は、平成15年4月30日より開始、同年5月22日に終了した。なお、対象面積は1,758㎡で、そのうち調査面積は、197㎡である。

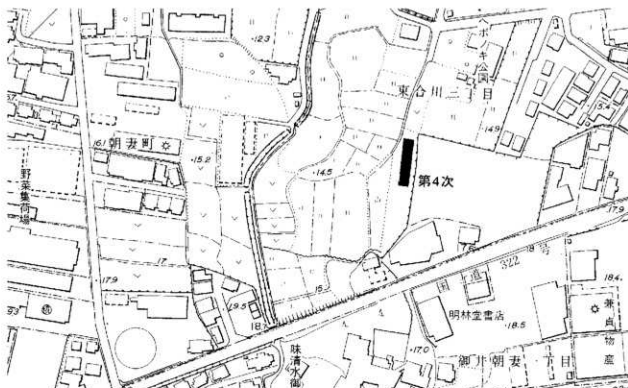
2. 位置と環境

久留米市街地の東部、九州自動車道久留米インターチェンジの南西約600mに位置する。遺跡は、高良山（標高312.3m）から西方へ派生する低台地上に立地し、標高は概ね12～14mを測る。遺跡のすぐ南側には断層崖があり、そこを湧水点とする小河川は北流し、筑後川に合流している。遺跡のすぐ西側には井田川、東側には中谷川が流れている。

同一の低台地上では、北側に隣接してヘボノ木遺跡がある。本遺跡との間には、伝路とも推定されてい



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

る道路状遺構が検出されている。同遺跡は、弥生時代～中世に至る複合遺跡である。中心となるのは、8世紀後半～9世紀初頭にかけての時期で、この頃の大形建物群や出土物をめぐっては、寺院説や官衙説などがある。また、井田川を挟んだ西側一帯には、7世紀末～12世紀後半にかけて約500年間にわたって存続した筑後国府跡が展開している。長年にわたる発掘調査の結果、国庁を西から東へ3回移転させていることが判明している。また、神道・下見遺跡などでは、8世紀後半～9世紀代にかけての集落跡が調査されているなど、周辺地域は奈良～平安時代における筑後国の中枢地域として栄えている。

3. 調査の記録

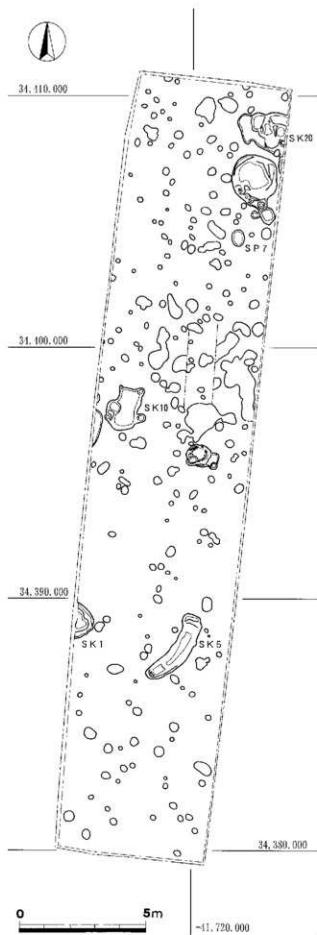
(1) 調査の概要

調査地の地形は、西側に井田川が北流するため、西側に緩やかに傾斜している。また、北側の筑後川に向かい標高を徐々に下げてゆく。遺構は、高さ約2mの盛土に保護されるため、南北に細長い対象地南側に31m×6m程の南北トレンチを設定した。遺構は平面確認を主な調査の目的とし、必要に応じて主要な遺構を掘り下げた。

写真記録は、カラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。調査区全体の撮影には、気球写真を使用し、こちらはカラーリバーサル・モノクロームともに6×6で撮影した。図面記録については、遺構掘り下げ完了個所から順次、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」で測量した。

(2) 遺構の概要

基本層序は、耕作土、床土の順で褐色土上面に達する。遺構面までの深さは約20～40cmを測る。調査区全体に遺構が分布しており、土坑5基と多数のピットを検出している。調査区が狭いため、ピットが掘立柱建物の柱穴となるかどうかは不明である。

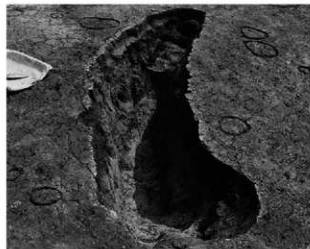


第3図 山下遺跡第4次調査遺構配置図 (1/150)

土坑・ピット

SK1 (第9図) 調査区南側西壁沿いで検出した。調査区外に延びるため、平面プランは定かではないが、現状では楕円形を半截したような形状である。また、二段掘りを呈する。その規模は、長軸1.45m、短軸0.68m、深さ22cmを測る。出土遺物には、土師器 (蓋・皿・甕)、須恵器 (坏・甕) などがある。

SK5 (第4・9図) 調査区南側で検出した。南北に細長い、バナナのようにやや湾曲する平面プランの土坑で、両端は階段状に徐々に標高が下がり、中央部が最も深くなっている。長さ3.11m、幅0.78m、最大深0.83mの規模を測る。遺物のほとんどは、検出面下約20cmより上部から出土しており、土坑廃絶時に投棄されたものと思われる。出土遺物には、土師器 (坏・皿・高坏・甕・製塩土器?)、須恵器 (蓋・坏・甕)、青磁細片、弥生土器、黒曜石剥片などがある。



第4図 SK5完掘状況 (北から)

SK10 (第5・9図) 調査区中央部西寄りで検出した。幾つかのピットに切られているが、平面プランは隅丸長方形である。その規模は、長さ約1.7m、幅約1m、深さ26cmを測る。出土遺物には、土師器 (碗・小皿)、内黒土器、須恵器 (猿面硯・甕)、弥生土器、石製品 (石鍋) などが見られる。特に、床面近くで伏せられた状態で検出した猿面硯は、ほぼ完形での出土であった。



第5図 SK10完掘状況（西から）



第6図 SK20完掘状況（東から）



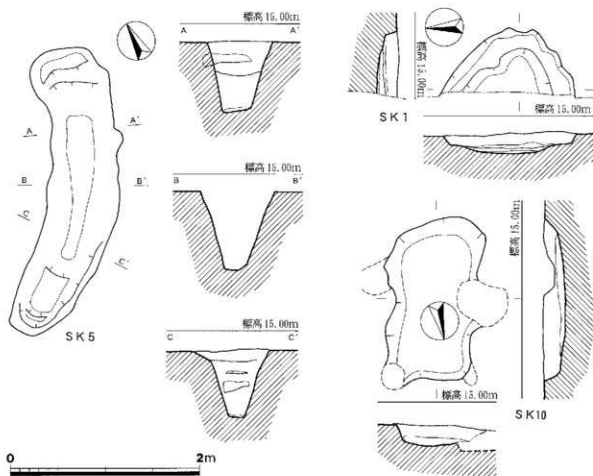
第7図 SP7遺物出土状況（北から）

SK20（第6図） 調査区北東隅で検出した。調査区外へ延びるため、平面プランは定かではない。また、底面は凹凸が著しく、土坑と言うよりも、ピットが重複している状態を誤認したものかもしれない。平面プランを長方形とした場合、長さ約1.6m以上、幅約2.4m、深さ約55cmの規模を測る。出土遺物には、土師器、須恵器、黒耀石剥片などがある。

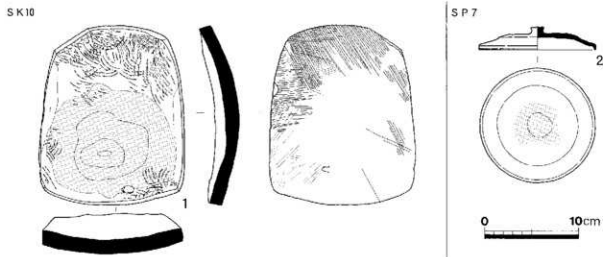
SP7（第7図） 調査区北東部で検出した浅いピットである。平面形は楕円形に近い形状をなし、その規模は、長さ60cm、幅40cm、深さ5cmを測る。覆土中から須恵器の坏蓋（転用碗）が出土している。



第8図 調査区全景（西上空から）



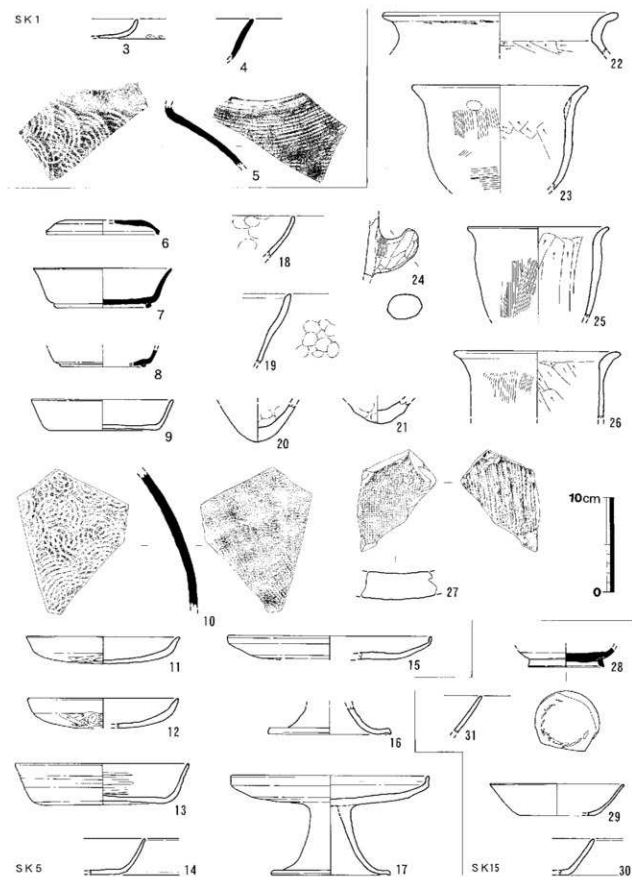
第9図 土坑実測図（1/40）



第10図 山下遺跡第4次調査出土遺物実測図①（1/4）

（3）遺物の概要

出土遺物には、土師器（蓋・坏・碗・皿・小皿・高坏・甕・製塩土器？）、須恵器（坏・蓋・甕）、黒色土器（内黒）、転用硯（坏蓋・甕胴部）、輸入陶磁器（白磁・青磁碗）、瓦、石器、石製品（石鏃）等がある。



第11図 山下遺跡第4次調査出土遺物実測図②(1/4)

第2表 山下遺跡第4次調査出土遺物観察表

発掘期	出土遺物	種別	形状	保存状況	法量 (cm)		色調				調		胎土 [石目]	焼成	備考	登録番号	
					口径 [高]	底径 [厚]	外面	内面	外面 (凸面)	内面 (凹面)	底部 (天昇部)						
1 第10期	S K 10	須恵器	鏡面硯	ほぼ完形	[18.0]	[14.45]	[1.5]	灰白	灰白	ハケス	青海波文タタキ	一	砂粒	良	須恵器大甕の転用硯	200303 -00029	
2 第10期	S P 7	須恵器	蓋	完形	12.4	天井径 8.3	2.5	灰白	浅黄	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	細砂粒	良	転用後、内面中央部内溝	200303 -00034	
3 第11期	S K 1	土師器	皿	口縁部破片	不明	不明	2.2	灰黄褐	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	手持ちヘラケズリ	精良	良		200303 -00001	
4 第11期	S K 1	須恵器	杯	口縁部破片	不明	不明	(4.4)	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	不明	精良	良		200303 -00002	
5 第11期	S K 1	須恵器	壺	胴部破片	不明	不明	(6.3)	黄灰	黄灰	正橋子文タタキ	青海波文タタキ	不明	精良	良		200303 -00003	
6 第11期	S K 5	須恵器	蓋	1/8	12.0	天井径 8.1	1.6	灰白	灰白	回転ヘラケズリナデ	回転ナデ	不定方向のケズリ	砂粒若干	良		200303 -00013	
7 第11期	S K 5	須恵器	杯	9/10	14.6	10.3	4.3	灰白へ灰黄	灰白	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	精良	良		200303 -00015	
8 第11期	S K 5	須恵器	杯	底面破片	不明	9.0	(1.9)	灰	灰白	回転ナデ	回転ナデ	不明	精良	良		200303 -00014	
9 第11期	S K 5	土師器	杯	底面3/4	15.0	12.3	3.3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	精良	良	体部と底部の境は差取り	200303 -00005	
10 第11期	S K 5	須恵器	壺	胴部破片	不明	不明	(14.4)	灰白	灰白	平行文叩き	青海波文タタキ	不明	砂粒	良		200303 -00016	
11 第11期	S K 5	土師器	皿	1/2	16.2	—	3.0	灰黄褐	にぶい	橙	回転ナデ	回転ナデ	手持ちヘラケズリ	精良	良	2次的に被焼。 製土器か?	200303 -00008
12 第11期	S K 5	土師器	皿	1/4	16.0	—	3.2	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	手持ちヘラケズリ	精良	良		200303 -00007	
13 第11期	S K 5	土師器	杯	口縁部1/4	18.4	12.0	4.5	浅黄橙	橙	回転ナデ	ヨコミガキ	回転ヘラケズリ	精良	良	体部と底部の境は差取り	200303 -00006	
14 第11期	S K 5	土師器	杯	1/10	不明	不明	3.8	橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	砂粒	良	体部と底部の境は差取り	200303 -00004	
15 第11期	S K 5	土師器	高杯	杯部1/4	21.6	14.8	(2.6)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	精良	良		200303 -00010	
16 第11期	S K 5	土師器	高杯	杯部1/3	不明	13.1	(3.1)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	良		200303 -00015	
17 第11期	S K 5	土師器	高杯	1/2弱	21.0	12.6	10.5	橙	橙	回転ヘラケズリナデ	回転ナデ	—	精良	良		200303 -00011	
18 第11期	S K 5	土師器	鉢	口縁部破片	不明	不明	(4.5)	浅黄橙	浅黄橙	オサエナデ	オサエ	不明	精良	良	2次的に被焼。 製土器か?	200303 -00026	
19 第11期	S K 5	土師器	鉢	口縁部破片	不明	不明	(7.4)	浅黄橙	浅黄橙	オサエナデ	オサエ	不明	精良	良	丹塗彩装らしい。2次に被焼、製土器か?	200303 -00027	
20 第11期	S K 5	土師器	鉢?	底面破片	不明	不明	(4.1)	橙	橙	オサエナデ	オサエ	オサエ	砂粒多い	良		200303 -00022	
21 第11期	S K 5	土師器	鉢?	底面破片	不明	不明	(2.5)	橙	橙	オサエナデ	オサエ	オサエ	砂粒	良	製土器か?	200303 -00023	
22 第11期	S K 5	土師器	壺	1/6	25.0	—	(4.5)	橙	にぶい	橙	ヨコナデ	ヨコナデ+ヘラケズリ	不明	砂粒若干	良		200303 -00017
23 第11期	S K 5	土師器	壺	1/4	18.6	—	(11.1)	橙	橙	ハケスナデ	ヘラケズリ+ヨコナデ	不明	砂粒若干	良		200303 -00018	
24 第11期	S K 5	土師器	壺	把手破片	不明	不明	不明	橙	橙	ハケスナデ+オサエ	ナデ	不明	砂粒	良		200303 -00021	
25 第11期	S K 5	土師器	壺	1/3	15.0	—	(9.7)	橙	灰黄褐	ヨコナデ+ハケス	ヨコナデ+ヘラケズリ	不明	砂粒	良		200303 -00019	
26 第11期	S K 5	土師器	壺	口縁部2/3	17.6	—	(7.1)	明赤褐	にぶい	橙	ヨコナデ+ハケス	ヨコナデ+ヘラケズリ	不明	砂粒	良		200303 -00020
27 第11期	S K 5	瓦	平	破片	不明	不明	[2.9]	浅黄橙	浅黄橙	(奥田岡田印)	(布目)	—	細砂粒	不良		200303 -00028	
28 第11期	S K 15	須恵器	杯	底面2/3	不明	高台径 8.0	(2.1)	黄褐	灰黄褐	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラ切	精良	良		200303 -00032	
29 第11期	S K 15	土師器	杯	1/8	14.2	8.1	3.4	にぶい黄褐	にぶい黄褐	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切	精良	良		200303 -00031	
30 第11期	S K 15	土師器	杯	口縁部破片	不明	不明	3.9	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	精良	良	体部と底部の境は差取り	200303 -00030	
31 第11期	S K 15	青磁	碗	口縁部破片	不明	不明	(4.0)	灰オリーブ	灰オリーブ	回転ナデ	回転ナデ	不明	黒色砂粒若干	良	越州窯系	200303 -00033	

詳細は、出土遺物観察表 (第2表) に譲るとして、ここでは、代表的なものについて補足しておきたい。

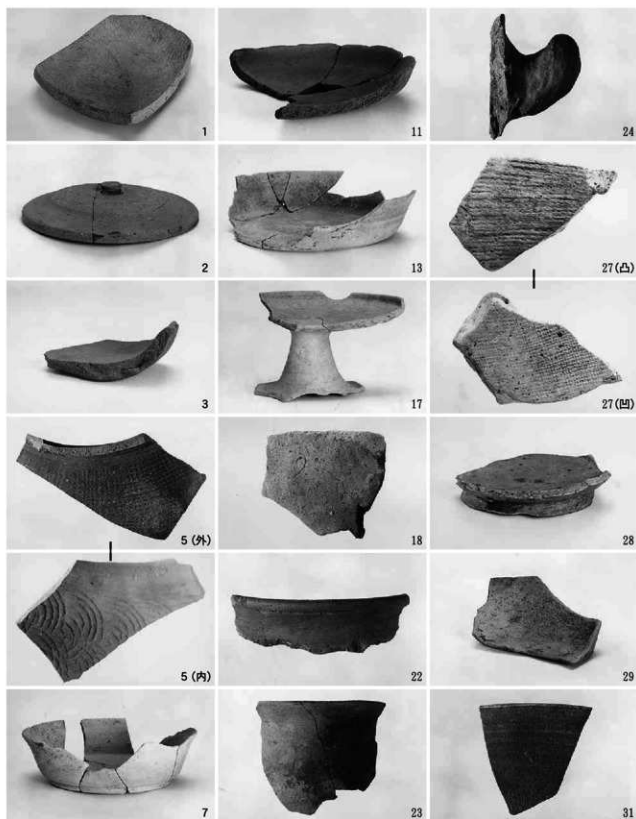
1は、S K 10出土の鏡面硯である。左上を一部欠損しているものの、大形で、ほぼ完形である。須恵器大甕の胴部片を転用し、これをノミ状工具によって形を整え、側面を丁寧に磨き上げ、内側外周を緩く面取りしている。海の部分は広く窪み、内側の青海波状の叩きが消えてしまうまで、円滑に磨耗している。

2は、S P 7から出土した須恵器坏蓋の転用硯で、完形品である。天井部は回転ヘラケズリされ、嘴状の口縁部が比較的に明瞭である。

4. ま と め

今回の調査は、調査範囲も狭く、遺構の平面確認を主眼に実施しているために得られた情報量が少ないものの、土坑からの出土遺物は、8世紀後半～9世紀代のものが中心で、ヘボノ木遺跡の大形掘立柱建物

群と時期的には並行しており、これらとの関連が想起される。位置的にも一連の遺跡であったものと思われる。転用硯や猿面硯の出土は、関連施設が断崖崖付近にまで広がっていた可能性を示唆するものであろう。



第12図 出土遺物（写真）

III. 榑原侍屋敷遺跡（第5次調査）

1. 調査に至る経過

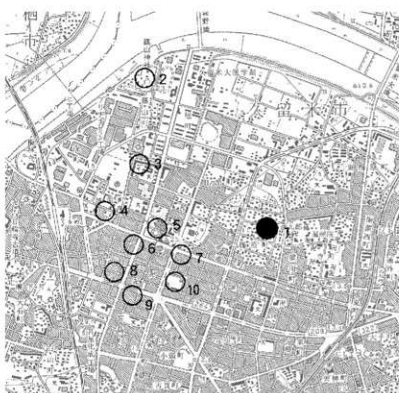
本調査は、平成15年2月25日に大和建設株式会社代表取締役渡邊一先生より久留米市榑原町125-3番地における宅地分譲及び駐車場地下げに伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出された事に始まる。

依頼地は周知の遺跡である榑原侍屋敷遺跡の中央部東端部に位置するため、久留米市教育委員会文化財保護課は試掘調査を平成15年3月4日に実施し、奈良時代の遺構・遺物等を検出した。しかしながら、今回の開発が擁壁及び駐車場部分の造成であり、道路に面し且つ範囲も狭いため、駐車場掘削着工時に立会調査を行うことで平成15年3月5日付けの文書で回答した。

平成15年4月またま近くを通りかかった際、擁壁部分の掘削が道路から2m程までなされており、その部分に江戸時代の遺構等が露出した状態になっているのを発見したため、大和建設株式会社と再度協議を行い、駐車場部分の掘削前に、埋蔵文化財の確認調査を急遽行う事で合意し、5月2日に埋蔵文化財発掘調査の依頼が出され、平成15年5月7日から延べ3日間で調査を実施することとなった。調査は平成15年5月7日から5月9日まで実施した。

2. 位置と環境

榑原侍屋敷遺跡は筑後川左岸の低台地上に位置し、標高12～13mを測る。久留米市役所や裁判所、法務局がある官庁地区の東端に位置し、周辺には市長公舎・教育クラブ・医師会会館などがある住宅地区にあたる。江戸時代には、中級の武士団で構成される武家屋敷地区にあたっている。



遺跡名

1. 榑原侍屋敷遺跡
2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城外郭遺跡
4. 京極侍屋敷遺跡
5. 久留米城下町遺跡（町替町）
6. 久留米城下町遺跡（魚屋町）
7. 久留米城下町遺跡（米屋町）
8. 庄島侍屋敷遺跡（第1・3次）
9. 庄島侍屋敷遺跡（第4次）
10. 久留米城下町遺跡（二本松町）

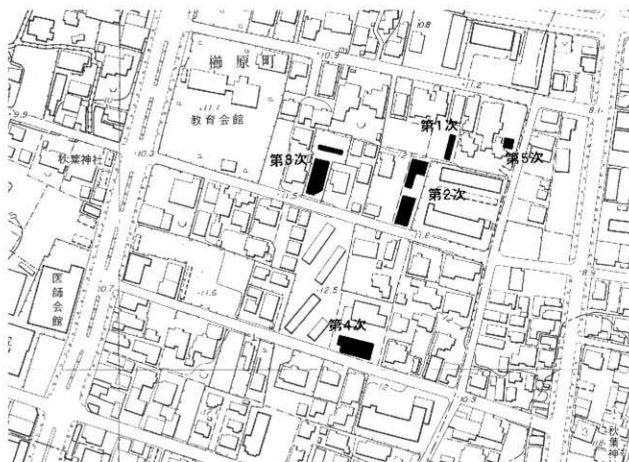
第13図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

天正十五（1578）年の豊臣秀吉の九州平定後、毛利秀包が久留米城に入るが、この時期の城下町の姿については殆ど不明である。慶長五（1600）年の関ヶ原の戦いでやぶれた毛利家が、中国地方に退去すると翌慶長六年、田中吉政が筑後一円の大名として入国し、柳川城に入り、久留米城には次男則政が在城し、久留米城や城下町の形成が成されたものと推定される。

田中家の断絶後、元和七（1621）年に入国した有馬豊氏は、久留米城と城下町の建設に取り掛かり、廃屋同然の久留米城再建と共に、外郭を巡らす外堀の建設や城下町並びに寺町の建設を行なっている。本遺跡である櫛原侍屋敷は、この時に造られた武家屋敷で、現在の町並みの骨格はこの有馬時代に形成されたものである。

久留米城に関する近世遺跡の調査は、平成元年度の三本松遺跡を発端とし、これまでに本調査や確認調査を含めると約40件の調査が行なわれている。櫛原侍屋敷遺跡の西側には呉服町・阿替町・魚屋町・田町・三本松町・米屋町などの各城下町遺跡や外郭・庄島小路・京隈小路の武家屋敷遺跡があり、南側には通町遺跡・十間屋敷遺跡が広がっている。東側一帯には、下級武士で構成される御先手組屋敷や22ヶ寺が集まる寺町などが位置している。

当該地は延寶八年（1680）の古絵図によると長町三丁目から北に四筋入った奥の下坂家にあたり、櫛原侍屋敷遺跡第1次調査は、本調査地点の南西側隣接地であり、第1次調査地点の南西側隣接地が第2次調査地点、第3次調査地点は本調査地点の南西約130mで、第4次調査地点は南側約140mに位置している。

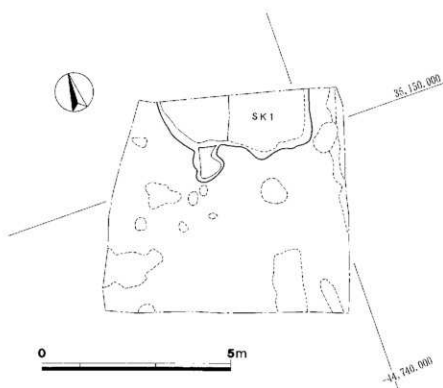


第14図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

3. 調査の記録

（1）調査の概要

駐車場で掘削される予定の40㎡を対象とし、平成15年5月7日から重機による表土剥ぎを開始する。遺構密度は薄く土坑1基と近代のピットを検出したに過ぎない。表土剥ぎは半日で終了し、作業員さんを入れ遺構検出作業を行う。調査期間の関係上掘り下げは土坑のみを行うこととした。8日は終日土坑の掘り下げ作業を行い、土坑の西側部分を床面まで掘り下げる。併行して座標移動及びトータルステーションで実測を開始する。9日に全体写真のための清掃を行い写真撮影。実測も終了し



第15図 柳原侍屋敷遺跡第5次調査遺構配置図（1/100）



第16図 調査区全景（南から）

機材を撤収し調査を終了する。なお記録写真はカラープリント35mmのみで撮影した。また遺構図面は遺跡調査汎用システム「カタタ」をトータルステーションを用いて作成し、測量データは「カタタ3DC」で記録・保存している。

（2）遺構の概要

層序は表土が約30cm、客土30cm、地山混入の灰色土20cm、表土下80cmで黄色粘質土地山面に達する。今回の調査は、試掘段階で奈良時代の遺構・遺物を検出していたものの江戸時代後期～明治の土坑1基と明治時代以降のピットを検出したのみであった。

土坑

SK1（第17・18図） 調査区の北西部で検出した。調査区外へ拡がり全容は不明である。長軸約4m、短軸約1.6m分を検出した。南側に長さ約80cm、幅約70cm、深さ約20cmを測る突出部分があるが、ピットと切りあっているものと思われる。上面確認では前後関係は明らかにできなかった。恐らく平面形が隅丸長方形を呈するものと推定され、短軸が約3m程になるものではなかろうか。深さは約70cmを測る。床面は半分しか掘り下げていないが、ほぼ平坦である。埋土は上層が褐色土で中層に黄褐色土、下層が暗褐色土であった。土坑内埋土から江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器や瓦、釘などの鉄製品、硯などが出土している。



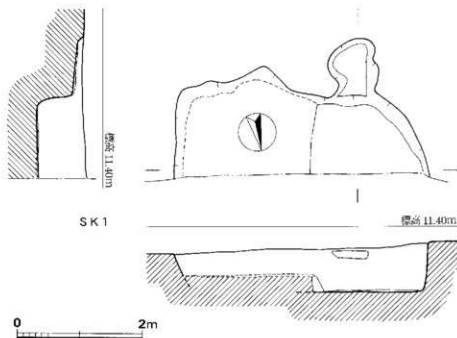
第17図 SK1 完掘状況（西から）

（3）遺物の概要

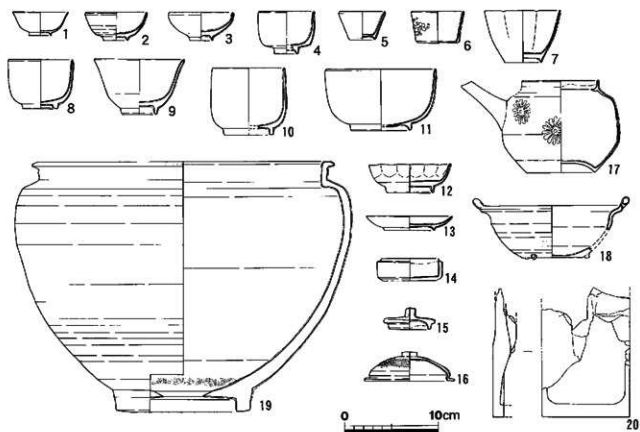
出土遺物は、

SK1 から出土した近世陶磁器や瓦・釘である。

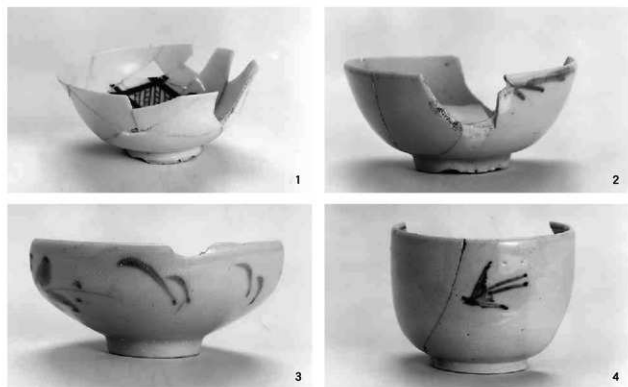
パンコンテナー2箱分出土しているが、土坑の半分しか掘りあげておらず、図示できたものは20点であった。詳細は遺物観察表（第3表）に記している。



第18図 SK1 実測図（1/60）



第19図 榑原侍屋敷遺跡第5次調査出土遺物実測図（1/4）



第20図 出土遺物（写真①）



5



6



7



8



9



10



11



12

第21図 出土遺物（写真②）



13



14



15



16



17



18



19



20

第22図 出土遺物 (写真③)

4. ま と め

今回の調査では、土坑1基のほか数個のピットを検出したに過ぎない。第5次調査は確認調査であり、調査面積も狭かったため当初、試掘調査で検出されていた奈良時代と思われる遺構・遺物は残念ながら検出できなかった。周辺部の調査においても、時期不明の遺構及び奈良～中世の遺物が検出されているが、遺構に伴った遺物は検出されていない。恐らく江戸時代に侍屋敷を造成する際、削平されたものではなかろうか。土坑も一部を掘り下げたに留まったが、江戸時代末～明治時代にかけての遺物が出土している。

今後周辺部のさらなる調査で、奈良時代～中世にかけての遺構等が検出される可能性は大きいものと考えられる。

第3表 榎原侍屋敷遺跡第5次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	器種	法量			装 飾		備 考	登録番号
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	絵付・釉薬	文様		
1 第19・20図	S K 1	小碗	5.8	2.4	2.5	染付			200304-00001
2 第19・20図	S K 1	小碗	6.5	2.5	3	染付			200304-00002
3 第19・20図	S K 1	小碗	[6.9]	2.4	3	染付			200304-00003
4 第19・20図	S K 1	小碗	[6.0]	[2.6]	4.5	染付			200304-00004
5 第19・21図	S K 1	小碗	4.9	2.6	3	白磁			200304-00005
6 第19・21図	S K 1	小碗	[5.6]	[4.2]	3.35	褐釉			200304-00006
7 第19・21図	S K 1	碗	[8.0]	[3.9]	5.5	染付	唐草		200304-00007
8 第19・21図	S K 1	碗	[6.8]	[3.6]	5.2	染付			200304-00008
9 第19・21図	S K 1	碗	[9.6]	3.8	5.8	染付			200304-00009
10 第19・21図	S K 1	碗	[7.4]	[5.0]	7.1	染付	宝文		200304-00010
11 第19・21図	S K 1	鉢	[11.7]	[6.4]	6.5	染付			200304-00011
12 第19・21図	S K 1	皿	[8.6]	4.95	3.1	染付			200304-00012
13 第19・22図	S K 1	皿	[9.0]	5.3	1.5	染付			200304-00013
14 第19・22図	S K 1	合子	[6.0]	[5.5]	2.4	白磁			200304-00014
15 第19・22図	S K 1	蓋	5.4	4.4	2.3	染付			200304-00015
16 第19・22図	S K 1	蓋		[9.5]	3.1	染付			200304-00016
17 第19・22図	S K 1	急須	[8.2]	7.3	9.7	緑釉	菊花文		200304-00017
18 第19・22図	S K 1	鍋	[15.2]	6.3	6.4	灰釉		外底部に「メ」の墨書	200304-00018
19 第19・22図	S K 1	壺	[32.0]	[14.2]	26.6	白釉	松絵		200304-00019
20 第19・22図	S K 1	硯	(13.8)	9.2	(2.5)				200304-00020

IV. 西小路遺跡（第9次調査）

1. 調査に至る経過

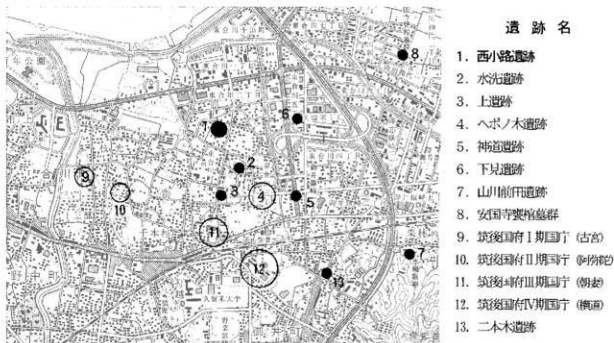
本調査は、平成15年4月4日に、地権者である[]氏より久留米市東合川町字西小路462・463合併1外2筆における、共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに端を発する。依頼地は周知の遺跡である西小路遺跡の範囲内に含まれていることから、4月16日に試掘調査を実施した。その結果、最も東側に位置する第3トレンチでは近世の溝が確認されたものの、西側の共同住宅建設予定地にあたる第1・2トレンチでは、土師器や縄文土器の出土が見られたのみで遺構は確認されなかった。地形から判断しても遺跡の縁辺部にあたり、出土した遺物も流れ込みによるものと考えられたが、建物の基礎がパイル打ちでもあり、代理人との協議の結果、遺物の堆積状況を把握する目的で確認調査を実施することで合意した。

調査は共同住宅建設部分の65㎡を対象とし、平成15年5月27日から同年6月5日まで実施した。

2. 位置と環境

西小路遺跡は、久留米市街地の東方3.5kmに位置する。南東2kmには耳納連山西端の高良山（312m）・吉見岳（147m）などの山々を望む。吉見岳から北西には、洪積層の低位段丘が延びており、その先端部の通称「和泉台地」上に西小路遺跡は展開する。遺跡の北方1kmには阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川である筑後川が西流し、台地はこの筑後川の氾濫原に向かって突き出した形態をとる。標高は13m前後を測る。この耳納連山から派生した低位段丘上には多くの遺跡が存在し、特に縄文遺跡は久留米市内でも有数の密集度を誇る。

西小路遺跡周辺には、東を中谷川、北を筑後川、西を高良川に囲まれた台地上の半径500mほどの範囲に、早期～晩期に及ぶ縄文集落が集中しており、久留米市国分町に展開する日渡遺跡群と並んで、市内で

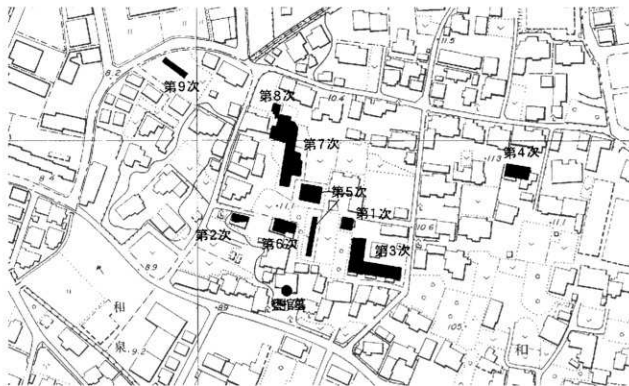


第23図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

も最大規模の縄文集落が形成されている。簡単に列挙してみると、水縄断層系の段丘上段に展開する横道遺跡群では後期を除く全時期の遺物が認められ、中でも筑後地方最古段階に位置づけられる草創期の隆起線文土器や続円孔文土器の存在は注目に値する。一方の断層崖下には水洗遺跡（前期）、ヘボノ木遺跡（早～晩期）、神道遺跡（後・晩期）、上遺跡（早・晩期）、朝妻遺跡（前・後期）、西小路遺跡（後・晩期）といった遺跡の分布が見られるが、各時期を通して遺構が継続する遺跡は見られず、巨視的に見れば時期を違えて居住域が転々と移り変わる様相が窺える。また近年の神道遺跡第19次調査では西平～三万田式段階の、西小路遺跡第7次調査では御願式段階の堅穴住居が確認された。特に後者では住居内から線刻土器や石冠・石棒も出土しており、精神文化の側面からも注目される。

弥生時代では、ヘボノ木遺跡や二本木遺跡で中期後半の短期間に集落が形成され、焼失住居や丹塗り土器の出土を垣間見ることができる。また北東1.4kmには同時期の墓域である安国寺甕棺墓群（国史跡）が営まれる。終末期には朝妻遺跡やヘボノ木遺跡で舶載鏡を伴う堅穴住居が存在し、豊富な湧水を管理した集団の存在が見え隠れする。南西1kmには終末期～古墳時代初頭にかけて幅6m、長さ300m以上にも及ぶ大溝が直線的に掘られ、周囲に100棟以上の堅穴住居が営まれる古宮遺跡が存在する。これに続く古墳時代には、耳納山地北麓に数多くの群集墳が築かれるが、その大半が開墾によって消滅しており、現存する古墳は極めて少ない。また集落遺跡についても実態はほとんど判明していない。

律令期には、西小路遺跡の南西に広がる段丘上に筑後国府が営まれ、7世紀末から12世紀後半に至るまで古代筑後の政治・経済・文化・交通の中心地であった。その東方に展開するヘボノ木遺跡や神道遺跡も、国府と密接な繋がりを持つ遺跡群である。中世から近世にかけては、西小路遺跡においてもこれまでの調査によって有力者層の屋敷地の存在が想定されるものの、断片的な遺物の出土のみであり、実態を把握するまでには至っていない。



第24図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

3. 調査の記録

（1）調査の概要

共同住宅建設予定地の65㎡を対象とし、平成15年5月27日から重機による表土剥ぎを開始する。遺構は認められず、黒色土の包含層のみが認められる。翌28日に発掘器材を搬入し、作業員を投入して包含層の掘り下げを開始。この日、久留米市で最高気温31.3度（当日の日本最高気温）を記録する。また30日には、この時期としては異例の台風4号が接近する。6月2日より再び包含層の掘り下げを行い、3日に調査区の全景写真撮影を実施。4日に遺跡調査汎用システムを用いて遺構の測量を行い、5日には発掘器材を撤収し、再び重機で調査区を埋め戻して現地での作業を終了する。台風の影響もあり、実働7日間の調査であった。

なお、記録写真はカラーリバーサル35mm、モノクローム35mm・6×7で撮影した。また遺構図面は、土層図を水糸メッシュ法によって作成した以外は、遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて作成し、測量データは「カタタ3DC」で記録・保存している。

（2）遺構の概要

調査区は台地の縁辺部にあたり、調査区の東端において溝状の遺構1条を検出した以外には明確な遺構は認められなかった。また東半部では数ヶ所から硬化面が検出されたが、性格や時期については明らかでない。

基本層序（第27図）

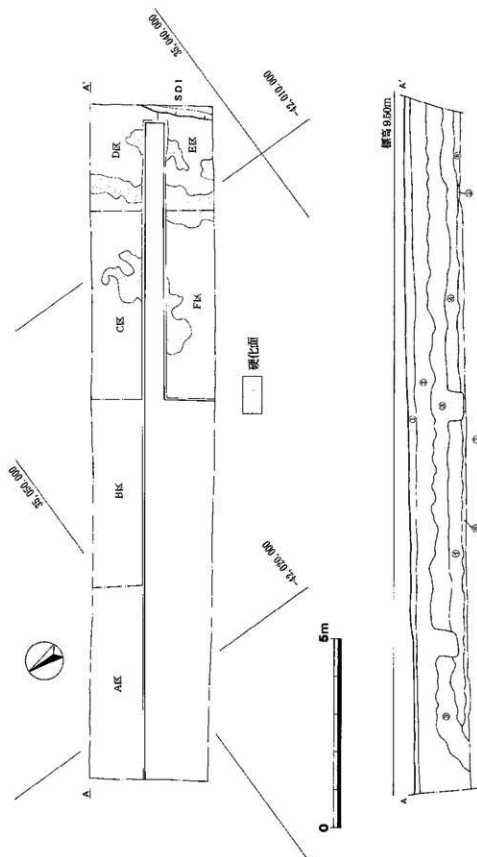
現耕作土（①層）の下に約40cmにわたって旧耕作土（②層）の堆積が認められる。③・④層の黒褐色土中には縄文土器から土師器まで幅広い遺物が包含される。⑤層の黒色土の上面はかなり硬化しており、硬化面の下からは土師器の出土が認められる。また⑥層の黒色土中からも縄文土器に混じって土師器の出土



第25図 調査区全景（南東から）



第26図 調査区全景（北西から）



第27図 西小路遺跡第9次調査遺構配置図および北壁土層図 (1/100)

が認められる。⑦層の黒褐色土は周辺の調査成果から判断して縄文時代の包含層と考えられるが、⑥層を除去した段階で湧水が著しかったために掘り下げを断念しており、よって縄文期単独の包含層とする確証はない。ボーリングステッキによる調査では⑦層は30cm程度堆積しており、その下が地山面となる。なお西端の落ち込みは、昭和30年代に竹やぶを伐採した時の掘り込みと考えられる。

溝状遺構

SD1（第30図） 調査区東端で検出した溝状の遺構である。諸般の事情で調査区を拡張することができず、帰属時期も含めて果たして溝となり得るか疑問が残るものでもある。埋土は黒色土で出土遺物は縄文土器のみであるが、⑥層の掘り下げ過程でプランを確認しており、時期は今一つ判然としない。

硬化面（第31図）

調査区東半部の④層を除去した段階で硬化面を検出した。硬化部分は非常に薄く、また広がりも不規則であることからブロック状の流れ込みの可能性も考えられるが、検出した範囲の硬化面はほぼ同一レベルであり、一時期の生活面とも考えられる。硬化面下からは土師器も出土していることから、歴史時代以降の面と考えられるが、詳細な時期は明らかでない。

（3）遺物の概要

全体でパンコンテナー3箱分の遺物が出土した。いずれも④・⑥層中から出土したもので、大枠の出土傾向としては土師器37%、縄文土器53%、石器類9%である。その他の遺物では須恵器、東播系こね鉢、白磁碗、瓦器碗、土鍾などが見られる。詳細については出土遺物一覧表（第6表）を参照されたい。



第28図 調査区北壁西半部土層（南西から）



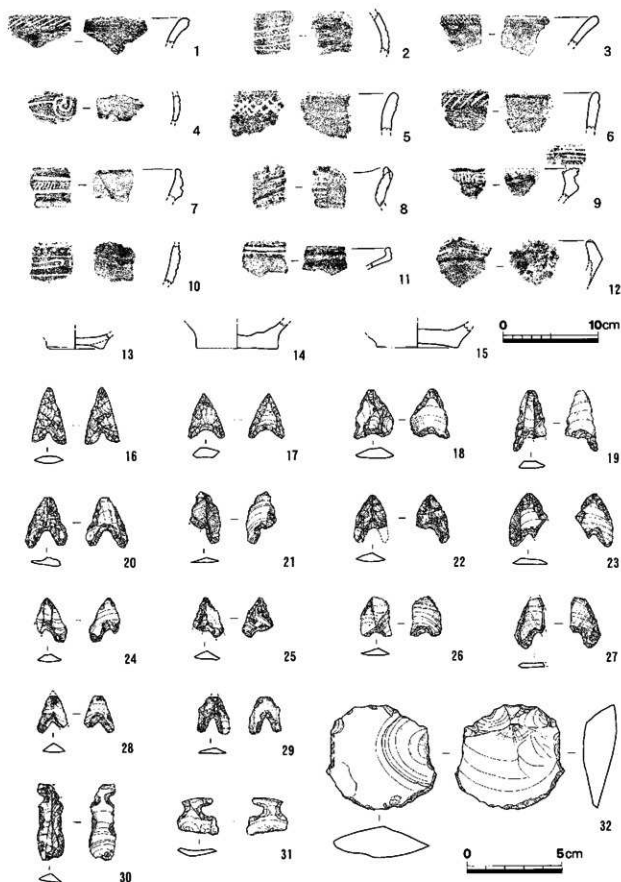
第29図 調査区北壁東半部土層（南西から）



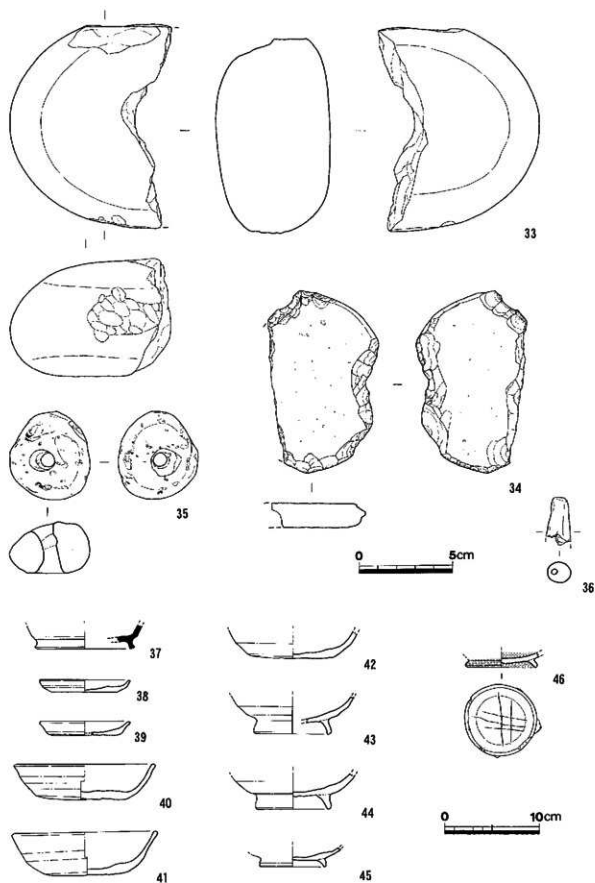
第30図 SD1完掘状況（北東から）



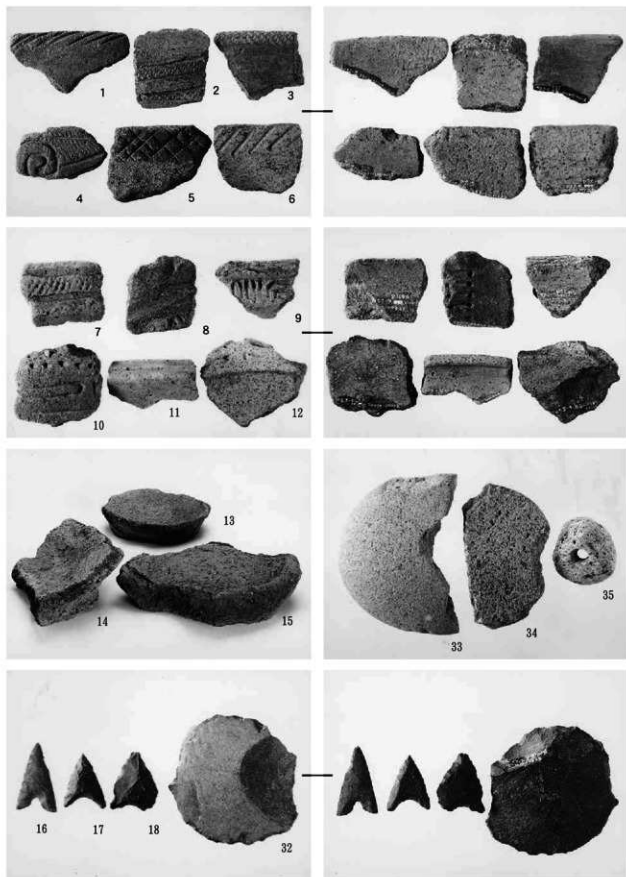
第31図 硬化面検出状況（南東から）



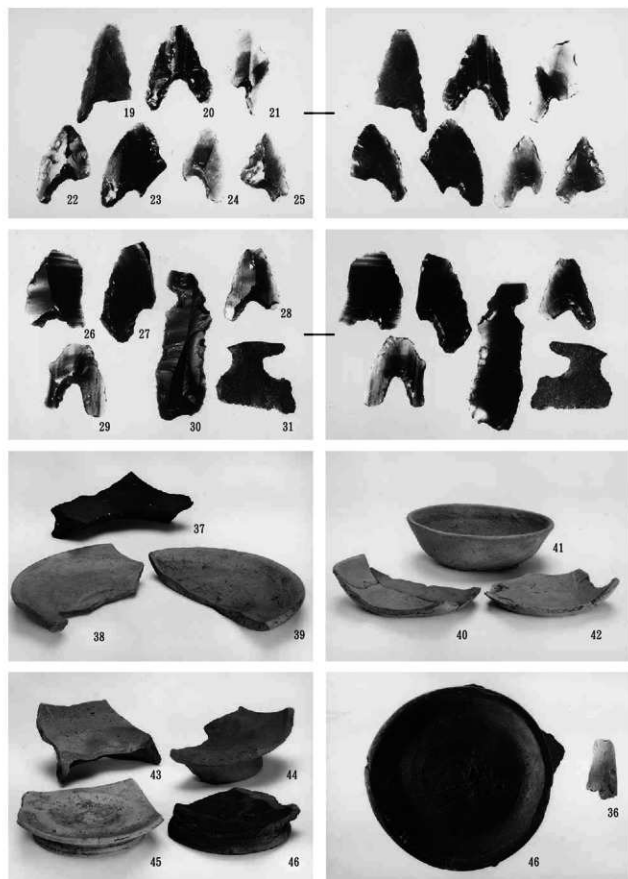
第32図 西小路遺跡第9次調査出土遺物実測図① (1/2, 1/4)



第33図 西小路遺跡第9次調査出土遺物実測図② (1/2, 1/4)



第34図 出土遺物（写真①）



第35図 出土遺物（写真②）

また図示した遺物の詳細は遺物観察表（第4・5表）に記しているの、ここでは代表的な遺物について述べる。1～15は縄文土器である。文様構成から鐘崎式（3・4）、北久根山式（1・5～9）、西平式（2・10）、三万田式（11・12）に大別できる。3は内外面ともに丁寧なミガキを施し、口唇部に擬似縄文を施す。5は口唇部に短直線文を交互に施し、格子目状に仕上げる。8は山部の内面に刺突と凹線とで構成される文様を縦方向に施す。9は口縁端部が逆L字状を呈し、数条の沈線を有する。器形は窺い知れないが北久根山式段階に併行するものであろう。12は浅鉢の山部で、胎土には大量の角閃石を含んでいる。13～15は底部資料で、13は上げ底を呈する。いずれも時期は特定できないが、他の包含層出土遺物から判断して後期中葉～後葉に属するものと考えられる。16～29は石織で、16～18はサヌカイト製、それ以外は全て黒曜石製である。32はサヌカイト製のスクレイパーで、表面の風化が著しい。33は磨り石で被熱によるものか、表面が淡い赤色を呈する。34は安山岩製の円盤で両面には研磨の、側面には敲打による使用痕が認められる。35は穿孔を施した軽石である。37は須恵器の杯。38～46は土師器で、いずれも底部はヘラ切りである。なお41は完存品である。46は黒色土器B類碗で、高台内に線刻による記号状の文様が施される。

第4表 西小路遺跡第9次調査出土遺物観察表（1）

遺物No	出土遺層	材質	器種	法量 (cm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第32・34区	SD1	縄文土器	鉢			(2.9)	にぶい赤褐	にぶい褐	短直線文	ナデ	砂粒 角閃石	北久根山式	200305 -00001
2 第32・34区	SD1	縄文土器	鉢			(4.4)	灰黄褐	にぶい黄橙	沈線文 縄文	ナデ	砂粒	西平式	200305 -00002
3 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(3.1)	黒褐	褐	擬似縄文 ミガキ	ミガキ	細砂粒 角閃石	鐘崎式	200305 -00018
4 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(2.9)	明赤褐	明赤褐	縄文	ミガキ	細砂粒	鐘崎式	200305 -00017
5 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(4.0)	灰黄褐 黒褐	にぶい黄橙	短直線文 ナデ	ナデ	砂粒 角閃石	北久根山式	200305 -00019
6 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(4.0)	にぶい橙	にぶい橙	短直線文 ミガキ	ナデ	砂粒	北久根山式	200305 -00020
7 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(3.4)	にぶい黄橙	灰黄褐	沈線文 擬似縄文	ナデ	砂粒 角閃石	北久根山式	200305 -00021
8 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(4.2)	褐灰	褐灰	沈線文	刺突 凹線	細砂粒	北久根山式	200305 -00022
9 第32・34区	包含層 B区	縄文土器	鉢			(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文	条痕	砂粒	北久根山式段階	200305 -00007
10 第32・34区	包含層 C区	縄文土器	鉢			(4.1)	にぶい黄褐	灰黄褐	刺突文 沈線文	ナデ	砂粒	西平式	200305 -00012
11 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(2.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文 ミガキ	ミガキ	砂粒	三万田式	200305 -00016
12 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢			(4.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文	ナデ	砂粒 角閃石	三万田式	200305 -00006
13 第32・34区	包含層 C区	縄文土器	鉢		6.1	(1.4)	橙	にぶい黄橙	ミガキ ナデ	ナデ	細砂粒		200305 -00013
14 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢		8.6	(3.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	砂粒		200305 -00023
15 第32・34区	包含層 D区	縄文土器	鉢		8.6	(1.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	砂粒		200305 -00024
16 第32・34区	包含層 D区	サヌカイト	石織	3.0	1.8	0.35	暗灰	暗灰				重量1.4g	200305 -00027
17 第32・34区	包含層 E区	サヌカイト	石織	2.35	1.85	0.5	黒	黒				重量1.8g	200305 -00042

第5表 西小路遺跡第9次調査出土遺物観察表（2）

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
18 第32・34区	包含層 E区	サヌカイト	石鏡	2.6	2.05	5.5	黒	黒				重量2.8g	200305 -00043
19 第32・35区	包含層 C区	黒曜石	石鏡	3.2	(1.6)	0.45	黒	黒				重量1.8g	200305 -00014
20 第32・35区	包含層 B区	黒曜石	石鏡	(2.65)	2.2	0.4	黒	黒				重量1.6g	200305 -00008
21 第32・35区	包含層 E区	黒曜石	石鏡	2.75	(1.55)	0.25	黒	黒				重量0.7g	200305 -00041
22 第32・35区	包含層 A区	黒曜石	石鏡	2.5	(1.65)	0.45	黒	黒				重量1.4g	200305 -00003
23 第32・35区	包含層 B区	黒曜石	石鏡	2.8	(2.0)	0.35	黒	黒				重量1.7g	200305 -00009
24 第32・35区	包含層 E区	黒曜石	石鏡	2.3	(1.6)	0.4	黒	黒				重量1.0g	200305 -00040
25 第32・35区	包含層 B区	黒曜石	石鏡	(2.05)	(1.6)	0.5	黒	黒				重量1.1g	200305 -00010
26 第32・35区	包含層 D区	黒曜石	石鏡	(2.1)	(1.65)	0.35	黒	黒				重量1.9g	200305 -00026
27 第32・35区	包含層 E区	黒曜石	石鏡	(2.65)	(1.55)	0.35	黒	黒				重量1.2g	200305 -00038
28 第32・35区	包含層 E区	黒曜石	石鏡	(1.95)	(1.55)	0.45	黒	黒				重量0.8g	200305 -00039
29 第32・33区	包含層 D区	黒曜石	石鏡	(1.95)	1.7	0.3	黒	黒				重量0.8g	200305 -00025
30 第32・35区	包含層 D区	黒曜石	つまみ 形石器	4.0	1.4	0.4	黒	黒				重量1.1g	200305 -00028
31 第32・35区	包含層 D区	黒曜石	つまみ 形石器	1.9	2.15	0.3	黒	黒				重量1.4g	200305 -00031
32 第32・34区	包含層 D区	サヌカイト	スクレ イパー	5.5	5.8	1.7	黒	黒				重量50g	200305 -00032
33 第33・34区	包含層 C区	安山岩	すり石	8.5	(10.9)	6.1	浅黄	浅黄				重量740g	200305 -00015
34 第33・34区	包含層 D区	安山岩	円盤	(9.7)	(5.7)	1.3	灰黄	灰黄				重量95g	200305 -00036
35 第33・34区	包含層 B区	軽石	加工品	4.7	4.3	2.7	浅黄	浅黄				重量11.2g	200305 -00011
36 第33・35区	包含層 D区	土製品	土鏃	(2.5)	1.3	1.1	褐灰	にぶい黄橙	ナデ押さえ	ナデ押さえ	微砂粒	重量2.5g	200305 -00037
37 第33・35区	包含層 E区	須恵器	杯	10.6	(2.4)	灰オリーブ	灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ →静止ナデ	砂粒	底部ヘラ切り	200305 -00049
38 第33・35区	包含層 E区	土師器	小皿	9.6	6.8	1.4	橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒 赤色粒子	底部ヘラ切り +板目	200305 -00046
39 第33・35区	包含層 E区	土師器	小皿	9.6	7.6	1.6	橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り +板目	200305 -00047
40 第33・35区	包含層 一括	土師器	杯	15.0	9.7	3.4 ～3.8	橙	橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒 赤色粒子	底部ヘラ切り +板目	200305 -00051
41 第33・35区	包含層 一括	土師器	杯	15.4	9.2	4.2 ～5.0	橙	橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り +板目	200305 -00050
42 第33・35区	包含層 一括	土師器	杯		8.8	(2.7)	橙	橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒 赤色粒子	底部ヘラ切り +板目	200305 -00052
43 第33・35区	包含層 E区	土師器	碗	8.2	(4.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り	200305 -00048	
44 第33・35区	包含層 一括	土師器	碗	8.0	(3.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	微砂粒 赤色粒子	底部ヘラ切り +板目	200305 -00053	
45 第33・35区	包含層 A区	土師器	碗	7.1	(1.9)	橙	橙	ヨコナデ	回転ナデ →静止ナデ	細砂粒 赤色粒子	底部ヘラ切り +板目	200305 -00004	
46 第33・35区	包含層 A区	土師器	碗	7.7	(1.7)	黒	黒	ヨコナデ	ミガキ	微砂粒	底部ヘラ切り 底部にヘラ記号	200305 -00005	

第6表 西小路遺跡第9次調査出土遺物一覧表

種別 遺物名	縄文土器							石製品										土器類		黒色土器		瓦類	白磁	土磁	合計			
	縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文									縄文		
	縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文									縄文		
	縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文		縄文									縄文		
遺物名	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	石槌	スクリュー ナイフ	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	石臼	
SD1			1	1		2	24											1									29	
包含層A区							165	12	1							26	4	7	278	14	18	14	2				541	
包含層B区			1		1		578	29	3				1	1		39	1	17	5	383	9	19	13	4	4		1108	
包含層C区				1	1		135		1		1					6	1	5	533	1	1	5	1	1		693		
包含層D区	1	1	4		1	7	963	55	3	3	4	1	1		1	92	2	21	1	257	13	6	26	1	1	6	1477	
包含層E区						2	488	19	6		2					101	18	2	233	16	12	21		2			922	
包含層F区						1	240	16								8	6		8	46	4	1	2				332	
包含層一括																					4						4	
合計	1	1	6	2	2	10	2593	131	14	3	6	2	1	1	1	272	3	68	1	28	1730	61	57	81	7	8	7301	

破片数（単位：点）

4. ま と め

今回の調査地点は西小路遺跡の北西端に位置し、道路を隔てて北西側は筑後川の氾濫原となる。その名残りで調査区付近は昭和30年代まで地形に沿って竹林が茂っていたところでもある。今回の第9次調査では明確な遺構は確認できず、包含層のみの調査となった。その包含層も第6表に見るように縄文時代から歴史時代までの遺物が混在しており、一時期に形成された包含層というよりも、南東側の高台からの流れ込みによって形成された堆積層と考えられる。よって出土遺物については元位置を保っているとは考え難いが、縄文時代の遺物については今後の西小路遺跡を検討する上での基礎資料とするため、簡単にまとめる。

縄文土器の大半が後・晩期に位置付けられると考えられる粗製土器であり、文様が施された土器は140点余りに過ぎなかった。図示できた資料は概ね鐘崎式・北久根山式・西平式・三万田式に大別できる。また石器では北久根山段階に普遍的に見られる剥片鉄も多く出土しており、この時期に集落のピークがあったことが推察されよう。ところで西小路遺跡周辺では古くから縄文後期～晩期の遺物の散布が知られていたが、何れも後世の遺構に混入した状態で出土していたため、該期の遺構の存在も含めて遺跡の性格が今一つ判然としなかった。ところが平成11年度に本調査区の東方90mの地点で調査を実施した第7次調査（註）では、円形プランを呈する竪穴住居1軒に加え、多くの土坑・ピットが検出されて集落構成の一端が明かとなった。特に御領式段階に位置付けられる竪穴住居内からは鉄製土器（モチーフは不明）に加えて、中部地方に多く分布する石製祭祀遺物の石冠・石棒も出土しており、後期末～晩期初頭にかけて東日本の文化情報が伝播していたことが証明された。今回の第9次調査では遺物のみの出土であり、また一帯は後世の削平によって遺構が良好な状態で残存している可能性は極めて低いものの、大量に出土する後期末～晩期にかけての遺物から判断しても、長期に及ぶ定住生活を営むほどの生産基盤が当地に存在していたことが窺えよう。

註 久留米市教育委員会 2001 『平成12年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第175集

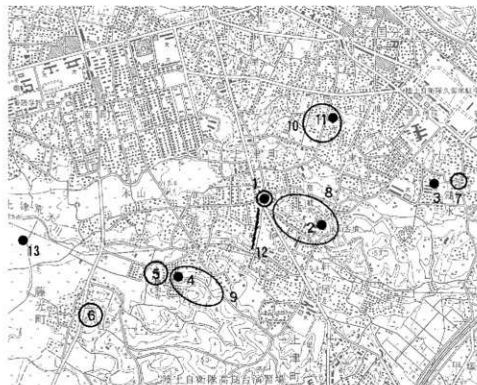
V. 浦山古墳群 (第4次調査)

1. 調査に至る経過

本調査は、平成15年4月2日、地権者の[]氏より久留米市上津町1391-1・1391-9・1391-10・1391-11における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに始まる。依頼地は、周知の遺跡である浦山古墳群の範囲に含まれており、『福岡県遺跡等分布地図』に記載のある浦山古墳群4号墳と考えられた。そこで、既存家屋解体後の平成15年10月23日に確認調査を行ったところ、甕や坏蓋など大量の須恵器片が採集された。更に墳丘と思われる版築状の盛土も確認された為、古墳の存在が決定的となった。確認調査の後、地権者及び代理人と協議を行い、対象地を発掘調査することで合意した。調査期間は平成15年10月29日から12月22日である。

2. 位置と環境

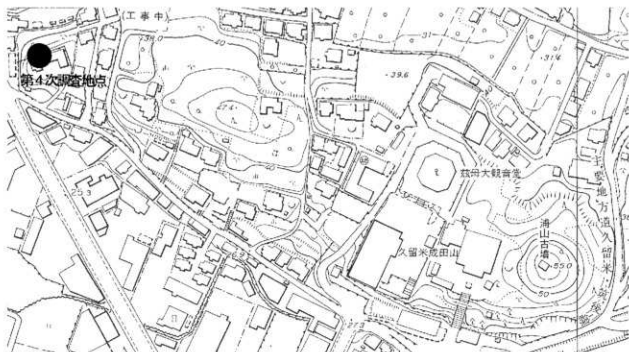
浦山古墳群は、久留米市街地の南東約3kmに位置し、上津町字浦山の丘陵上に所在する。この丘陵は耳納山系飛岳(223m)から派生したもので、北側には金丸川が西流している。南側には上津荒木川が流れ、南西に存在する本山丘陵との間を開析している。本調査の東側約350mの同一丘陵上には、5世紀中頃に築造された帆立貝型前方後円墳の浦山古墳(国史跡・全長約60m)が存在し、更に6世紀後半～7世紀にかけて後群集墳が数多く築造されており、前掲の『福岡県遺跡等分布地図』には23基の記載がある。更に、調査地から北東約1.2kmには全長約100mと言われ、阿蘇凝灰岩製の横口式家形石棺を主体部とした石櫃山古墳や南西約2.0kmには石障系石室を主体部とする藤山甲塚古墳が存在し、古墳時代中期の首長墓が集中する地域でもある。現在、浦山丘陵は一部が浦山公園として整備されており、公園整備時に調査され



遺跡名

1. 浦山4・24号墳
2. 浦山古墳
3. 石櫃山古墳
4. 本山古墳
5. 極楽寺古墳群
6. 屋敷古墳群
7. 鍾水古墳群
8. 浦山古墳群
9. 本山古墳群
10. 日渡遺跡群
11. 正福寺遺跡
12. 上津土塁跡
13. 車地遺跡

第36図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第37図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

た古墳や浦山古墳、久留米市内の古墳時代に営まれた遺跡についてのガイダンス施設である浦山公園古墳館も併設されている。

浦山古墳群の立地する丘陵の北側を流れる金丸川対岸には、縄文時代中・後期の集落遺跡である日渡遺跡群が存在する。近年の調査では、居住域は判然としなものの、正福寺遺跡で湧水点付近での水場が検出されており、縄文時代後期のドングリ貯蔵穴が網カゴや木製品を伴って多数検出されている。更に日渡遺跡では弥生時代終末期の堅穴住居が5軒検出され、古代・中世までの遺構も確認されている。

浦山丘陵は、本調査区付近の国道3号線と交差する部分が西端であるが、この浦山丘陵と南西約500mに位置する本山古墳群が立地する本山丘陵を結ぶように上津土塁が築造されている。上津土塁は調査の結果、その構造や立地・出土遺物などから、天智二（663）年の白村江の戦いに際して、有明海側の防御の為に築造された小水城であることが判明している。これは、古代官道が整備される以前の主要交通ルートであったと想定される藤山道を塞ぐ形となるが、この藤山道沿線には浦山古墳・藤山甲塚古墳・岩戸山古墳・乗場古墳などの主要古墳が存在する。浦山古墳群は、多くの人々や文物が行き交った当時の幹線ルート沿いに営まれた古墳群である。



第38図 浦山古墳群第4次調査区全景（南上空から）

3. 調査の記録

（1）調査の概要

調査は、専用住宅建設が予定されていた南北約17m、東西約15mの地山整形を施した墳丘盛土残存部分を中心に行った。調査面積は約400㎡である。現地調査は、平成15年10月29日に測量調査を行うことから開始した。その後、確認調査の際に検出された須恵器を中心とした遺物が大量に散布する地点にトレンチを設定し、作業員により掘り下げを開始した。遺物の散布が確認できない部分については重機により表土を除去した後、墳丘面を検出していった。祭祀遺構や周溝などが検出されると、必要に応じて写真撮影・個別遺構実測を行い、墳丘測量図の作成を行った。調査が進行すると、4号墳を切り込む形で24号墳が検出された。24号墳の石室は大破していたが、墓道部分は比較的残りがよく、石室の実測と併行して周溝の確認・測量を実施した。全体写真は気球によって撮影し、平成15年12月22日に全ての作業を終了した。遺構写真はカラーリバーサル・モノクロ6×7により撮影し、デジタルビデオによって、作業過程をダイジェストで記録している。



第39図 調査前風景（北西から）

（2）遺構・遺物の概要

検出遺構は、前方後円墳と考えられる4号墳の前方部・前方部上での祭祀遺構・前方部西堀における周溝、4号墳を切り込む形で築造された24号墳の大破した横穴式石室・周溝の一部である。以下、4号墳と24号墳について報告する。

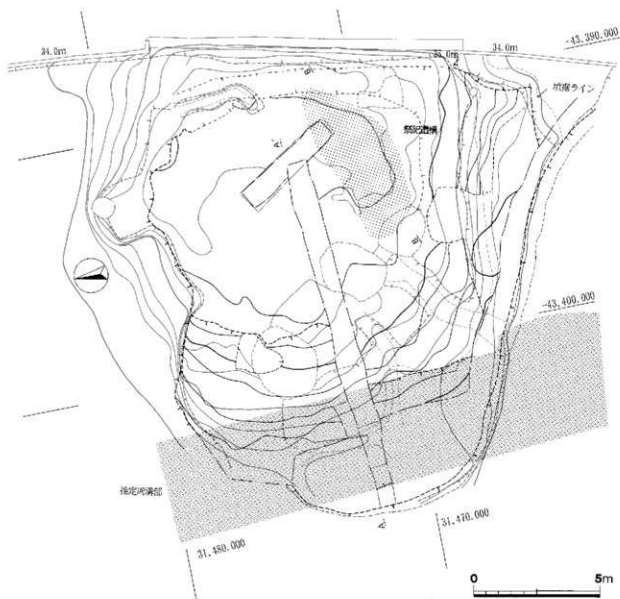
4号墳

墳丘（第39～44図）

墳丘の残存部は最も高い部分で標高35.8mを測る。過去にこの墳丘上に専用住宅が建ち、墳丘の大半が築山として利用されていた。墳裾との比高差は約1.5mである。墳丘の北側は大きく削平を受けており、その断面観察によって、墳丘が版築による盛土であることが判明した。今回の開発によってこの墳丘部分が削平される予定であった為、墳丘全体の表土を除去し、墳形の確認や主体部・祭祀遺構の検出などを目的とした。調査前段階では墳形は不明であったが、調査の進展に伴って調査地点は前方後円墳の前方部であることが確認された。調査区の東側は現在地下げされ宅地化しているが、『福岡県遺跡等分布地図』を作成する際の分布調査（昭和50年頃）では、円墳（4号墳）が確認されている。分布調査を行った職員の記憶によると、今回の調査地点には住宅が建っており踏査できず、地下げされた付近に円墳が存在したということである。このことから推測すると、



第40図 墳丘北西部検出状況（北西から）



第41図 浦山古墳群第4次調査4号墳丘測量図（1/150）

過去に確認された円墳が後円部で、今回の調査地が前方部、すなわち浦山4号墳は前方部を西に向けた前方後円墳であると考えられる。このことは浦山丘陵が東西に長く、浦山古墳と同じ方向であることから理解できる。また、調査区南東隅部分では、墳裾部分がわずかに外反しており、この部分が南側くびれ部と考えられる。更に、調査区西端の墳裾部分では、幅約3.0m、深さ約0.4mの周溝が確認された。周溝下層には黒色土が約0.2m堆積しており、西側の周堤と考えられる部分から流れ込んだ埴輪片が確認された。周溝は尾根筋を分断するように、尾根に直交する南北方向に掘削されたものと考えられる。周溝・周堤全体の確認を行いたかったが、諸般の事情で実施できず、中央トレンチ部分で幅が確定できたに過ぎない。久留米市における埴輪出土古墳は全て当該地の首長墓であり、権現塚古墳・下馬場古墳以外は前方後円墳である。更に後述する祭祀遺構は墳頂部で検出されており、後円部に設けられた埋葬主体部の開口部が前方部側を向いており、その前面で行われた墓前祭祀と考えることができよう。また、調査区北西部の墳裾

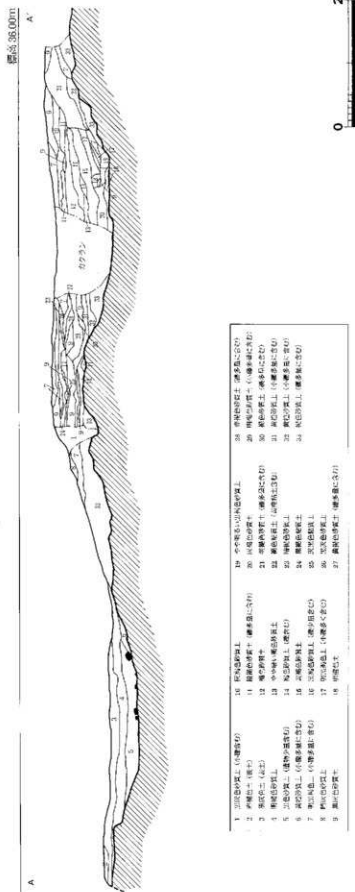
部では、周溝が地山と同レベルになり、墳丘のコーナーと思われる部分が検出されている。以上、南側くびれ部・西墳裾部・北西コーナー部分から浦山4号墳を復元すると、前方部幅14.5m・長さ9.0mが想定でき、浦山古墳と同じ帆立貝式前方後円墳であると考えられる。復元案については後述する「4.まとめ」で述べたい。また、後世に築造された24号墳に破壊されていない西側墳丘面には、土師器を中心とする多くの遺物と伴に、浦山丘陵の地山に混在する通称「くされ礫」と呼ばれる風化した安山岩が面的に確認された。据え付けたような状態ではなく、根石も確認されていないが、表面に散布した状況を呈し、葺石的な役割を果たした可能性も考えられる。



第42図 4号墳周溝断面（南東から）



第43図 4号墳墳丘面遺物出土状況（北東から）



第44図 中央トレンチ土層図 (1/60)

祭祀遺構（第45～49図）

祭祀遺構は、残存する墳丘部の墳頂中央部から南斜面にかけて弧を描くように検出された。前述した確認調査では、この祭祀遺構の北東部の一部を検出したことになる。調査を開始した段階では、地表に須恵器が多数散乱しており、人力で表土を掘り下げていくと甕を中心とした多種多様の遺物が出土した。これらの遺物は、東西約5.0m・南北約3.0mにわたって検出され、現地で調査を実施している段階で数回にわたる祭祀が行われていることが看取された。しかし、後世の24号墳築造に伴って元位置を保っていない遺物も多く、逆に24号墳の墳丘盛土下にバックされた遺物は元位置を良好に保っていた。浮遊した遺物を取り除くと、甕を中心に遺物が集中した個所が検出された。甕は墳丘盛土に据え置いたまま検出され、底部内側に堆積した胴部の破片の上に礫が数個検出されたことから、据え置いた甕を、礫を用いて破砕したものと考えられる。据え置いた状態で検出できた甕は、器高90cm前後の大甕が2個体、50cm前後の中型甕が1個体である。なお、後日遺物整理を行うと、破片などから推測される最終的な甕の個体数は、器高90cm前後の大甕が3個体、50cm前後の中型甕が6個体、30cm以下の小型甕が4個体分で、更に多かった可能性がある。他の器種は、須恵器が蓋坏・高坏・甕・脚台付甕・提瓶・横瓶、土師器が坏・模倣坏・高坏・甕・脚台付甕などである。これらには時期差が見られ、一時期の所産ではない。須恵器については、小田富士雄氏編年のⅡB期からⅢB期古段階のものが見られ、2～3回の祭祀が行われたと考えられる。



第45図 祭祀遺構全景①（北西から）



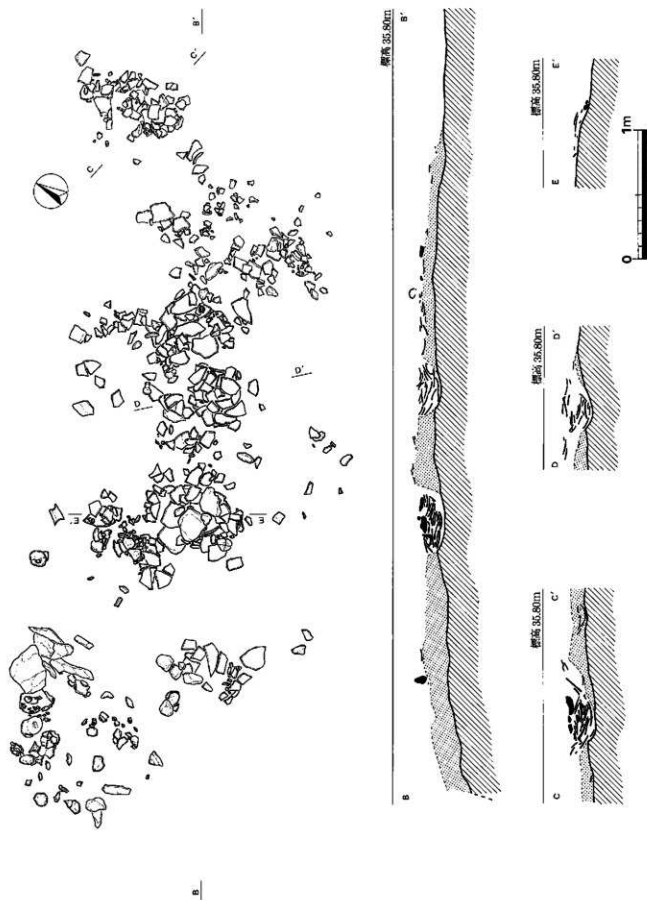
第46図 祭祀遺構全景②（西から）



第47図 祭祀遺構大甕下部検出状況（南から）



第48図 祭祀遺構遺物出土状況（南西から）



第49図 4号墳祭祀遺構平面図 (1/20)

出土遺物

4号墳の出土遺物は、墳頂部の祭祀遺構を中心として、墳丘西斜面・周溝内から大量に出土した。前述したように、4号墳は後世に24号墳が築造されることから、石室掘方部分や周溝掘削部分は祭祀遺構・墳丘面共に攪乱を受けている。出土した遺物のほとんどは、24号墳の墳丘盛土下にバックされた為に散逸を免れたものと思われる。

須恵器（第50～55図）

4号墳から出土した須恵器は、蓋坏・高坏・甗・脚台付甗・短頸壺・長頸壺・壺・提瓶・甕などである。墳頂部の祭祀遺構から出土したものがほとんどであるが、24号墳築造の為に遊離した遺物も多い。ここでは、元位置を保っていないくても、4号墳に伴うと判断される遺物について報告する。

蓋坏は、坏蓋12点・坏身17点が図化できた。他にも破片は多く、本来は20セット程度が存在したのと思われる。遺物は完形に近いものも存在するが、ほとんどが小片に割れており接合したものである。

1～3は小型の坏蓋で、口径は10.8～11.2cm、器高3.0～3.6cmである。天井部は回転ヘラケズリを行ない、口唇部には明瞭な段を有する。13～16の坏身がセットになろう。13～16の坏身は、口縁部径9.0～10.3cm、器高は4.0cm前後、立ち上がりは内傾し、口唇部には段を有していない。坏蓋の口唇部は、1～12の全てに認められるが、天井部と体部の境が明瞭なもの（4・7～9・12）と、丸みを帯びるもの（5・6・11）がある。口径は13.0～15.1cmである。坏身の立ち上がりは内傾し、全て口唇部には段を有していない。口径は9.0～14.9cmを測る。底部は約1/2を回転ヘラケズリを行ない、残りは回転ナデ調整である。

高坏は全て無蓋で、短脚で透孔を持つもの（30・31）と長脚で透孔を持たないもの（32・33）、長脚化し、一段もしくは2段の透孔を持つもの（35～37）がある。30・31は同形態を探るが、祭祀遺構西端付近の至近距離で出土しており、出土状況からセットで祭祀に使用されたものと思われる。坏部は浅く、脚裾端部は丸く仕上げられシャープさは感じられない。32は坏部中段に段を設け、沈線を巡らす。脚裾端部は跳ね上がり、丁寧に仕上げている。

40・41は脚台付甗で、30・31と共に祭祀遺構西端付近で出土している。庭木の根により、元位置は保っている状況ではなかったが、高坏・脚台付甗が2個体ずつセットで祭祀に使用された状況が想定される。頸部から口縁部にかけては波状文を施し、体部の穿孔部付近には刺突文帯を有する。脚部には外面より幅2mm、長さ1.2cm程度の透孔を5方向に入れ、底部は塞ぎ、幅2mm、長さ4.0cm程度の透孔を1個所入れる。中には土製と思われる玉が、40は3個、41は2個入っており、振ると鈴のように音がする。鈴付甗とも呼ぶべき状態を呈する。39は小型化した甗であるが、体部に穿孔を行っていない。実用性を度外視したものであろうか。

43～45は短頸壺で、45の体部には2条の刺突文帯が巡る。46は長頸壺の胴部で、カキメを施した後、刺突文を入れる。下部は回転ヘラケズリ後に持ちヘラケズリで仕上げ、胴部内面上部には青海波の叩き当て具痕が残る。

47・48は提瓶で、47の胴部はカキメ、48は刺突文を螺旋状に施す。48には把手の痕跡が残る。

49は壺で、口縁～頸部と胴部が出土した。接合部位が無く、正確な器高や器形は不明である。口縁部から下3～4cmの沈線部分には、1cm程度の粘土塊が貼りつけられている。胴部内面は青海波の当て具痕が残るが、ナデ消されている為に不明瞭である。

50は小型の甕で、器高約23cm、口径約16cmである。胴部中位の器壁は厚く、1.3cmを測る。53は器高69.3

cm、口径45.6cmの甕で、ほぼ完形に復元できる。口縁部から頸部上位には沈線を含んで波状文が2条巡る。胴部内面の青海波当て具痕はナデ消している。57～60は中型の甕で、法量・調整共に類似している。口縁端部は下部へ下がり、口唇部はナデにより丸く仕上げる。器高41.8～50.4cm、口径23.4～25.6cmである。61は口縁部のみであるが、62・63と同規模の大甕と思われる。同一個体と思われる胴部も出土しているが、図化し得る状態ではない。62は器高90.0cm、口径44.6cmの大甕である。祭祀遺構に底部が据え付けられた状態で出土している。頸部には3条の沈線帯が巡り、その間には波状文が施されている。また、2目目の沈線帯には9個の粘土塊が貼り付けられている。63は62の西側約1mの場所に底部が据え付けられた状態で出土しており、内面には破砕に使用したと思われる礫が胴部破片と共に出土している。器高94.5cm、口径51.0cmを測る。頸部の沈線・施文のパターンは62と同一であり、口縁部の形状も非常に類似している。

土師器（第66図）

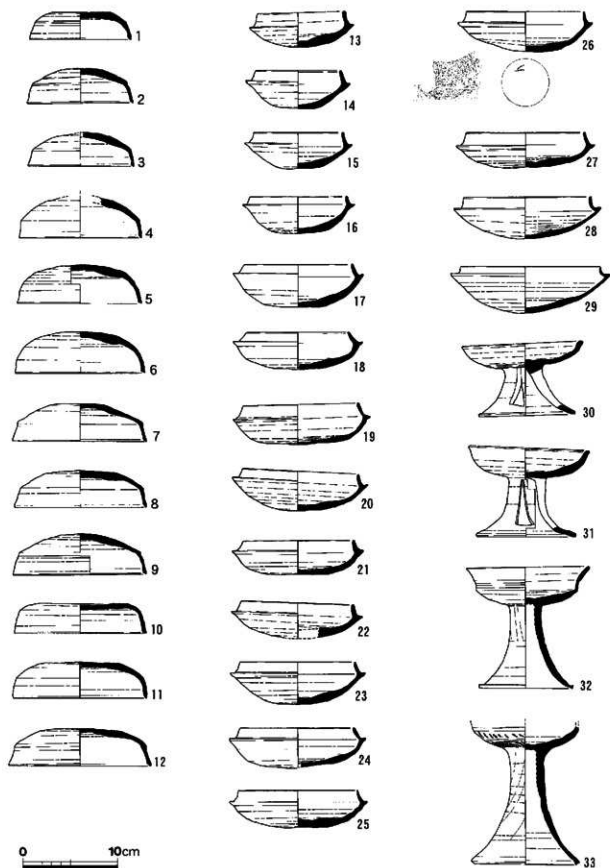
4号墳に伴う土師器は、祭祀遺構・墳丘西斜面から主に出土しており、細片が多い為に図化できるものが少ない。出土傾向は、祭祀遺構よりも墳丘西斜面に多くの土師器が散乱していた。今回は、復元可能であった14点を掲載する。104～108は模倣坏で、外面に黒漆を塗布し、ミガキを施す。

108は内面にも黒漆が認められる。110は高坏で坏部の中段には沈線を入れ、下部外面にはカキメを施す。脚裾部は外方に跳ね上がる。111・112は小型の甕で、体部はケズリで仕上げる。113は甕で、胴部穿孔部付近には刺突文帯が巡る。頸部には絞り痕が残る。115～117は脚台付甕である。115の外面はケズリを行い、胴部には横方向のミガキを施す。117の外面はケズリ調整、口縁部下付近から脚裾部まで丹塗りを施し、横方向のミガキで仕上げる。

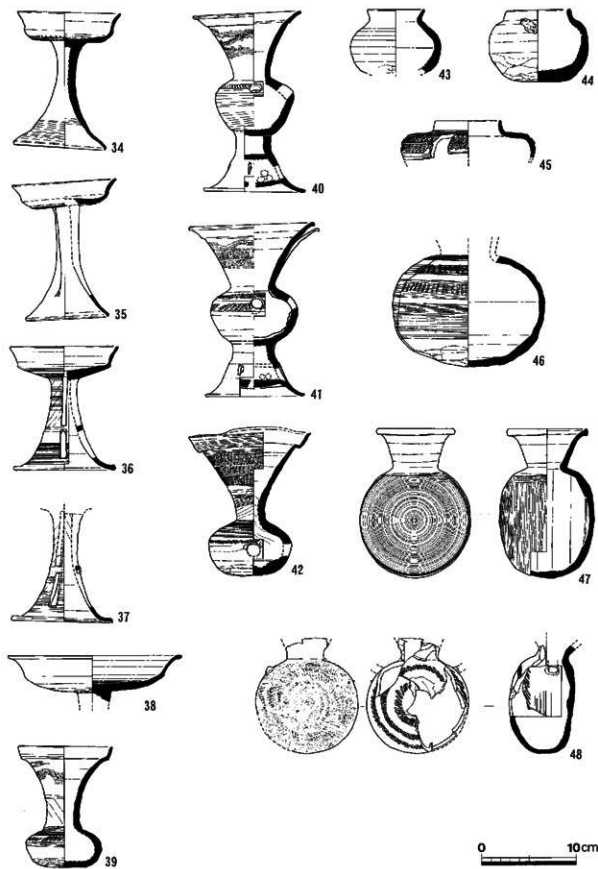
埴輪（第55図）

4号墳から出土した埴輪は、全て西側周溝内から検出された。埴丘面には埴輪を樹立した痕跡は一切確認できず、出土状況からは西側の周堤から流れ込んだ様相を呈していたが、周堤部分はトレンチ調査しか行っていない為に、周堤に埴輪が樹立されていたかは断定できない。出土量は少なく、かなり細かい破片が出土したにすぎないが、種別は円筒・朝顔形の2種類が見られる。いずれも小片の為に口径、器高が判明するものはなく、種別・部位が識別できるものも少ないが、円筒埴輪の口縁部、円形の透孔の一部、突帯部、朝顔形埴輪の口縁中段部が図化することができた。

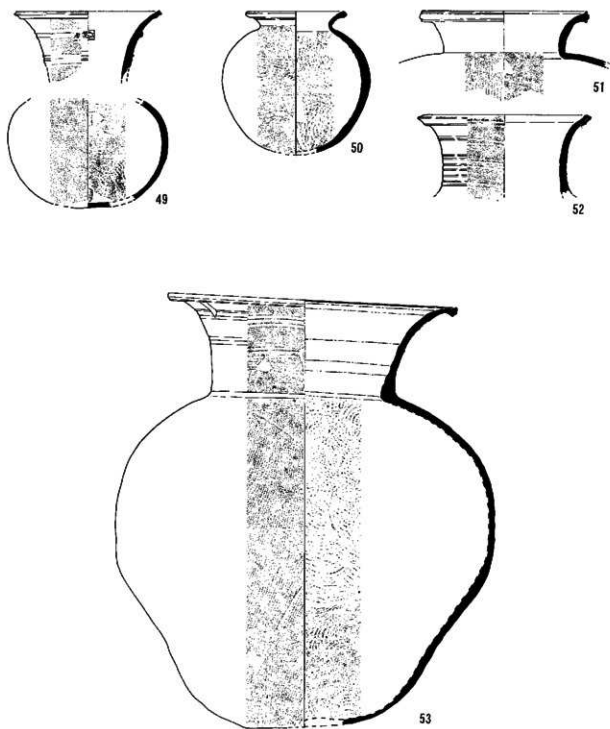
64・65は円筒埴輪の口縁部である。先端部の断面は四角で、横ナデで仕上げる。外・内面共に斜め方向のハケが認められる。66・67は円形の透孔の一部で、下部1cmには突帯が廻る。68～70は突帯が認められる小片で、突帯は低く断面は幅広い台形状を呈する。突帯接合前の器壁への沈線・刻目は認められない。接合ナデは丁寧な印象を受ける。内・外面共に摩擦して調整は不明瞭であるが、69の外面には斜め方向のハケが認められる。突帯上部は接合ナデを行わず、指押さえのみである。71は朝顔形埴輪の口縁中段部の小片で、内・外面共に摩擦している為に調整不明である。器壁は7～10cmで比較的薄い。粘土接合部で剥離している。胎土はいずれも1～2mm程度の砂粒を含み、石英・輝石・雲母・赤色粒子を含む。黒斑は認められず、色調は内外面共に橙色を呈している。資料数は少ないものの、同じような特徴を有する埴輪は、筑後市久塚古墳で出土している。福岡県教育庁の岸本圭氏の観察によると、極めて類似しているとのことであった。しかし、須恵器の年代とは齟齬があり、胎土分析等の必要性を感じている。



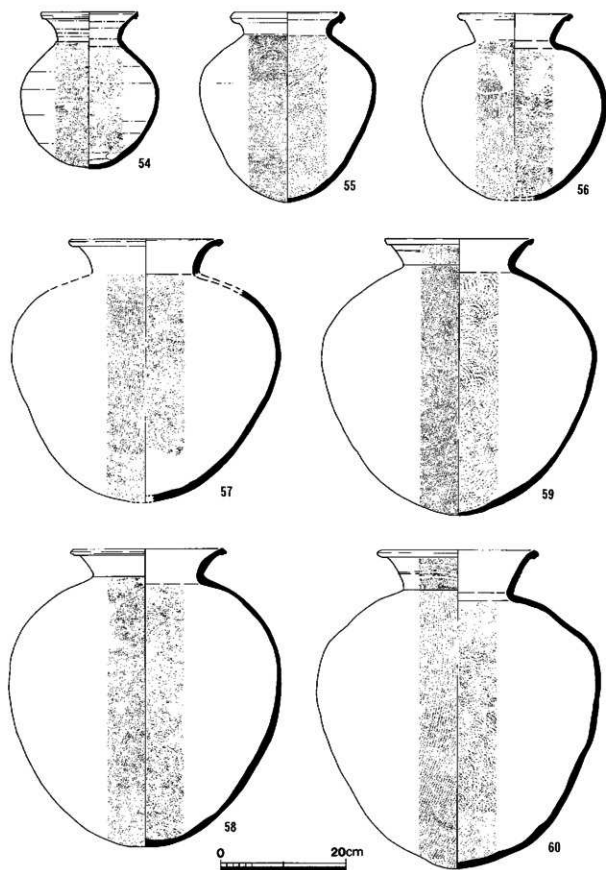
第50図 4号墳出土遺物実測図① (1/4)



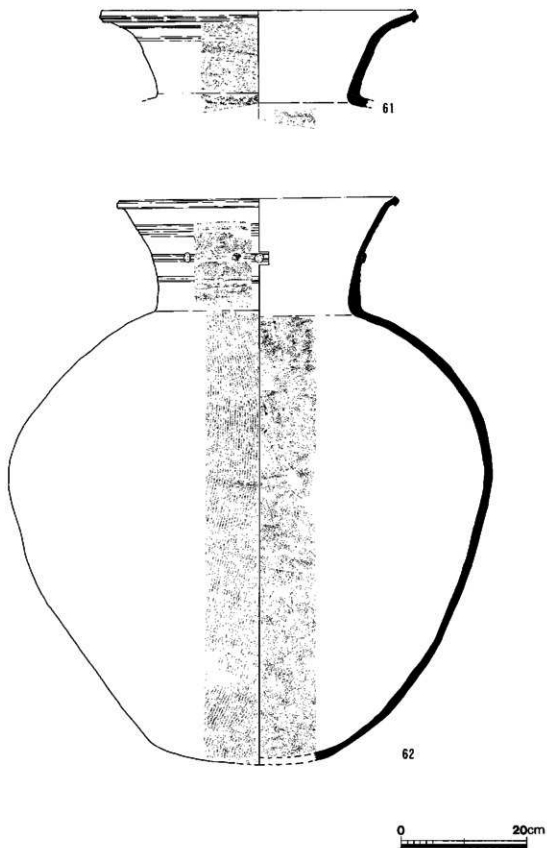
第51図 4号墳出土遺物実測図②（1/4）



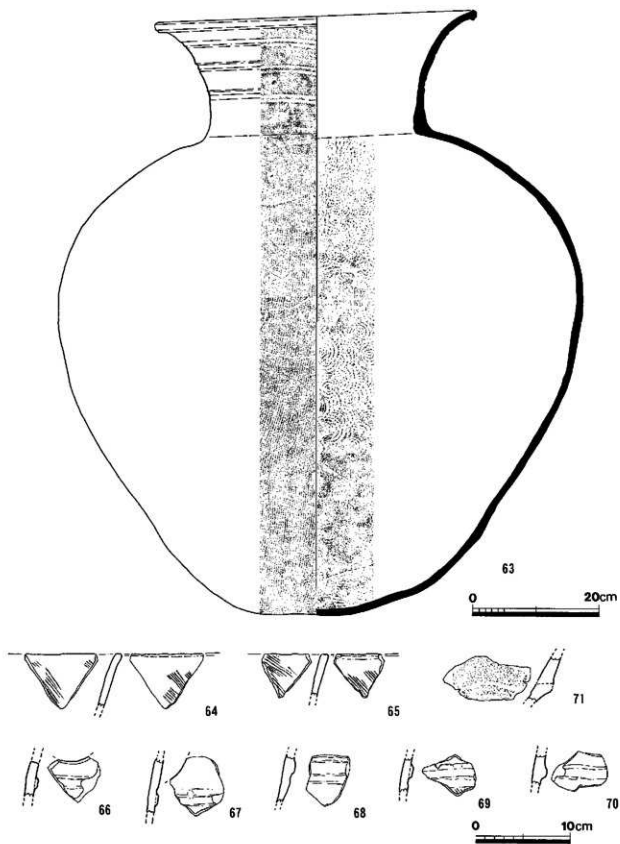
第52図 4号墳出土遺物実測図③ (1/6)



第53図 4号墳出土遺物実測図④ (1/6)



第54図 4号墳出土遺物実測図⑤ (1/6)



第55図 4号墳出土遺物実測図⑥ (1/4, 1/6)

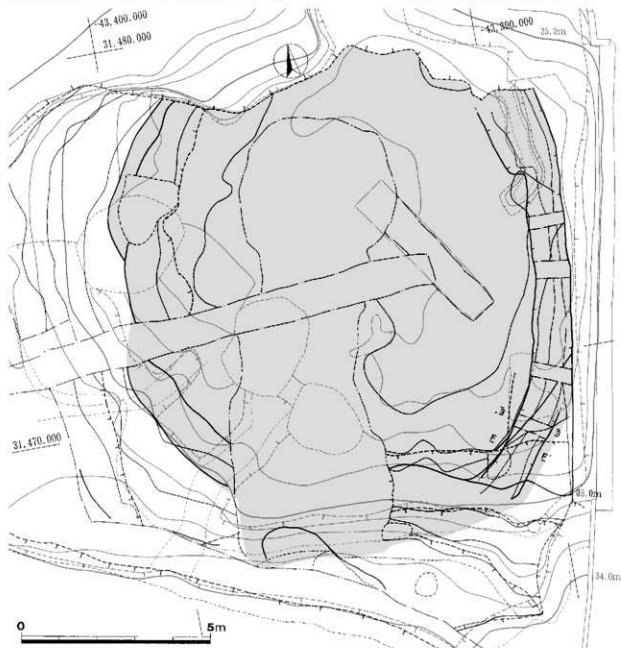
24号墳

墳丘（第56～60図）

4号墳の前方部上に築造された円墳である。調査区東端と西斜面で周溝が確認されたが、北側は削平の為に確認できず、南側斜面でも確認できなかった。残りが良い南東部では、上面幅0.9m、下面幅0.4m、深さ0.2m程度である。墳丘は版築状を呈し、黒灰色土と明褐色土を10～40cm程度の厚さで互層状に積み上げている。南北長は不確定であるが、東西の周溝や石室長などから推定される墳丘規模は、東西約11m・南北約15mである。高さは石室が大破しており不明であるが、現在の地表面から石室床面までは約0.9mである。



第56図 24号墳東周溝全景（南から）



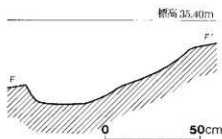
第57図 浦山古墳群第4次調査24号墳墳丘測量図（1/100）

内部主体（第61～63図）

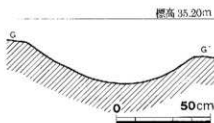
24号墳の内部主体は、4号墳の前方向を切り込む形で築造されている。石室掘方は、現地表から約0.9m掘り込み、複室構造の横穴式石室を築造している。石室は東西周溝間のやや西よりに築造されており、開口部は南方向である。石室はほとんどの石材が抜かれており、玄室床面の敷石と側壁の最下段の石材が残存するのみである。残された石材から、玄室のプランは「胴張り」を呈することが判断でき、前室は小さい。墳裾部の前庭部付近からは墓道が確認され、礫と遺物が検出されている。礫と遺物の堆積は2面確認でき、追葬に伴う掻き出しが行われたものと思われる。石室の主軸方向はN-16°-Eで、奥壁から礫が見られる墓道の先端までの距離は、約10.0mである。玄室の規模は、奥壁抜き後中心部から仕切り石までの長さ3.0m、最大幅2.9mで、ほぼ円形に近い。前室は石材が残っていない為に正確な規模は不明であるが、南西袖石の抜き跡から推定すると、長さ約1.0m、幅約1.2mが考えられる。前室の前面約2.5m付近までが羨道部と思われるが、石材は全く残存していない。墓道部分は幅1.4m、長さ3.5mで、断面は浅いU字形である。深さ0.2～0.3mを測る。墓道部には礫の堆積面が2面確認でき、追葬時に閉塞石などを掻き出したものと思われる。石室床面のレベルは、玄室・前室ではほぼ等しいが、羨道部から墓道部にかけて徐々に低くなり、比高差は0.55mを測る。

石室床面や墓道、攪乱埋土中からは、多くの礫と共に須恵器・土師器・玉類・耳環・鉄器が出土している。特に墓道部分は石取りの際に攪乱を受けておらず、追葬時の掻き出しに伴い、礫に混入して遺物が多く出土している。

石室床面や墓道、攪乱埋土中からは、多くの礫と共に須恵器・土師器・玉類・耳環・鉄器が出土している。特に墓道部分は石取りの際に攪乱を受けておらず、追葬時の掻き出しに伴い、礫に混入して遺物が多く出土している。



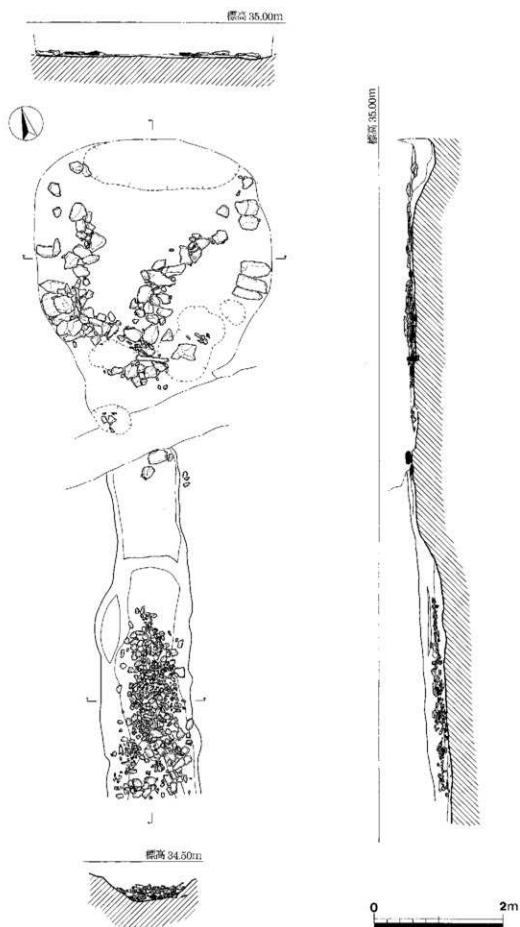
第58図 24号墳東周溝断面図①（1/20）



第59図 24号墳東周溝断面図②（1/20）



第60図 24号墳全景（南上空から）



第61図 24号墳石室実測図 (1/60)



第62図 24号墳玄室全景（南西から）



第63図 24号墳墓道全景（北西から）

出土遺物（第64～66図）

24号墳の出土遺物は、石室床面や墓道、石取りの際の攪乱土中から出土した。元位置を保つ遺物は墓道出土遺物のみで、追葬時の掻き出しによるものである。よって、初葬や追葬に伴う副葬遺物で、元位置を保つものは無い。出土遺物は、土師器・須恵器・玉類・耳環・鉄器であるが、土師器には細片のみで図化できるものはなかった。

須恵器

24号墳から出土した須恵器は、蓋坏・高坏・甕・提瓶・横瓶・甕・皮袋形須恵器などである。

蓋坏は、図化できるもので坏蓋7点・坏身8点が出土した。それぞれの天井部・底部にはヘラ記号が入る。ヘラ記号は復元できたもので10種類見られ、坏蓋・坏身がセットになる。同じヘラ記号は見られず、セットに復元できたものの以外に5種類が見られる。それぞれのヘラ記号には、「窯印」・「工人印」などの解釈が存在するが、この状況から勘案するとヘラ記号は「窯印」としてではなく、工人が持つ個人の印の意味が強いように思われる。このような解釈は八女市塚ノ谷4号窯跡でも指摘されているが、24号墳出土遺物と同じヘラ記号は確認されていない。

高坏は5点出土している。いずれも小型の高坏で、88の脚裾部内面にはヘラ記号が認められる。87・88・91の坏部下部にはカキメを施す。92は甕で、胴部の穿孔部上下には沈線が巡る。

93～97は提瓶である。93は小型の提瓶で、刺突文が螺旋状に入る。94は胴部上面付近に、頸部を挟むように一対のヘラ記号が認められる。いずれも把手は認められない。

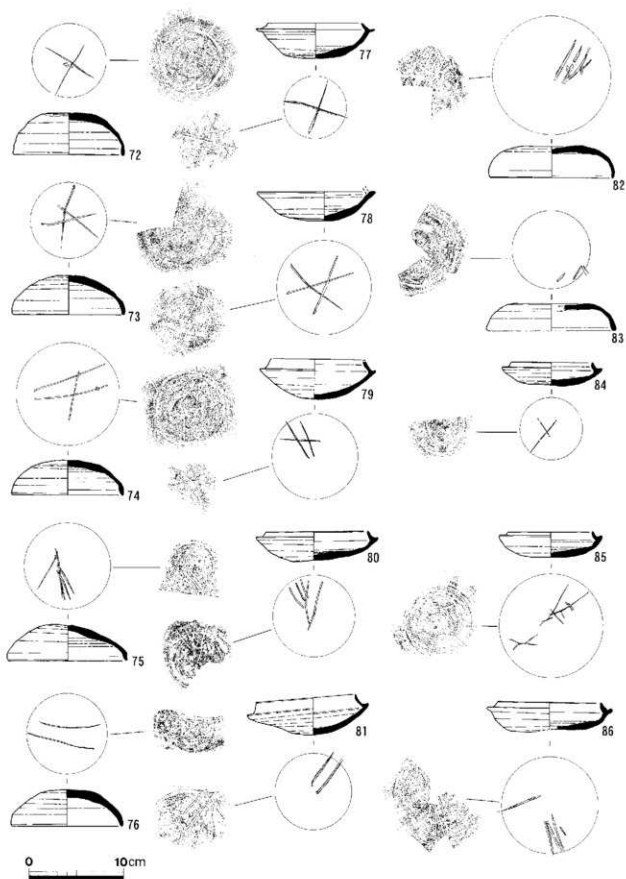
98～100は横瓶で、100の胴部下部には粗いカキメが施されている。

101は皮袋形須恵器で、口縁部の細片と胴部の細片が出土している。口縁部は復元口径7.0cmで、口縁部下部には波状文が施される。胴部は皮袋の先端部が出土しており、皮の縫い目や合わせ目を刺突文や竹管文で表現する。肩部の吊り手の有無は破片も出土していない為に不明である。

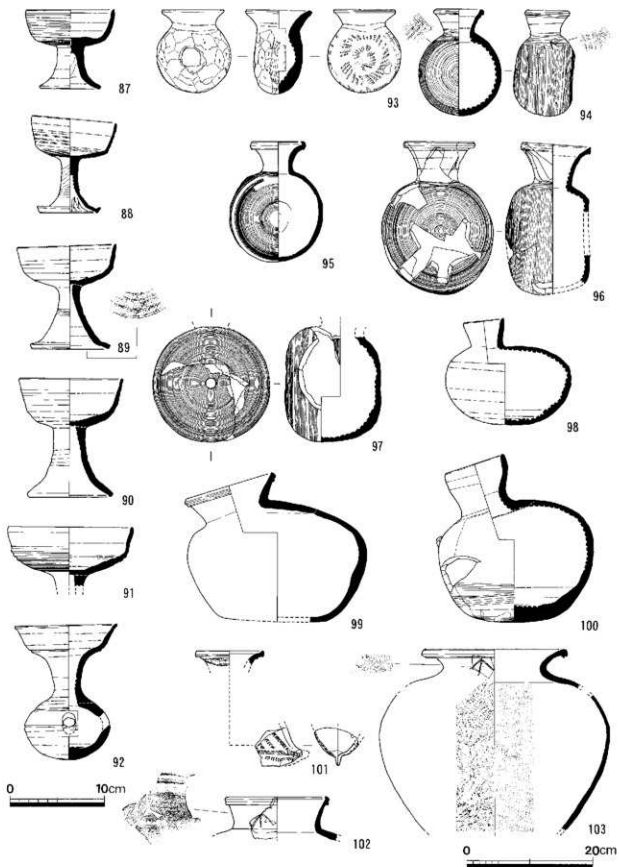
102・103は甕で、頸部には同一のヘラ記号が認められる。

118～124は耳環で、形状から118と119、120と121、122と123がセットになるものと考えられる。

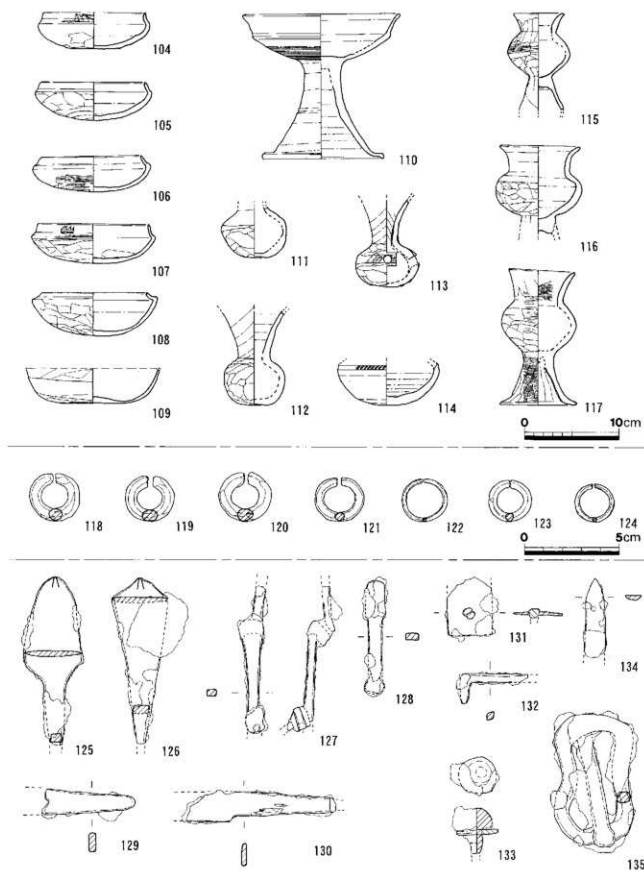
125～135は鉄器で、125は広鋒両丸造棘篋被三角形式鉄鍔で、126は主頭広根斧箭式鉄鍔である。127・128は馬具の一部と考えられるが、断面長方形の棒状鉄板の先端に接合部品を取りつけ、斜め方向に接続する。133は雲珠の一部、135は鉸具である。



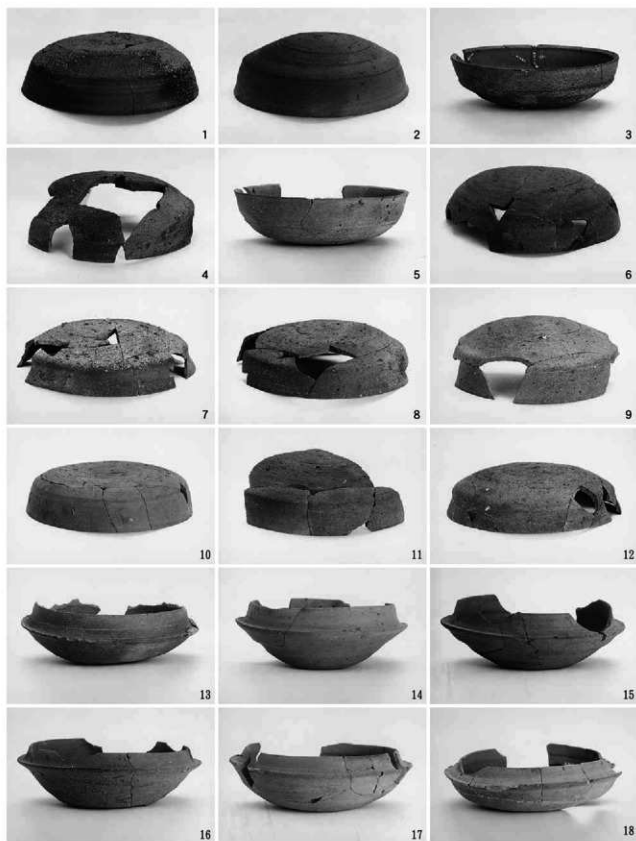
第64図 24号墳出土遺物実測図① (1/4)



第65図 24号墳出土遺物実測図② (1/4, 1/6)



第66図 4号墳出土土師器実測図（1/4）・24号墳出土遺物実測図③（1/2, 1/4）



第67図 出土遺物（写真①）



第68図 出土遺物（写真②）



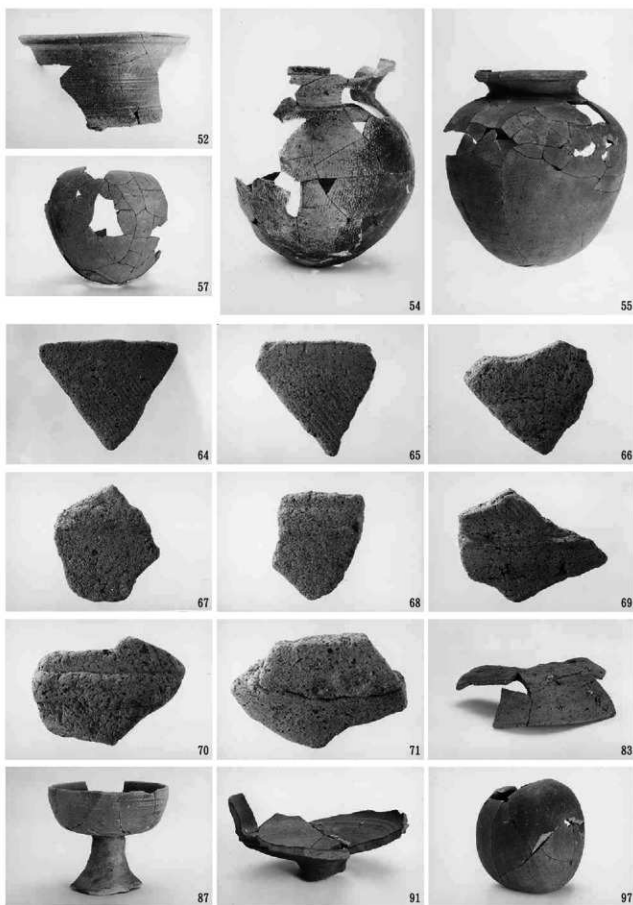
第69図 出土遺物（写真③）



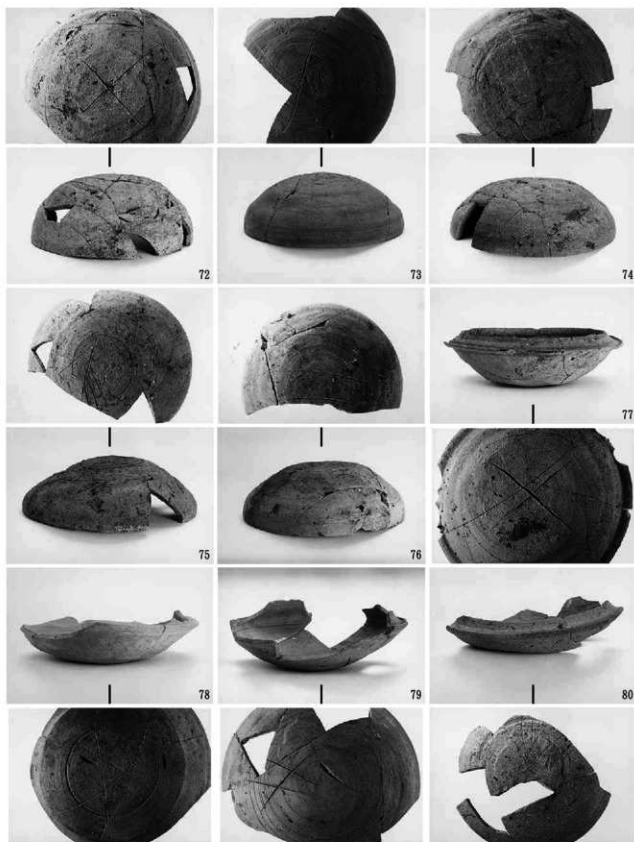
第70図 出土遺物（写真③）



第71図 出土遺物（写真⑤）



第72図 出土遺物（写真⑥）



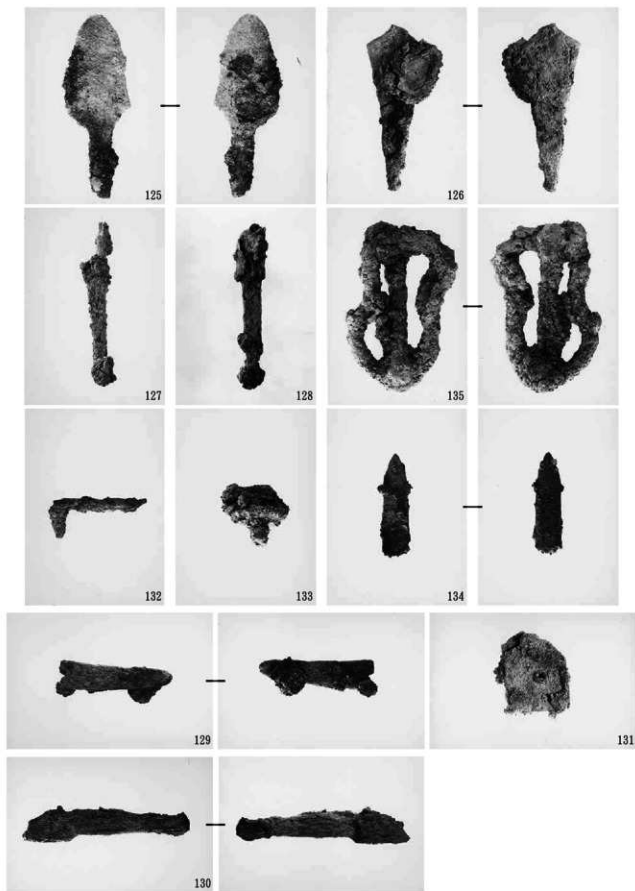
第73図 出土遺物（写真㉗）



第74図 出土遺物（写真⑧）



第75図 出土遺物（写真⑨）



第76図 出土遺物（写真⑩）

第7表 浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表（1）

遺物No	出土遺構	種類	形状	注 意 点			色 調		装 飾		胎 土	備 考	遺物登録 番号
				口徑 (長)	底径 (幅)	脚高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	10.8	—	3.0	灰黄 灰	灰黄 灰黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒 3mm大の石粒を含む		200317 00001
2 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	11.3	—	3.7	灰 灰黄	灰 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒含む		200317 00002
3 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	11.2	—	3.6	灰 灰黄	灰 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒含む		200317 00003
4 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	13.0	—	4.4	灰	灰赤	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の3mm大の石粒含む		200317 00004
5 第50・679	4号墳 表土付近	須恵器	坏蓋	13.3	—	4.1	灰	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒を含む 12mmの石英含む		200317 00005
6 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	13.7	—	4.4	灰	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	4mm大の石英など含む		200317 00006
7 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	14.2	—	4.0	灰	赤灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	4mm大の石英など含む		200317 00007
8 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	14.1	—	3.9	灰	赤灰 黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	3〜6.5mm大の石粒・石英・ 長石など含む		200317 00008
9 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏蓋	(14.2)	—	4.3	灰	灰赤	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	4mm大の石英など含む		200317 00009
10 第50・679	4号墳 表土付近	須恵器	坏蓋	14.0	—	3.2	灰黄	灰黄 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	4.5mm大の石英・ 砂粒(石英・長石など)含む		200317 00010
11 第50・679	4号墳 表土付近	須恵器	坏蓋	14.2	—	3.8	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	3mm大の石粒・砂粒(長石・ 石英など)含む		200317 00011
12 第50・679	4号墳 表土付近	須恵器	坏蓋	15.1	—	3.9	灰赤 赤灰	灰赤〜黄灰 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	4mm大の石英など含む		200317 00012
13 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	9.3	—	3.7	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ	少量の砂粒(長石・石英) 含む		200317 00013
14 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	9.0	—	4.1	灰	にぶい 黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の細砂粒(長石など)含む		200317 00014
15 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	9.5	—	4.0	黄灰〜灰	にぶい 黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒(長石・石英など) 含む		200317 00015
16 第50・679	24号墳 段瓦上	須恵器	坏身	10.3	—	4.0	黄灰〜灰	黄灰〜灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	多量の砂粒(長石・石英など) 含む	外面一部 手付ヘラケズリ	200317 00016
17 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	11.4	—	4.6	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の石粒(石英・長石など) 含む		200317 00017
18 第50・679	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	(11.0)	—	4.0	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良		200317 00018
19 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	(12.2)	—	4.3	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(長石など)含む		200317 00019
20 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	(12.4)	—	4.3	赤灰	赤灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒含む		200317 00020
21 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	(11.8)	—	3.8	灰	黄灰〜灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良		200317 00021
22 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	(12.0)	—	3.8	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		200317 00022
23 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	12.2	—	4.6	灰赤	灰赤〜 灰黄	回転ナデ	回転ナデ	少量の砂粒(長石・石英など) 含む		200317 00023
24 第50・680	4号墳 表土付近	須恵器	坏身	12.2	—	4.2	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(長石など)含む		200317 00024
25 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	12.7	—	3.9	灰	黄灰〜灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の砂粒(長石・石英) 含む		200317 00025
26 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	12.6	—	4.3	赤灰〜灰	赤灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(石英・長石)など含む	ヘラ記号有り	200317 00026
27 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	12.6	—	3.7	黄灰〜灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(長石・石英など)含む		200317 00027
28 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	13.6	—	4.5	黄灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良		200317 00028
29 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	坏身	14.9	—	5.0	灰	灰〜黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(石英など)・黒色粒子 など含む		200317 00029
30 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高坏	12.8	10.1	7.7	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	石粒(長石・石英など)含む		200317 00030
31 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高坏	(12.8)	10.7	9.5	灰白〜灰	灰白〜灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(長石・石英など)・ 4mm大の石粒含む		200317 00031
32 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高坏	13.1	9.9	12.9	黄灰 灰・黒	黄灰 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒(長石・石英など)・ 3mm大の石粒含む		200317 00032
33 第50・680	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高坏	—	(10.9)	(13.3)	灰黄 灰	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ	砂粒(長石・石英など)・ 4mm大の石英など含む		200317 00033
34 第50・680	4号墳 表土付近	須恵器	高坏	(10.9)	9.6	14.4	黄灰・灰 黄灰	灰 黄灰	回転ナデ	回転ナデ	石粒(石英など)含む 3mm大の石粒含む		200317 00034

第8表 浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表(2)

遺物No	出土遺構	類別	形状	注 記			色 調		装 飾		胎 土	備 考	遺物登録 番 号
				口徑 (長)	底径 (長)	高さ (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
35 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高杯	11.0	8.9	14.5	灰・灰白～ にぶい黄緑	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	砂粒(長石・石英など)含む		200317 00035
36 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高杯	(11.5)	(10.8)	13.2	暗灰～灰	暗灰～灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良		200317 00036
37 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高杯	—	10.7	(11.6)	灰	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ ナデ	砂粒(長石・石英など)含む		200317 00037
38 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	高杯	(18.4)	—	(5.4)	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	石粒(石英・長石など)含む		200317 00038
39 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	罐	(9.9)	—	12.8	灰	灰	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	石粒(石英・長石など)・ 3mm大の石英など含む		200317 00039
40 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	脚台付 鉢	(11.5)	10.8	18.5	灰	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ	砂粒(長石・石英など)・ 1mm大の石英含む	脚台内に玉3個	200317 00040
41 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	脚台付 鉢	13.1	10.4	18.2	灰白 暗灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	多量の石粒(長石・石英)含む 5mm大の石粒など	脚台内に玉2個	200317 00041
42 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	罐	12.9	3.5	15.3	灰褐 灰黄褐	灰褐 灰黄褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	石粒(石英・長石など)含む		200317 00042
43 第35区	4号墳 表土付近	須恵器	甕	(6.2)	—	(6.8)	灰白	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良 1mm程度の砂粒若干含む		200317 00043
44 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	短頸蓋	6.8	4.5	7.7	灰	灰	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	石粒(長石・石英など)含む		200317 00044
45 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	短頸蓋	6.9	—	(4.2)	灰・黄緑 灰黄褐	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ	少量の砂・石粒(石英など) 含む		200317 00045
46 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	反頸蓋	—	—	(11.8)	灰 暗灰	灰 灰白	回転ナデ・カキメ 回転ヘラケズリ	タタキ・ナデ 回転ナデ	石粒(石英・長石など)含む		200317 00046
47 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	短瓶	(8.2)	—	15.9	灰	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ ナデ	少量の砂粒(長石など)・ 1mm大の石粒を含む		200317 00047
48 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	短瓶	—	—	(12.2)	灰 暗灰	暗灰黄 暗灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ	5mm大の石粒(長石など)含む		200317 00048
49 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	蓋	(22.8)	—	—	暗灰 暗灰	灰 赤灰	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ・ナデ	1～2mmの砂粒含む 金雲母・長石・石英含む		200317 00049
50 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(16.0)	—	(23.0)	灰	灰	回転ナデ タタキ	回転ナデ タタキ	1～5mm程度の砂粒・小礫 (黒色粒子・石英・輝石)含む		200317 00050
51 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(27.0)	—	(8.1)	灰白 暗灰	灰 灰白	回転ナデ タタキ	回転ナデ タタキ・ナデ	1～2mmの砂粒含む 黒色粒子・石英・輝石含む		200317 00051
52 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(27.4)	—	(12.4)	灰 灰オリーブ	灰 灰オリーブ	回転ナデ	回転ナデ	1～3mmの小礫含む 石英・輝石含む		200317 00052
53 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	45.6	—	67.8	灰黄～灰 黒～黒に ぶい黄緑	灰黄 灰～灰	回転ナデ ナデ・タタキ	回転ナデ ナデ・タタキ	石粒(長石・角閃石など) 含む		200317 00053
54 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(15.3)	—	24.6	灰白～灰 暗灰	灰白～灰 暗灰	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ・ナデ	5mm大の砂粒(長石・石英な ど)含む		200317 00054
55 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(17.0)	—	25.5	青灰 灰褐	青灰 灰黄	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ・ナデ	1mm程度の砂粒含む 長石含む		200317 00055
56 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(18.4)	—	(29.9)	暗灰 暗灰	暗青灰 暗青灰	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ	1～2mmの砂粒多い 石英・黒石・黒色粒子含む	自然熱多い	200317 00056
57 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(24.4)	—	(41.8)	暗灰・青灰 暗青灰	青灰 青灰	回転ナデ タタキ・ケズリ	回転ナデ タタキ・ナデ	1mm程度の砂粒多い 石英・黒石・雲母含む		200317 00057
58 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(25.6)	—	47.1	オリーブ灰 灰	灰	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ	精良 1～3mmの砂粒含む 石英・黒石・雲母・黒色粒子含む		200317 00058
59 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(23.4)	—	(44.0)	暗灰 灰黄	暗青灰 灰黄	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ	精良 1～3mmの砂粒含む 石英・黒石・雲母・黒色粒子含む		200317 00059
60 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	25.5	—	50.4	暗灰 灰	黒灰 灰	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ	1～3mmの小礫・砂粒含む 石英・黒石・雲母・黒色粒子		200317 00060
61 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	(50.4)	—	(15.3)	灰黄 灰	灰 青灰	回転ナデ ナデ・タタキ	回転ナデ ナデ・タタキ	1～2mmの砂粒多い 石英・黒色粒子・輝石含む		200317 00061
62 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	44.6	—	90.0	灰 暗灰	灰白 暗灰	回転ナデ タタキ	回転ナデ ナデ・タタキ	1～3mmの砂粒含む 黒色粒子・石英・黒石・雲母		200317 00062
63 第35区	4号墳 祭祀遺構	須恵器	甕	50.9	—	85.2	暗灰 灰	灰白 灰褐	回転ナデ ナデ・タタキ	回転ナデ ナデ・タタキ	1～3mmの砂粒含む 黒色粒子・石英・黒石・雲母		200317 00063
64 第35区	4号墳 周溝	埴輪	円筒	(7.7)	—	(5.8)	橙	橙	ハケメ	ハケメ	1～3mmの砂粒含む 赤色粒子 多い 石英・黒石・雲母		200317 00064
65 第35区	4号墳 周溝	埴輪	円筒	(4.7)	—	(4.6)	橙	橙	ハケメ	ハケメ	1mm程度の砂粒含む 赤色粒 子多い 石英・黒石・雲母		200317 00065
66 第35区	4号墳 周溝	埴輪	(円筒)	(5.4)	—	(4.3)	橙	にぶい橙	ハケメ ナデ	ナデ	1mm程度の砂粒含む 赤色粒 子多い 石英・黒石・雲母	円形通孔	200317 00066
67 第35区	4号墳 周溝	埴輪	(円筒)	(5.5)	—	(6.2)	橙	橙	ハケメ ナデ	不明	1～2mmの砂粒含む 赤色粒 子多い 石英・黒石・雲母	円形通孔	200317 00067
68 第35区	4号墳 周溝	埴輪	(円筒)	(4.3)	—	(5.4)	橙	橙	ハケメ ナデ	不明	0.5～1mm程度の砂粒多い 石英・雲母・赤色粒子		200317 00068

第9表 浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表（3）

遺物No.	出土遺物	種類	図形	造 量			色 調				装 飾		胎 土	備 考	遺物登録 番 号
				口径 (長)	底径 (幅)	跡高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面					
69 第53・710	4号墳 周溝	埴輪	(円筒)	(5.6)	—	(4.2)	緑	緑	ハケメ ナデ	ナデ			1~2mmの砂粒含む 赤色粒子・石英・黒石・雲母		200317 00069
70 第53・710	4号墳 周溝	埴輪	(円筒)	(6.0)	—	(3.9)	緑	緑	ナデ	不明			1mm程度の砂粒多い 石英・雲母・長石・赤色粒子		200317 00070
71 第53・710	4号墳 周溝	埴輪	輪彫形	(9.2)	—	(4.7)	緑	緑	ハケメ ナデ	ハケメ			1~2mmの小礫多い 赤色粒子・輝石・角閃石・雲母		200317 00071
72 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	11.7	—	4.5	灰	灰	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			砂粒(長石など)含む	ヘア記号有り	200317 00072
73 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	11.8	—	4.2	灰 にぶい緑	褐灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			少量の細砂粒 (長石・石英など)含む	ヘア記号有り	200317 00073
74 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	11.7	—	3.7	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ			3.5mm大の石粒(長石・石英 など)含む	ヘア記号有り	200317 00074
75 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	12.6	—	3.8	黄灰	黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			多量の石粒(長石など)含む	ヘア記号有り	200317 00075
76 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	11.8	—	3.8	灰黄 灰黄褐・灰	黄灰 灰黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			4~5mm大の石粒(長石・石英 など)含む	ヘア記号有り	200317 00076
77 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	12.5	—	3.8	灰	灰	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			少量の砂粒(長石など)含む	ヘア記号有り	200317 00077
78 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	12.5	—	3.1	灰白~灰 灰	灰白 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			少量の砂粒(長石など)含む	ヘア記号有り	200317 00078
79 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	(10.1)	—	4.3	灰	灰白 灰黄・灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			ほぼ精良	ヘア記号有り	200317 00079
80 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	10.8	—	3.1	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			石粒(長石・石英など)含む	ヘア記号有り	200317 00080
81 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	(10.7)	—	3.9	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			ほぼ精良	ヘア記号有り	200317 00081
82 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	13.2	—	3.4	灰	灰	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ			石粒(長石・石英など)含む	ヘア記号有り	200317 00082
83 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏蓋	13.8	—	2.9	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			多量の石粒(長石・石英など)含む	ヘア記号有り	200317 00083
84 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	8.7	—	2.3	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ			砂粒(長石など)含む 3mm大の石粒など含む	ヘア記号有り	200317 00084
85 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	9.1	—	2.8	灰黄	灰黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			3~5mm大の石粒(長石など) 含む	ヘア記号有り	200317 00085
86 第64・710	24号墳 墓道	須恵器	坏身	11.1	—	3.2	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			石粒(長石・石英など)含む	ヘア記号有り	200317 00086
87 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	高坏	9.4	(6.3)	8.1	灰黄 灰	灰黄 灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ			砂粒(長石など)含む		200317 00087
88 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	高坏	(9.0)	6.2	10.0	にぶい黄緑 灰黄褐	灰黄 にぶい褐	回転ナデ カキメ	回転ナデ ナデ			ほぼ精良		200317 00088
89 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	高坏	(10.5)	8.2	3.0	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ ナデ			3mm大の石粒(長石など)含む	ヘア記号有り	200317 00089
90 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	高坏	(11.0)	8.7	12.6	灰白 淡黄	灰白 淡黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			砂粒(長石・石英など)含む		200317 00090
91 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	高坏	(13.2)	—	(3.7)	灰	灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ			4mm大の石粒(石英など)含む		200317 00091
92 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	皿	(10.9)	—	14.3	灰黄褐 灰黄	灰黄 灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			多量の石粒(長石・石英など) 含む		200317 00092
93 第63・710	24号墳 墳丘	須恵器	埴瓶	6.6	—	8.8	灰	灰	回転ナデ ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ ナデ			砂粒(長石・石英など)含む		200317 00093
94 第63・710	24号墳 石室前面	須恵器	埴瓶	4.6	—	11.6	灰白 灰黄・灰	灰白 灰黄・灰	回転ナデ カキメ	回転ナデ			ほぼ精良		200317 00094
95 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	4.9	—	12.8	にぶい緑 灰黄褐	にぶい緑 灰黄褐	回転ナデ カキメ	回転ナデ ナデ			砂粒(長石など)含む		200317 00095
96 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	(7.2)	—	16.0	灰・暗灰 灰白	灰白~灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ			石粒(石英・長石など)含む		200317 00096
97 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	—	—	(12.3)	灰	灰	カキメ ナデ	回転ナデ			3mm大の砂粒(長石・石英など) 含む		200317 00097
98 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	4.4	—	11.3	灰 暗灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			3~4mm大の石粒(長石など) 含む		200317 00098
99 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	9.3	10.8	16.0	灰	灰	回転ナデ ハケメ・ナデ	回転ナデ			1~2mmの砂粒多い 石英・黒色粒子・輝石含む		200317 00099
100 第63・710	24号墳 墓道	須恵器	埴瓶	6.6	—	17.8	灰 黒褐	灰	回転ナデ・カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ			5~6mm大の石粒含む		200317 00100
101 第63・710	24号墳 石室柱上	須恵器	波殻形	(7.0)	—	(1.7~ 4.1)	にぶい赤褐	にぶい緑	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ			精良 1~3mmの礫含む 石英・黒石・金雲母		200317 00101
102 第63・710	24号墳 石室柱上	須恵器	壺	(16.6)	—	(6.0)	灰黄	灰	回転ナデ タタキ	回転ナデ タタキ			1~5mmの砂粒・小礫含む 石英・黒色粒子		200317 00102

第10表 浦山古墳群第4次調査出土遺物観察表（4）

遺物No.	出土遺物	種類	図形	法 量				色 調				胎 土	備 考	遺物登録 番 号
				口径 (長)	底径 (幅)	高さ (厚)		外 面	内 面	外 面	内 面			
103 第66・75区	24号墳 石室礎土	須恵器	礎	(23.2)	—	(28.9)		浅黄 黄	灰 灰黄	回転ナデ タタキ・カキメ	回転ナデ タタキ	1~3mmの砂粒含む 黒色粒子・石英		200317 00103
104 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	坏身	10.9	5.8	3.8		にぶい黄褐色 黒	にぶい黄褐色 にぶい黄	回転ナデ・ミガキ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子	黒漆	200317 00104
105 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	坏身	(11.0)	—	(4.0)		にぶい黄褐色 褐色・黒	にぶい黄褐色 黒	回転ナデ・ミガキ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子・砂粒(石英など) 含む	黒漆	200317 00105
106 第66・75区	4号墳 表土付近	土師器	坏身	(10.7)	—	3.8		にぶい黄褐色 灰・暗灰	にぶい黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ・ミガキ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む 2mm大の石粒含む	黒漆	200317 00106
107 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	坏身	(11.8)	—	(4.2)		にぶい黄褐色 黄褐色	にぶい黄褐色 黄褐色	回転ナデ・ミガキ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む 少量の砂粒(石英など)含む	黒漆	200317 00107
108 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	坏身	11.0	—	4.6		にぶい黄褐色 黄褐色	にぶい黄褐色 黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む 3mm大の石粒含む	黒漆	200317 00108
109 第66・75区	4号墳 表土付近	土師器	坏	(14.0)	(7.7)	(3.7)		浅黄褐色・ にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	浅黄褐色・ にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良 赤色粒子・黒色粒子 少量の砂粒(石英など)含む	内・外面 一巡丹塗り	200317 00109
110 第66区	4号墳 祭祀遺構	土師器	高坏	(16.6)	(12.6)	15.3		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子・黒色粒子 4mm大の石粒(石英など)含む		200317 00110
111 第66・75区	4号墳 表土付近	土師器	蓋	—	2.3	(5.4)		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ヘラケズリ ナデ	ナデ	少量の赤色粒子		200317 00111
112 第66区	4号墳 表土付近	土師器	蓋	—	3.3	(9.9)		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む		200317 00112
113 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	蓋	—	—	(9.4)		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 明赤褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子含む		200317 00113
114 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	蓋	—	—	(4.5)		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	3mm大の石粒・ 砂粒(石英など)含む		200317 00114
115 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	野合付蓋	5.3	—	(10.4)		にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 灰黄褐色・黄	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	黒色粒子 少量の微砂粒含む		200317 00115
116 第66・75区	4号墳 祭祀遺構	土師器	野合付蓋	(8.5)	—	(9.3)		にぶい黄褐色 灰黄褐色・黄 灰・黒	にぶい黄褐色 灰黄褐色・黄 灰・黒	ヘラケズリ ミガキ	回転ナデ ナデ	微量の赤色粒子 少量の微砂粒(石英など)含む	内・外面 丹塗り	200317 00116
117 第66・75区	4号墳 表土付近	土師器	野合付蓋	(7.0)	7.8	14.3		明赤褐色 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	明赤褐色 にぶい黄褐色 明赤褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子・黒色粒子・ 少量の砂粒(石英など)含む	内・外面 丹塗り	200317 00117
118 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.5	2.7	0.8								200317 00118
119 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.4	2.6	0.8								200317 00119
120 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.6	2.8	0.9								200317 00120
121 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.3	2.6	0.5								200317 00121
122 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.2	2.3	0.4								200317 00122
123 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.3	2.4	0.2								200317 00123
124 第66区	24号墳 墓道	銅製品	耳環	2.1	2.1	0.2								200317 00124
125 第66・75区	24号墳 玄室礎土	鉄製品	鉄線	(8.8)	3.1	0.3								200317 00125
126 第66・75区	24号墳 玄室礎土	鉄製品	鉄線	(8.7)	3.0	0.3								200317 00126
127 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	馬具	(7.2)	0.6	0.4								200317 00127
128 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	馬具	(6.0)	7.0	4.0								200317 00128
129 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	刀子	(5.0)	(1.3)	0.4								200317 00129
130 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	刀子	(9.2)	1.8	0.25								200317 00130
131 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	不明	(3.1)	2.5	0.15								200317 00131
132 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	不明	(3.8)	0.5	0.4								200317 00132
133 第66・75区	24号墳 玄室	鉄製品	雲珠	—	1.9	2.4								200317 00133
134 第66・75区	24号墳 墓道	鉄製品	鈴	(4.2)	1.1	0.3								200317 00134
135 第66・75区	24号墳 前庭礎土	鉄製品	鈴具	7.3	4.2	0.6								200317 00135

第11表 浦山古墳群第4次調査24号墳出土土器観察表

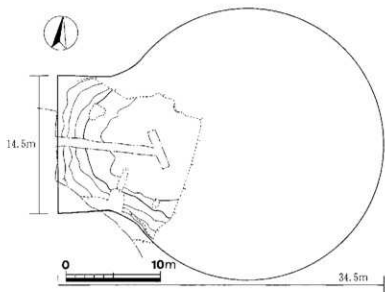
N o	最大径	厚さ	孔径	色	遺物番号	完・欠	材質
1	2.7	1.3	1.4	濃青	20031700136	完	ガラス
2	2.6	1.5	1.6	濃緑灰	20031700137	完	ガラス
3	2.9	2	1.8	濃緑	20031700138	完	ガラス
4	4.9	4.1	2	暗灰	20031700139	完	ガラス
5	1.8	1	1.2	淡緑	20031700140	完	ガラス
6	3	1.6	1.2	明黄	20031700141	完	ガラス
7	2.3	1	1.8	淡青	20031700142	完	ガラス
8	2.4	1.5	1.9	淡青	20031700143	完	ガラス
9	2.5	1	1.4	淡青	20031700144	完	ガラス
10	2.5	2	1.4	明淡青	20031700145	完	ガラス
11	2.6	1.3	1.3	明淡青	20031700146	完	ガラス
12	2.7	1.6	1.5	濃青	20031700147	完	ガラス
13	2.7	1.7	1.4	濃青	20031700148	完	ガラス
14	2.8	1.9	1.6	濃青	20031700149	完	ガラス
15	2.9	1.7	1.5	濃青	20031700150	完	ガラス
16	2.9	2	1.5	濃青	20031700151	完	ガラス
17	3	1.5	1.5	濃青	20031700152	完	ガラス
18	3.1	1.5	1.6	濃青	20031700153	完	ガラス
19	3.1	1.9	1.4	濃青	20031700154	完	ガラス
20	3.2	1.6	2	濃青	20031700155	完	ガラス
21	3.2	1.9	1.8	青緑	20031700156	完	ガラス
22	3.3	1.8	1.9	青灰	20031700157	完	ガラス
23	3.4	2.4	2	濃青	20031700158	完	ガラス
24	3.4	2.9	1.7	明黄	20031700159	完	ガラス
25	3.5	1.7	1.9	濃青	20031700160	完	ガラス
26	3.5	1.8	2	明黄	20031700161	完	ガラス
27	3.5	2.3	2	濃青	20031700162	完	ガラス
28	3.6	2	1.9	青黒	20031700163	完	ガラス
29	3.6	2.1	1.7	濃青	20031700164	完	ガラス
30	3.7	1.9	1.5	明黄	20031700165	完	ガラス
31	3.7	2.1	1.9	淡緑	20031700166	完	ガラス
32	3.7	2.3	1.8	濃青	20031700167	完	ガラス
33	3.7	2.6	1.7	緑灰	20031700168	完	ガラス
34	3.8	2.2	1.6	明淡青	20031700169	完	ガラス
35	3.9	2	1.8	濃青	20031700170	完	ガラス
36	4.2	2.6	2	明黄	20031700171	完	ガラス
37	4.2	3.1	2	明淡青	20031700172	完	ガラス
38	4.3	2	1.9	青黒	20031700173	完	ガラス
39	4.4	2.9	1.9	明黄	20031700174	完	ガラス
40	4.6	2.9	2.4	明淡青	20031700175	完	ガラス
41	4.6	3.1	2.1	明淡緑	20031700176	完	ガラス
42	4.7	3	1.9	明青	20031700177	完	ガラス
43	4.8	2.6	2.2	明淡青	20031700178	完	ガラス
44	4.9	2.9	2.7	明淡青	20031700179	完	ガラス
45	5.3	3.8	2.8	濃青	20031700180	完	ガラス
46	5.3	3.9	2.4	濃青	20031700181	完	ガラス
47	5.4	2.6	2.3	明淡青	20031700182	完	ガラス
48	5.4	3	2	明黄	20031700183	完	ガラス
49	5.4	3.7	2	緑灰	20031700184	完	ガラス
50	5.4	3.7	2.4	暗灰	20031700185	完	ガラス
51	5.4	4.8	3.4	青黒	20031700186	完	ガラス
52	5.5	4.2	2.3	濃青	20031700187	完	ガラス
53	5.5	4.5	3	青黒	20031700188	完	ガラス
54	5.6	2.3	1.5	明橙	20031700189	完	ガラス
55	6	3.1	2.3	濃青	20031700190	完	ガラス
56	6	5.3	2.6	濃青	20031700191	完	ガラス
57	6.1	4.4	3	濃青	20031700192	完	ガラス
58	6.3	3.1	2.4	濃青	20031700193	完	ガラス
59	6.3	5	2.3	青黒	20031700194	完	ガラス
60	6.3	6	2.4	濃青	20031700195	完	ガラス
61	6.4	4.3	2.6	濃青	20031700196	完	ガラス
62	6.5	3.8	2.9	濃青	20031700197	完	ガラス
63	6.5	5.1	2.2	青黒	20031700198	完	ガラス
64	6.8	3.8	2.7	濃青	20031700199	完	ガラス
65	6.9	4.2	2.6	青黒	20031700200	完	ガラス
66	6.9	4.7	2.7	濃青	20031700201	完	ガラス
67	7	6	2.2	濃青	20031700202	完	ガラス
68	7.4	4.9	2.7	濃青	20031700203	完	ガラス
69	7.4	5.7	2.1	濃青	20031700204	完	ガラス
70	7.5	4.8	2.7	濃青灰	20031700205	完	ガラス
71	7.5	4.9	3.2	青黒	20031700206	完	ガラス
72	7.6	4.7	3	濃青	20031700207	完	ガラス
73	8	5.8	2.1	青黒	20031700208	完	ガラス
74	8.1	5.2	2.8	青黒	20031700209	完	ガラス
75	8.2	6.8	2.1	赤褐	20031700210	完	琥珀
76	8.3	6.3	1.9	濃青	20031700211	完	ガラス
77	8.6	6.8	2.2	濃青	20031700212	完	ガラス
78	3.1	11.7	2.2	緑灰	20031700213	完	碧玉
79	3.2	8.3	1.9	赤褐	20031700214	完	碧玉
80	3.5	8.8	2.3	淡緑	20031700215	完	碧玉
81	3.9	10	2.4	淡緑	20031700216	完	碧玉
82	3.9	13.5	1.8	淡緑	20031700217	完	碧玉

4. ま と め

今回の調査は、専用住宅建設に先立つ事前調査として行ったものである。事前に実施した確認調査で古墳の存在が認められたものであるが、当初は墳形・規模はもとよりその存在さえも不明であった。調査地のやや東側には、『福岡県遺跡等分布地図』に浦山4号墳が掲載されている。しかし、現在は地下げが行われ宅地化している為に、既に消滅していると思われていた。しかし、本文中でも述べたように、浦山4号墳は前方後円墳であったことが判明し、今回の調査では、その前方部を調査したことになる。更に浦山4号墳前方部上には新たに円墳が確認され、浦山24号墳と命名した。ここでは、浦山4・24号墳の調査成果をまとめてみたい。

浦山4号墳の復元

ここでは、今回の調査で前方後円墳と判明した、浦山4号墳の復元を試みたい。前述したように、浦山4号墳は、幅14.5m・長さ9.0mの前方部を西に向けていることが確認された。前方部の形態から、調査区の東側約350mに位置する浦山古墳と同形態のいわゆる帆立貝式前方後円墳であると考えられる。浦山古墳は、全長約60m、後円部径約40m、前方部幅約20mであり、内部主体は前方部側（西側）に開口する初期横穴式石室内に、線刻による装飾が施された妻入横口式石棺を有する。東西方向に長い浦山丘陵尾根筋の最高所に立地する点は、浦山4号墳と一致する。古くから開口しており出土遺物については不明であるが、墳丘くびれ部や前方部付近で陶器Ⅰ型式－3段階の須恵器が採集されており、前方後円墳集成7期の築造が想定されている。一方、浦山4号墳の主体部は全く不明であるが、前方部上で確認された祭祀遺構の配置から推測すると、浦山古墳と同じく前方部側（西側）に開口した横穴式石室の可能性が高い。また、祭祀遺構や周溝からの出土遺物により、陶器Ⅱ型式－1段階（前方後円墳集成9期）の築造時期が考えられる。以上のような立地・構造の類似性、築造時期などから、浦山4号墳は浦山古墳の次世代、もしくは二世代後出する首長墓と考えることができる。このことから、浦山4号墳の復元に墳丘プランが判明している浦山古墳を用いてみたい。浦山古墳は、後円部径：前方部幅＝2：1であり、浦山4号墳に当てはめると、前方部幅が14.5mであるので、後円部径は29mとなる。南側くびれ部は判明しているので、くびれ部に合わせて墳丘主軸上で直径29mの円を描くと、第77図のように復元できる。復元した全長は約34.5mとなる。しかし、この復元案では、祭祀遺構の位置が問題となる。復元案によると、祭祀遺構は後円部の中心から7m付近まで入り込むことになる。既に後円部中央へ向かって傾斜が付いているはずであるが、祭祀遺構はほぼ平坦な位置で確認されており、内部主体前面の様相に不明な点が残る。浦山4号墳を復元する手掛りは全くなく、今回は試案として提示しておきたい。



第77図 浦山4号墳復元案（1/400）

久留米の首長墓について

久留米市は、筑後平野のほぼ中心に位置し、北には筑後川が流れ、東には耳納山地が連なる。交通の要衝として古くから栄え、市内には旧石器時代以降、多くの遺跡が存在する。このような環境の下、古墳時代には筑後川左岸最古の方墳である祇園山古墳をはじめ、古墳時代初頭から後期に至るまで数多くの古墳が築造され、各小地域内では首長墓が営まれている。今回調査を実施した浦山4号墳は前方後円墳であることが確認され、至近距離に位置する浦山古墳と同系列の首長墓であると考えられる。ここでは、久留米市域の首長墓について簡単にまとめておきたい。

久留米市街の東側には耳納山地が連なるが、この北麓には後期を中心として数多くの群集墳が築造されている。中には彩色系装飾古墳が多く存在し、全国有数の装飾古墳密集地として知られている。**田主丸大塚古墳**は、当地域の盟主的な大塚古墳群中に存在し、前方後円墳集成（以下、集成）10期の築造とされる。全長は103mと大きく、当時における筑後川左岸地域の盟主墳である。**下馬場古墳**は集成10期の築造で、巨石を用いた大型の横穴式石室を主体部とする。石室内には同心円文や三角文・船などを描く。直径約30mの大型円墳で、詳細な調査は行われていないが、周溝部分より人物や円筒埴輪が出土している。群集墳中の盟主墳である。**木塚古墳**は、筑後川左岸の自然堤防上に築かれた全長48mの前方後円墳である。形象・円筒埴輪が出土しているが、朝倉窯系初期須恵器が出土しており、集成6期に位置付けられる。**祇園山古墳**は耳納山地西端に築造された、一辺約24mの方墳である。大型の箱式石棺を主体部とし、高良大社所蔵の三角縁神獣鏡が出土したと伝えられる。墳裾部からは甕棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壇墓・堅穴式石室などが62基検出されている。**藤山甲塚古墳**は、祇園山古墳の南約2.0kmの藤山道沿いに位置し、前方部を西へ向けた全長約70mの帆立貝式前方後円墳である。主体部は初期横穴式石室で、天草砂岩製の石障が巡る。盾・甲冑などの器材、円筒・朝顔形埴輪が出土しており、集成5～6期に位置付けられる。**石櫃山古墳**は、藤山甲塚古墳の北側約1.5kmに位置する。藤山道からそう遠くなく、内部主体には阿蘇凝灰岩製の妻入横口式家形石棺を採用している。石室の有無は不明である。現在消滅しているが、全長約110mの前方後円墳とされる。形象・円筒埴輪が出土しており、集成6期に位置付けられている。**浦山古墳**は、石櫃山古墳の南西約0.7kmに位置する。耳納山系飛岳より派生した浦山丘陵上に立地し、この浦山丘陵に沿うように藤山道が通過する。本文中でも述べたように全長は約60mで、帆立貝式前方後円墳である。主体部は石櫃

第12表 久留米市域首長墓一覧表

古墳名	所在地	墳形	全長(周溝含む)	埴輪	時期
田主丸大塚古墳	久留米市田主丸町	前方後円墳	103m		10期
下馬場古墳	草野町	円墳	約30m	円筒・形象	10期
木塚古墳	善導寺町	前方後円墳	48m	円筒・形象	6期
祇園山古墳	御井町	方墳	約24m		1期
藤山甲塚古墳	藤山町	前方後円墳	約70m	円筒・朝顔・形象	5～6期
石櫃山古墳	高良内町	前方後円墳	約110m	円筒・形象	6期
浦山古墳	上津町	前方後円墳	約60m	円筒	7期
浦山4号墳	上津町	前方後円墳	約34.5m	円筒・朝顔	9期
本山古墳	上津町	前方後円墳	後円部40m	円筒・形象	8～9期
日輪寺古墳	京町	前方後円墳	約50m	円筒	9期
御塚古墳	大善寺町	前方後円墳	78(121)m	円筒・朝顔・形象	7～8期
権現塚古墳	大善寺町	円墳	55(152)m	円筒・朝顔・形象	9期
二子塚古墳	荒木町	前方後円墳	50～60m	円筒	10期
鷺塚古墳	荒木町	前方後円墳	50～60m		10期



第78図 久留米市城首長墓位置図（1/200,000）

山古墳と同じく阿蘇凝灰岩製の妻入横式家形石棺で、西に開口する横式石室内に納めている。出土遺物から集成7期に位置付けられる。**本山古墳**は、浦山丘陵と上津荒木川を挟んで対峙し、浦山4号墳の南西約1.0km位置に存在する。本山丘陵上にも群集墳が多く築造されているが、本山古墳群中では突出した規模を有する。前方部は既に消滅しているが、後円部径は約40mを測る。円筒埴輪が出土しているものの詳細は不明であり、築造時期は集成8期以降である。**日輪寺古墳**は筑後川左岸の丘陵上に位置する全長約

50mの前方後円墳である。主体部は阿蘇凝灰岩製の石障が四壁を巡る横式石室で、石障には鍵手文・同心円文が線刻されている。集成9期に位置付けられる。筑後川を下流に下ると、左岸には水沼君の奥津城と解釈されている御塚古墳・権現塚古墳が存在する。**御塚古墳**は帆立貝式前方後円墳で、全長78mの墳丘に3重の周溝・周堤が巡る。周堤を含めた全長は、121mである。主体部は不明であるが、形象・円筒・朝顔形埴輪が出土しており、集成7～8期に位置付けられる。**権現塚古墳**は、2重の周溝・周堤を持つ大型円墳で、直径55mを測る。周堤まで含めた直径は152mにも達する。主体部は不明であるが、出土した形象・円筒・朝顔形埴輪、須恵器などから、集成9期の年代が与えられる。また、両古墳からは新羅系須恵器が出土しており、被葬者の性格を考える上で重要な資料である。御塚古墳・権現塚古墳の北東約0.6kmには、100mクラスの前前方後円墳である**銚子塚古墳**が存在した。現在は消滅している為に詳細は不明であるが、御塚古墳・権現塚古墳と同系列の首長墓であろう。御塚古墳・権現塚古墳の南を流

第13表 久留米市城首長墓編年表

年代	大塚	山	寺
300		本山古墳	
400	権現塚古墳	御塚古墳	日輪寺古墳
500	銚子塚古墳	浦山4号墳	日輪寺古墳
600	御塚古墳	権現塚古墳	日輪寺古墳

（ ）内は時期未確定

れる広川を溯ると、**二子塚古墳・鷲塚古墳**が存在する。両古墳共に消滅しており、詳細は不明であるが、50～60mの前方後円墳と考えられている。二子塚古墳出土の円筒埴輪や須恵器などから、集成10期に位置付けられる。

以上、久留米市域における前方後円墳をはじめとする首長墓を概観したが、ここで、浦山4号墳の位置付けを行いたい。本文中でも述べたように、浦山4号墳は集成9期に位置付けられ、藤山道沿いに展開した藤山甲塚古墳→石櫃山古墳→浦山古墳の後に位置付けられる。これらの首長墓が展開する地域を藤山地域と名づけるならば、これまで藤山地域の首長墓は、浦山古墳以降、不明であった。本山古墳や日輪寺古墳を浦山古墳の後に当てはめられることもあったが、浦山4号墳と日輪寺古墳はほぼ同時期であり、本山古墳は対峙する本山丘陵上に存在する。浦山4号墳の発見により、藤山地域の首長墓は、藤山甲塚古墳→石櫃山古墳→浦山古墳→浦山4号墳（→本山古墳）と継続したものと考えられる。しかし、藤山甲塚古墳以来、主体部に見られた肥後地方との関連性は、浦山4号墳の主体部が消滅していることもあり、今回の調査では見つけることができなかった。また、筑後平野の首長墓は6世紀前半に断絶する地域が多く、代わって八女地域では新たに首長墓が継続して築造されるようになるが、浦山4号墳は、全長40m以下と小型化しており、藤山地域の首長墓も終焉に向かっているように看取される。しかし、浦山4号墳から西方に展開する水沼地域では、御塚古墳・権現塚古墳以降、集成10期に至るまで首長墓が継続して築造されており、藤山地域とは異なった状況を呈している。また、浦山4号墳周溝から出土した埴輪は筑後市久塚古墳と酷似していることを述べたが、久塚古墳は全長45m程度と浦山4号墳に類似している。出土須恵器の年代に問題があるが、埴輪や須恵器、それらの作成技術など、情報や人・物の交流が行われていたことも想像できる。

かつて、森貞次郎は藤山甲塚古墳・石櫃山古墳・浦山古墳や筑後川左岸に位置する木塚古墳などを、久留米古墳群と称した。これらの古墳の主体部に見られる多様な要素と地理的条件から、岩戸山古墳出現以前における筑紫君の墓所と考えている。しかし、その後、岩戸山古墳以前に築造された久塚古墳や神奈無田古墳（詳細不明）などが八女地域でも確認され、さらに近年、八女古墳群中の前方後円墳が精力的に調査されていることにより、八女古墳群内での編年も再構築する必要が生じている。今回調査を実施した浦山4号墳は、岩戸山古墳が築造される直前か同時期に位置付けられる。浦山4号墳をもって藤山地域の首長墓系譜が途絶えるのであれば、岩戸山古墳出現時の八女丘陵周辺、そして筑後地域を考える上で非常に興味深い資料を提供したと言える。

おわりに

今回は、浦山古墳に後続する首長墓と目される浦山4号墳を調査することができた。主体部が既に消失していることから、十分な成果を得ることが出来なかったが、6世紀前半の前方後円墳を確認できたことは大きな成果であろう。今回の報告では、紙面の都合などから浦山4号墳の位置付けに終始してしまいが、須恵器・埴輪の産地や流通範囲、浦山24号墳が浦山4号墳を破壊して築造されている問題など、興味深い課題が山積している。今後、周辺の古墳・出土遺物を含めて検討していきたいと思う。

現地での調査や整理過程で御指導・助言を頂いた次の方々に、文末ではありますが、記して感謝いたします（敬称略・順不同）。

佐田茂（佐賀大学）・西健一郎（九州大学）・露久嗣郎（久留米市文化財専門委員）・中村勝・宮田浩之（小郡市役所）・大塚恵治（八女市教育委員会）・岸本圭（福岡県教育庁）・岡田裕之

VI. 速水遺跡（第2次調査）

1. 調査に至る経過

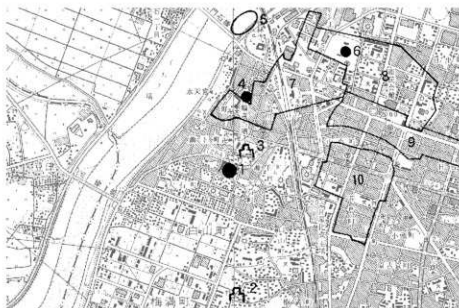
本調査は、平成15年12月1日に、地権者である[]氏より久留米市大石町98-1における、共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに端を発する。依頼地は周知の遺跡である速水遺跡の範囲内に含まれていることから、12月16日に試掘調査を実施した。その結果、現表土から-90cmでピット等の遺構が確認され、弥生土器の出土も見られた。その後、施工業者との協議の結果、共同住宅建設部分については基礎の一部を設計変更することにより、保存調整の措置を講ずることとなったが、駐車場部分については遺構検出面近くまで掘削されることから、代理人との協議の結果、確認調査を実施することで合意した。

調査は駐車場部分の61㎡を対象とし、平成15年12月25日から平成16年1月8日まで実施した。

2. 位置と環境

阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川である筑後川は、久留米市街地の北西に位置する久留米城付近で流路を大きく南西へと転じ、大きな蛇行を繰り返しながら有明海へと注ぐ。速水遺跡は、この筑後川左岸に形成された標高11m余りの低台地上に立地する。また1979年発行の『福岡県遺跡等分布地図』には弥生時代の甕棺墓地として登録されており、実態は明らかでなかったものの、古くよりその存在が知られていた遺跡でもある。調査地から国道を隔てて北側に鎮座する大石神社には、御神体である一大霊石が祀られており、本来は支石墓の上石であったとする可能性も指摘されている。

さて、久留米市街地においては近世の久留米城下町の形成に伴って旧地形が大きく改変され、低台地上に存在していた中世以前の遺跡の多くが削平によって消滅している。そのため、中世以前の遺構が検出されることは稀で、近世期の遺構に遺物が混入して出土する程度である。市街地において最も古い生活痕跡が確認できるのは弥生時代である。明善高校校庭遺跡、京隈侍屋敷遺跡、梅林寺川底遺跡などから中期の



遺跡名

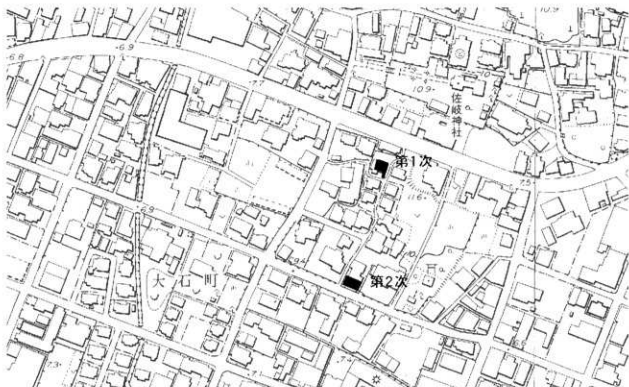
1. 速水遺跡
2. 大隈村遺跡
3. 大石村遺跡
4. 日輪寺古墳
5. 梅林寺川底遺跡
6. 明善高校校庭遺跡
7. 京隈侍屋敷遺跡
8. 久留米城外郭遺跡
9. 久留米城下町遺跡
10. 庄島侍屋敷遺跡

第79図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

土器が出土している他、近年の調査では久留米城外郭遺跡から甕棺の破片や、土坑・ピットなどが確認されており、将来の集落域の確認が待たれる。古墳時代では、市街地唯一の現存する古墳である日輪寺古墳（国指定史跡）が存在する。5世紀末～6世紀初頭に位置付けられる全長50m近い前方後円墳で、西側に開口する横穴式石室を有し、石室内には阿蘇凝灰岩製の石障を四壁に巡らせている。また石障の内側には鍵手文と同心円文とを交互に配した線刻による装飾文様が施されている。副葬品には仿製四獣鏡・耳環・石枕などが見られる。

律令期の筑後国は10郡を管轄し、大石町付近は三潞郡に組み込まれることとなる。『和名抄』には三潞郡中には8郷の名が見え、大石町付近は鳥養郷に属していたと考えられる。該期の遺構としては京隈侍屋敷遺跡第1次調査で奈良期の土坑1基が検出され、土師器の細片が出土している程度である。中世は「くるめ」の名が初めて文献に登場する時期である。鎌倉時代から確認できる高良荘は800町を越す荘園で、現在の市街地一帯にその荘域が比定されている。城下町遺跡の調査では井戸や溝が検出されており、久留米城築城以前の一端が偲ばれる。また連水遺跡の北側に位置する大石神社付近は、『筑後将士軍談』に登場する大石越前守の居館と伝えられる大石村館跡の比定地でもある。

天正十五（1587）年の毛利秀包の入城、田中吉政の治世を経て、元和七（1621）年の有馬豊氏の入城以降、城下町の整備が本格的に開始されることとなる。この整備はそれまで谷部であった部分を埋め立てて町屋を建設するなどの大事業であった。有馬氏は明治四（1871）年の廃藩置県まで11代250年もの長きにわたって久留米藩を治め、武家屋敷や町屋の建設、二の丸・三の丸・外郭の拡充整備などに着手することとなる。久留米といえは「有馬」と云われる所以である。因みに連水遺跡周辺は『天保年間図』（1830～1844）によれば「大石村」と記されており、江戸時代後期には城下町の外れに展開する農村地帯であったことが窺える。



第80図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

3. 調査の記録

（1）調査の概要

駐車場部分の61㎡を対象とし、平成15年12月25日から重機による表土剥ぎを開始する。遺構の残存状況は良くないものの、堅穴住居と考えられるプランを確認。午後より作業員を投入して遺構の検出作業を行う。年末年始を挟んで翌年1月5日より発掘器材を搬入し、本格的に遺構の検出作業を実施。その後、遺構の掘り下げと併行して遺跡調査汎用システムによる測量を行う。遺構は全体に浅く、また密度も低いため、実働3日で遺構の掘り下げを終える。7日には調査区内の清掃、全体の写真撮影を行った後、発掘器材を撤収する。翌8日に測量基準点の座標を調査地点に移し、データの補正を行って現地での作業を終える。

なお記録写真は、カラーリバーサル・モノクロームともに6×7で撮影したが、撮影機器の不備に因り、記録写真が撮れていなかった。また遺構図面は遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて作成し、測量データは「カタタ3DC」で記録・保存している。

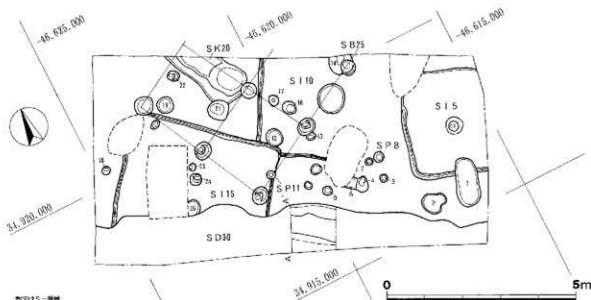
（2）遺構の概要

検出遺構は、弥生時代の堅穴住居3軒・土坑1基、古墳時代の掘立柱建物1棟、近世の溝1条・ビットなどである。遺構は全体に浅く、特に堅穴住居は床面の濁りから辛うじて住居と認識できた程度であった。また近世以降の遺構については時間的制約から、溝の一部の掘り下げに止めた。

a) 弥生時代の遺構

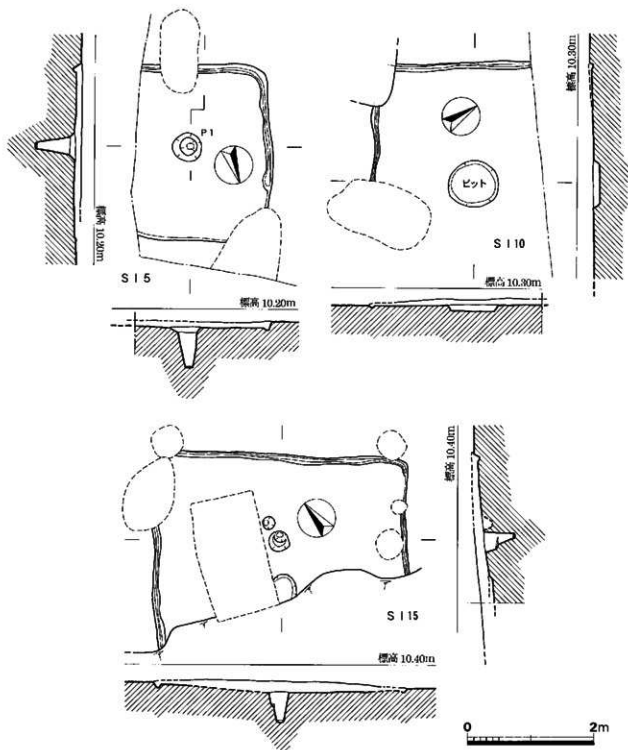
堅穴住居

S15（第82図） 調査区東端で検出した住居で、平面プランと壁溝の存在から住居と判断した。埋土は黒褐色土で深さは10cm程度であり、今回検出した堅穴住居の中では残り具合が良好な方である。南辺と西辺に壁溝が巡る。また北側は床面から数cm高くなっており、壁の残存状況から判断してベッド状遺構と考えられる。床面のほぼ中央部には深さ60cm程度の柱穴と考えられるビットが見られる。出土遺物は細片が多く、器形が窺える資料では甕や器台・壺など中期の土器が出土している。



第81図 速水道跡第2次調査遺構配置図（1/100）

S110（第82図） 調査区中央北寄りで検出した住居で、壁溝の存在と床面の濁りから住居と判断した。西辺と南辺に壁の立ち上がりが見え、図示したピットからは弥生土器の出土が見られたため、本住居に伴う可能性も考慮して取り上げたが確証はない。遺物は床面直上からは細片2点が出土したのみであり、図示した遺物はピット内からの出土である。

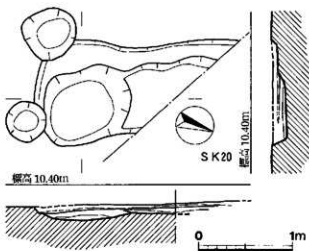


第82図 S15・10・15実測図 (1/60)

S I 15（第82図） S I 10の南西で検出したプランで、S I 10より後出する。南側を近世の溝（S D 30）によって切られるが、他の三方の壁際には壁溝が巡る。北辺で長さ約4 m、深さ15cm程度を測る。随所に攪乱が見られるため、中央付近で確認したピット3基以外には柱穴は判然としない。出土遺物は細片のみである。

土坑

S K 20（第83図） S I 10の北西で検出した、平面プランが長方形を呈する土坑である。北側が調査区外に延びるが、現状で長軸2 m余り、短軸1.1 m、深さは西側で20 cm程度を測る。埋土は黒褐色土で、弥生土器の甕・器台等の破片が出土している。

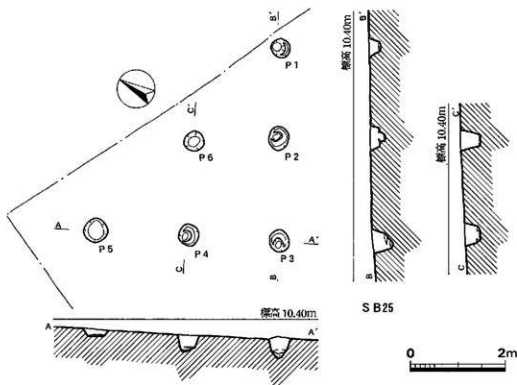


第83図 S K 20実測図（1/40）

b) 古墳時代の遺構

掘立柱建物

S B 25（第84図） 調査区の西半部で検出した、2間以上×2間以上の総柱建物である。主軸方位はN-61°-Eを示す。柱穴は径40～50 cmの円形プランを呈し、深さは16～40 cmとばらつきが見られる。また柱間は心々で2.0～2.1 mを測る。柱穴内からの出土遺物の大半は弥生土器であるが、須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕や模倣杯などが見られることから、古墳時代の建物と判断した。

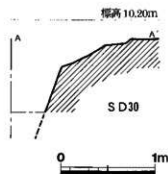


第84図 S B 25実測図（1/80）

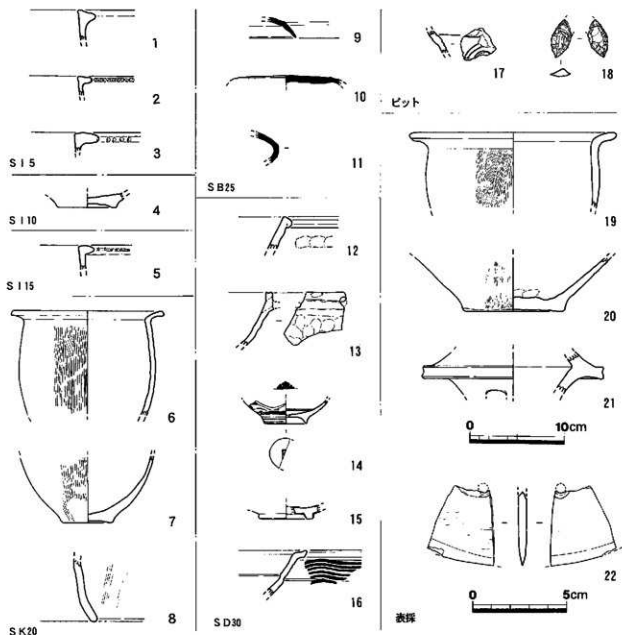
c) 近世の遺構

溝

SD30（第85図） 調査区の南端で検出した溝である。幅は少なくとも1.2m以上に及ぶが、現道と重複するため、全容を確認していない。北側は緩やかに掘り込まれた後、急激に深くなる。埋土は柔らかい灰褐色土で、深さは-85cmまで掘り下げたが底面には達していない。ボーリングステッキによる調査では更に20cm程度は深くなることが判明している。近世陶磁器や平瓦に混じて、土師器や弥生土器も出土している。



第85図 SD30断面実測図（1/40）



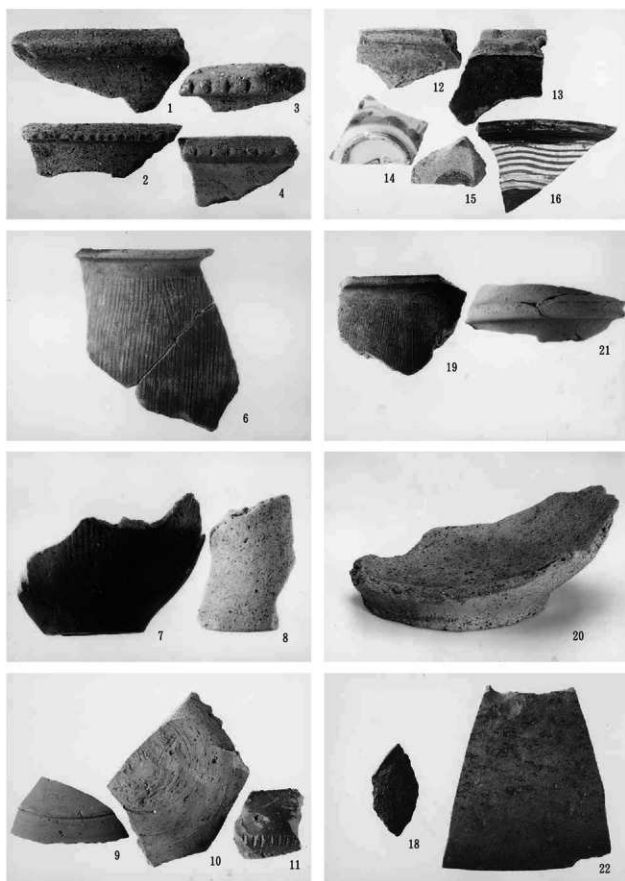
第86図 速水遺跡第2次調査出土遺物実測図（1/4，1/2）

(3) 遺物の概要

出土遺物は、弥生土器、石器、土師器、須恵器、近世陶磁器などが見られるが、全体でも浅パンコンテナ1箱にも満たない。大半は弥生土器であり、表土掘削時の資料中にも良好な遺物も見られる。詳細は遺物観察表(第14表)に記しているため、ここでは代表的な遺物について述べる。7は弥生土器の甕で、見込みにより工具によるナデ押さえの痕跡が見られる。11は須恵器の甕と考えられる。13は口縁部下に鈐を巡らすタイプの土鍋である。17は甕の肩部で円弧文を施す。18は石製の破損品であろう。20は法量から判断して甕の底部と考えられる。21は鼓形器台で鈐部下半に透かしが認められる。表面はかなり磨耗しており、丹塗りは認められない。

第14表 速水遺跡第2次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺情	材質	器種	法量 (cm)			色調 (文様)		調査		胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第86・87図	S I 5	弥生土器	甕			(3.2)	にぶい黄緑	明赤褐	ナデ	ナデ	細砂粒 微量の角閃石		200322 -00001
2 第86・87図	S I 5	弥生土器	甕			(2.1)	明灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	細砂粒 多量の角閃石		200322 -00002
3 第86・87図	S I 5	弥生土器	甕			(2.0)	橙	橙	ナデ	ナデ	砂粒		200322 -00003
4 第86・87図	S I 10 ピット	弥生土器	甕	6.2		(1.5)	にぶい黄	にぶい黄	ナデ	ナデ押さえ	細砂粒 多量の角閃石		200322 -00005
5 第86図	S I 15	弥生土器	甕			(2.6)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ナデ	ナデ	細砂粒 多量の角閃石		200322 -00007
6 第86・87図	S K 20	弥生土器	甕	16.0		(11.8)	褐灰	にぶい黄緑	ヨコナデ 刷毛目	ナデ ヨコナデ	細砂粒 角閃石		200322 -00010
7 第86・87図	S K 20	弥生土器	甕	5.3		(7.0)	オリーブ黒	浅黄	ナデ 刷毛目	ナデ	細砂粒 多量の角閃石		200322 -00011
8 第86・87図	S K 20	弥生土器	器台			(6.7)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	刷毛目	ナデ ヨコナデ	細砂粒 金雲母		200322 -00012
9 第86・87図	S B 25 ・ P 4	須恵器	杯蓋			(2.2)	にぶい赤褐	にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒		200322 -00015
10 第86・87図	S B 25 ・ P 4	須恵器	杯蓋			(1.1)	灰	灰	回転ケズリ	回転ナデ	微砂粒		200322 -00016
11 第86・87図	S B 25 ・ P 1	須恵器	甕			(3.3)	暗青灰	灰	回転ナデ 手持ちケズリ	回転ナデ	微砂粒	胴部に刺突列 点文	200322 -00014
12 第86・87図	S D 30	土師器	土鍋			(3.5)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ヨコナデ ナデ押さえ	ナデ	微砂粒 角閃石	外面に煤付着	200322 -00018
13 第86・87図	S D 30	土師器	土鍋			(5.6)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ヨコナデ ナデ押さえ	ナデ	細砂粒 角閃石	外面に煤付着	200322 -00019
14 第86・87図	S D 30	磁器	碗	5.0		(2.6)	雪輪	五弁花	回転ナデ	回転ナデ	白色精良		200322 -00020
15 第86・87図	S D 30	陶器	碗	5.8		(1.5)	鉄釉	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ	濁白色		200322 -00021
16 第86・87図	S D 30	陶器	鉢			(4.8)	鉄釉	鉄釉	回転ナデ 刷毛	回転ナデ 刷毛	赤褐色		200322 -00022
17 第86図	S P 11	弥生土器	甕			(2.4)	浅黄	橙	ナデ	ナデ	砂粒		200322 -00006
18 第86・87図	S P 8	黒曜石	石鏃	(2.0)	(1.1)	0.4	暗灰	暗灰				重量0.7g	200322 -00004
19 第86・87図	表探	弥生土器	甕	21.8		(8.1)	灰黄褐	灰黄	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	砂粒 多量の角閃石		200322 -00023
20 第86・87図	表探	弥生土器	甕	10.8		(5.7)	橙	橙	刷毛目 ナデ	ナデ ナデ押さえ	1~4mmの砂粒 多量の角閃石		200322 -00024
21 第86・87図	表探	弥生土器	器台			(4.6)	橙	橙	ヨコナデ ミガキ?	ナデ	細砂粒 角閃石	表面は磨耗する	200322 -00025
22 第86・87図	表探	粘板岩	石砲丁	(3.5)	(4.3)	0.45	黄灰	黄灰				重量9.9g	200322 -00026



第87図 出土遺物（写真）

第15表 速水遺跡第2次調査出土遺物組成表

[illegible]

4. ま と め

今回の調査では弥生時代、古墳時代及び近世の遺構・遺物が確認された。平成14年度に北方90mの地点で実施した第1次調査（註1）では弥生時代の遺構は確認されなかったものの、それに先立つ試掘調査において中期の土坑もしくは溝状の遺構が確認されている。また周辺地点での採集資料も中期に位置付けられるものである。今回の調査で出土した遺物は、中期初頭から後期初頭までの時期幅があるが、市街地の調査において堅穴住居を含む弥生時代の遺構の検出は初めてのことであり、筑後川左岸における弥生集落の動向に一石を投じることとなった。

また甕棺の底部と考えられる資料や、祭祀土器である鼓形器台の出土から、周囲に甕棺墓地在展開している可能性も想定できる。北方の大神神社境内にある一大霊石は支石墓の上石であったとする見解（註2）や、1979年福岡県発行の『福岡県遺跡等分布地図』にも速水遺跡は甕棺墓地としての記載があり、こうした事象も甕棺墓地の存在を匂わせるものである。

近年の久留米城下町関連速水遺跡の調査においては、後世の遺構から弥生時代の遺物が出土する事例が増加しており、その大半が近世城下町の形成によって大きく地形の改変を余儀なくされた結果、近世の遺構に混入したものである。従来は筑後川左岸の自然堤防上には弥生時代集落が点々と営まれていたものと考えられ、今後は限られた出土遺物を手掛かりにして、市街地における弥生時代集落を復元する必要がある。

註1 久留米市教育委員会 2003 『平成14年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第194集

註2 古賀幸雄 1975 「大石町の由緒」『速の矢』 *2002『ふるさと歴史漫録』久留米郷土研究会発行に再録



第38図 速水遺跡第2次調査地の現況（西から）

Ⅶ. 中原遺跡 (第1次調査)

1. 調査に至る経過

本調査は、平成16年2月24日に地権者である[]氏より久留米市梅満町566-1番地における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出された事に始まる。

依頼地は周知の遺跡である中原遺跡の周辺部に位置するため、久留米市教育委員会文化財保護課は試掘調査を平成15年3月4日に実施し、江戸時代頃と推定されるビットや溝を検出した。

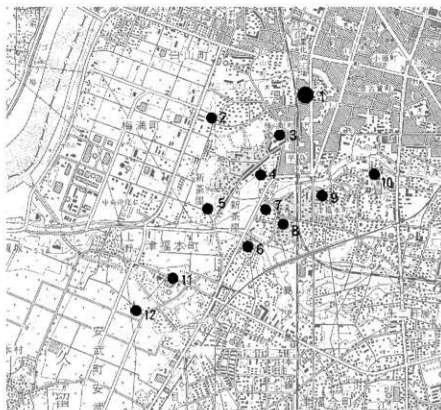
建物の基礎がパイル打ちであるため、地権者と協議を行い、建設予定地の一部を発掘調査することで合意した。確認調査は、平成16年4月7日から同年4月9日まで実施した。対象面積は610.02㎡で、調査面積は30㎡である。

2. 位置と環境

中原遺跡は、金丸川の右岸標高約12mを測る台地上に位置する。この金丸川は湯ノ尻川と合流し、合流した後、西方2kmで筑後川と合流する。周辺部の遺跡の分布は以前あまり知られていなかったが、ここ10数年の開発に伴う発掘調査や試掘調査で、縄文時代から近世にかけての新たな知見が得られている。

中原遺跡も平成14年に新たに発見された遺跡であり、今回の調査地点の南西方約100mで試掘調査によって、発見されている。その後、平成15年にJR鹿児島本線沿いでも試掘調査で、古墳時代～奈良時代頃の遺構・遺物が発見されている。掛赤台地上には、弥生時代～奈良時代の遺跡である宮ノ木遺跡や奈良・中世の遺物が出土している鳥飼小学校校庭遺跡がある。

縄文時代では、庄屋野遺跡や山ノ内遺跡から落し穴遺構が見つかり、弥生時代になると南西の上野遺跡

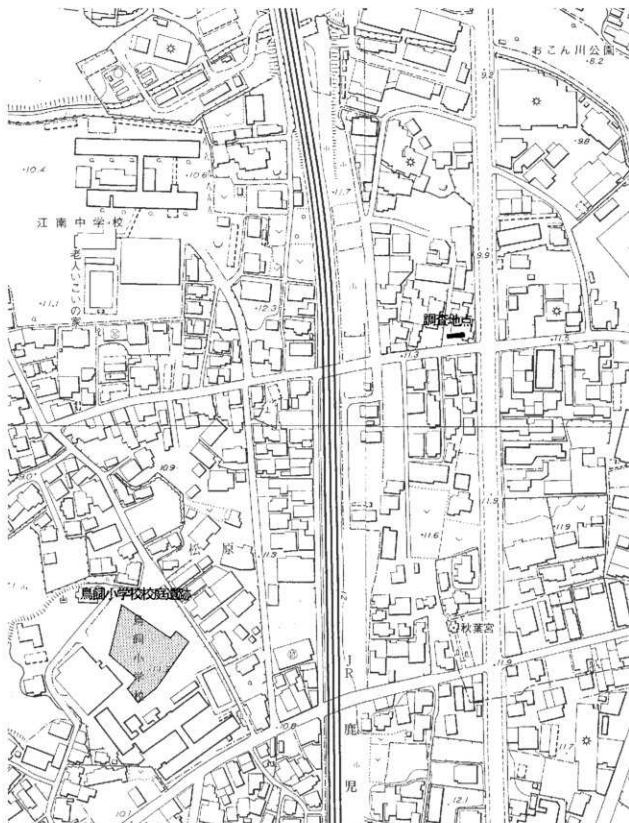


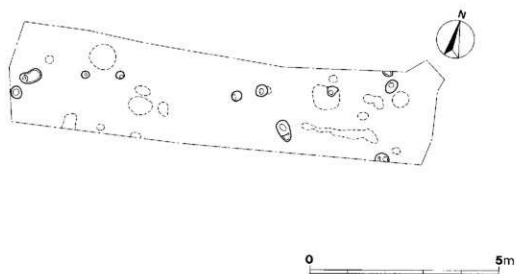
遺 跡 名

1. 中原遺跡
2. 大隈峠遺跡
3. 鳥飼小学校校庭遺跡
4. 宮ノ木遺跡 (第2次)
5. 宮ノ木遺跡 (第1次)
6. 山ノ内遺跡
7. 津福西小段遺跡
8. 田中遺跡
9. 津福寺山遺跡
10. 津福古賀邸遺跡
11. 庄屋野遺跡 (第5・6次)
12. 庄屋野遺跡 (第1～4次)

第89図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

や塚畑遺跡などで集落が形成されている。古墳時代の集落は田中遺跡や津福西小路遺跡などがあり、奈良時代から平安時代では宮ノ木遺跡がある。中世には大隈左近将監の居城と伝えられる大隈村館跡があり、現在の梅満天満宮付近に推定されている。





第91図 中原遺跡第1次調査遺構配置図（1/100）

3. 調査の記録

（1）調査の経過

調査は、専用住宅建設に伴う確認調査で、建物予定地内に、幅3m、長さ約10mのトレンチを設定し調査を開始した。平成16年4月7日重機による表土剥ぎを行う。現表土から-50cmで黄褐色の地山面に達する。8日遺構検出作業及び遺構の掘り下げを行う。9日写真撮影、遺構実測が終了。午後より重機による埋め戻しを行って現地作業を終了した。



第92図 調査区全景（東から）

なお記録写真はカラーリバーサル6×7、モノクローム6×7を用いて撮影し、図面記録は遺跡調査汎用システム「カタタ」を使用し、記録データは「カタタ3DC」に保存されている。

（2）遺構の概要

標準土層は、表土が約30cm、黒褐色土が約20cmで黄褐色粘土地山面に達する。検出遺構は黒褐色埋土のビット12個と明らかに近代以降の埋土のビット・土坑・溝状遺構であった。これらの内、黒褐色の埋土のビットは、周辺の試掘調査で近世陶磁器片が出土しており、それらを掘り下げた。近代以降の遺構については、掘り下げを行わなかった。調査面積が狭いため、ビットは建物にまとまるものは確認できなかった。なおビット内埋土からの出土遺物は皆無であった。

（3）遺物の概要

今回の調査では、遺構内からの出土遺物は皆無であった。しかしながら、南西約100mの地点の試掘において、黒褐色埋土のビットから近世の磁器片を出土しており、今回の調査で検出された黒褐色埋土のビットも恐らく近世の遺構と考えられる。

4. ま と め

中原遺跡は平成14年度に新たに発見された遺跡である。現在まで周辺部では試掘調査を4度おこなっており、ビットや溝・土坑等を検出している。今回初めて中原遺跡で発掘調査を行ったが、確認調査であり調査面積が30㎡と狭く、検出した遺構は黒褐色の埋土のビットであった。平成15年度に試掘調査を行った北西100mの地点では、茶褐色埋土の土坑やビットを検出しており、古墳～奈良時代頃の遺物も発見されている。今回の調査でもそのような遺構・遺物の検出が想定されていたが、検出された遺構は黒褐色埋土の柔らかく締りのないものであった。恐らく江戸時代頃の遺構と想定される。

（補記）調査時に用いた測量基準点の数値に誤りがあったため、本章では周辺地形図（1/2,500）及び全景写真を参考にして「略北」を弾き出している。よって方位は座標北とは数度程度の誤差が生じている。

Ⅷ. 二本木遺跡 (第18次調査)

1. 調査に至る経過

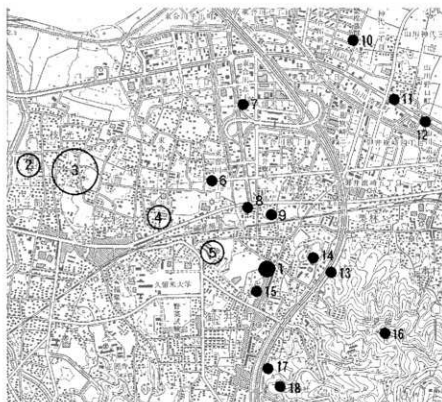
本調査は、平成16年2月12日に地権者である■■■■氏より久留米市御井町字麓561-4番地における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出された事に始まる。

依頼地は周知の遺跡である二本木遺跡内に位置するが、2月の時点で建物が建っていたため、解体後試掘を行なうことの通知を代理人におこなっていた。今回の専用住宅建設は基礎がパイル打ちであるため、試掘調査で遺構が検出された場合、そのまま数日間の確認調査に入る事で、協議が成立していた。建物の解体が5月末に終了したため、久留米市教育委員会文化財保護課は試掘調査を平成16年6月8日に実施し、遺構を検出したため、確認調査に切り替えた。確認調査は平成16年6月8日より同月の10日まで実施した。対象面積は162.06㎡で、調査面積は28㎡である。

2. 位置と環境

二本木遺跡は久留米市の東部に位置する。耳納山地の西端にある高良山の山麓から北西に派生する中段丘上に立地する。遺跡の標高は25~30mを測る。この台地から段丘下の低位段丘上には多数の遺跡が知られている。

周辺の旧石器時代の資料は少なく安国寺・野口遺跡からナイフ形石器や細石刃・石核が発見されているに過ぎない。縄文時代の遺跡としては、横道・安国寺・野口・水洗・朝妻・西小路・神道遺跡があげられ、弥生時代には新婦・ヘボノ木・篠田・古宮・朝妻遺跡などの集落や、墓地としての安国寺・西小路遺跡が



遺跡名

1. 二本木遺跡
2. 筑後国府I期国庁(古宮)
3. 筑後国府II期国庁(阿弥野)
4. 筑後国府III期国庁(朝妻)
5. 筑後国府IV期国庁(横道)
6. ヘボノ木遺跡
7. 下見遺跡
8. 神道遺跡
9. 篠田遺跡
10. 安国寺横道墓群
11. 野口遺跡
12. 大島遺跡
13. 東光寺遺跡
14. 茶臼山遺跡
15. 安養寺境内遺跡
16. 吉見城
17. 祇園山古墳
18. 磯山古墳

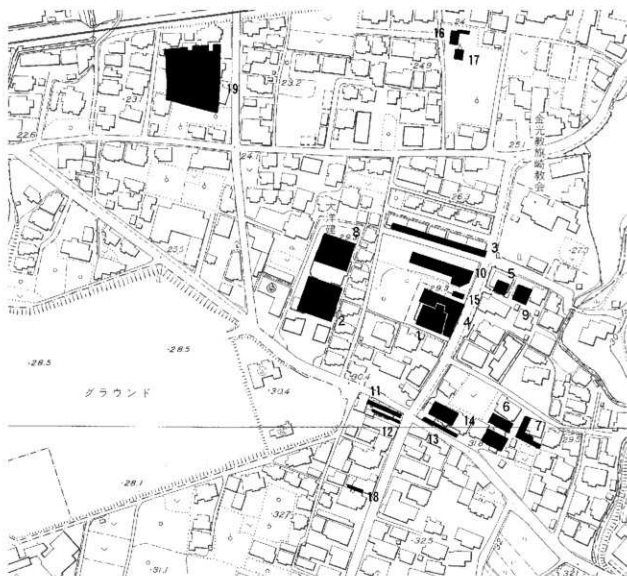
第93図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

あげられる。古墳時代では高良山西麓に祇園山古墳をはじめ、祇園山古墳群・鏡山古墳群・磯山古墳などがある。歴史時代の遺跡としては筑後国府が置かれた古宮・枝光・朝妻・横道地区を始め、郡衙が置かれたヘボノ木遺跡、集落としては、神道遺跡や下見・御堂島遺跡などが知られている。中世になると安養寺境内遺跡、茶臼山・東光寺・磐井・吉見岳城などの中世山城や高良山関係の大宮司・大祝・座主の邸宅跡がみられる。

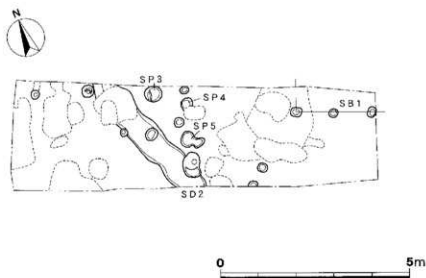
3. 調査の記録

（1）調査の経過

調査は、専用住宅建設に伴う確認調査で、建物予定地内に、幅約3m、長さ約10mのトレンチを設定し調査を開始した。平成16年6月8日より重機により試掘を入れ、遺構を検出したため、トレンチを設定した。午後より作業員さんを入れ遺構検出作業を行った。検出した遺構は、溝1条、近・現代の土坑のほかピットであった。9日に西側の遺構から掘り下げを行い、10日の午前中に遺構の掘り下げを終了した。9日より掘りあがった遺構からトータルステーションで実測を始める。10日の午後写真撮影、実測を15時ま



第94図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



第95図 二本木遺跡第18次調査遺構配置図（1/100）

でに終了し、埋め戻しを行い、機材撤収も終了し、現地作業を終了した。

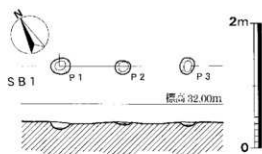
なお記録写真はカラーリバーサル6×7、モノクローム6×7を用いて撮影し、図面記録は遺跡調査汎用システム「カタタ」を使用し、記録データは「カタタ3DC」に保存されている。

（2）遺構の概要

層序は表土が約30cm、褐色土約20cm、表土下約50cmで黄褐色粘質土地山面に達する。今回の調査は確認調査であり、調査面積が28㎡と狭く、検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝1条、近代遺構の攪乱土坑のほかピット十数個であった。



第96図 調査区全景（東から）



第97図 SB1実測図(1/60)

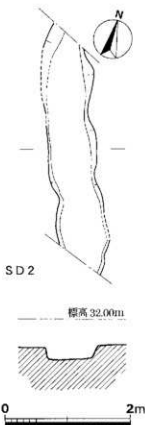
掘立柱建物

SB1（第97・98図） 調査区の北東隅で検

出した。北及び東へ延びるものと思われるが、調査区域外へ広がっており柵列とも考えられるが建物として扱った。東西2間分（2m）を検出しており、柱間寸法は1m等間である。柱穴は25～30cmの楕円形を呈しており、深さは5～15cmと浅い。柱穴内埋土は暗褐色で、白磁碗高台部細片が出土している。主軸方位は概ねN-27°-Wである。

溝

SD2（第99・100図） 調査区の北西側から南側中央部へ斜めに横断した状態で検出した。溝幅70～80cm、深さ15～30cmを測る。長さ3.4m分を検出した。溝底は平坦で、北西側へ緩やかに傾斜し、北西方向へ流れていたものと思われる。溝内埋土は褐色土で、直線的ではなく、やや蛇行しながら南東から北西方向へと流れていたものであろう。溝内埋土中からの遺物は殆ど無かったが、僅かに土師器細片が出土している。



第99図 SD2実測図(1/60)

土坑

近代～現代のごみ穴と考えられる土坑12基を検出している。遺物は持ち帰っていないが、明治～大正・昭和に至る陶磁器や瓦、ガラス、煉瓦が出土しており、これらの遺構は部分的に掘り下げたに過ぎない。

これらの他にも、ビット12個を検出している。これらのビットは建物または柵列になるものも在るかもしれないが、調査面積が3m×10mと狭いため



第100図 SD2全景（北から）

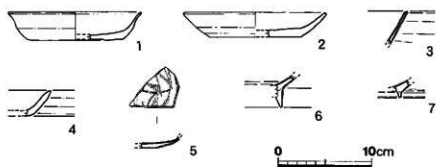
明らかに出来なかった。これらのビットの埋土は褐色或いは黒褐色であった。また中央部のSP3・4・5からは土師器坏・皿、白磁、青磁などの遺物が出土している。

（3）遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、浅パンコンテナー1箱であった。これらは、土師器坏・小皿・甕・鍋、白磁碗、青磁皿、近世陶磁器などである。これらの出土遺物の内、図示できたものは7点であった。

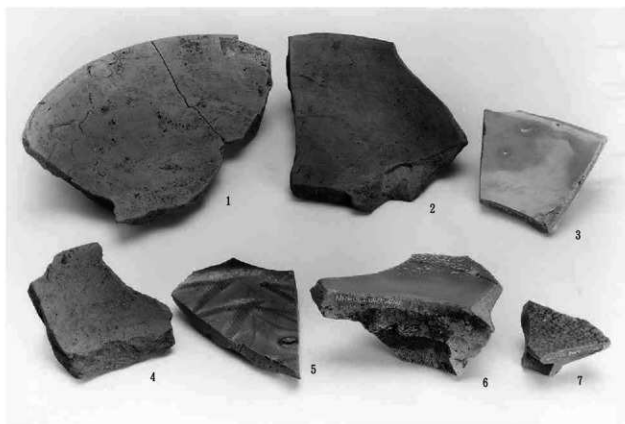
SP3出土遺物（第101・102図） 1～3はSP3出土である。1・2は土師器の坏である。口径は14.0～15.0cm、底径9.6～9.7cm、器高2.6～3.0cmを測る。胎土には赤色粒子や細かい砂粒を含んでいる。色調はにぶい橙色或いは灰褐色を呈し、焼成は良好である。底部は糸切りまたは糸切り板目痕が残っている。3は白磁碗の口縁部破片である。残存高3.6cmを測る。胎土は灰白色で、焼成は良く焼き締まっている。透明釉を薄く描けており、体部下半部は露胎となる。

SP4出土遺物（第101・102図） 4は土師器の坏の破片である。口径・底径は不明であるが、器高は



第101図 二本木遺跡第18次調査出土遺物実測図（1/4）

2.7cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。色調は内外面とも橙色を呈し底部切り離しは糸切りによる。5は青磁の皿破片である。同安窯系のもので、内面に櫛目ヘラ描き文が見られる。



第102図 出土遺物（写真）

SP5出土遺物（第101・102図） 6はSP5出土の白磁碗の高台部破片である。高めの高台で外面は露胎である。胎土は精選されており、焼成は良好である。やや黄色がかった白色釉を掛けている。

SB1P2出土遺物（第101・102図） 7は掘立柱建物SB1の中央部ビットから出土した白磁小碗の高台部破片である。胎土は精選されており焼成は堅く焼き締まっている。釉薬はやや灰色がかった白色で内面はにぶい黄色に発色している。

4. ま と め

二本木遺跡は第18次の調査を行ってきており、最も古い段階の遺構・遺物としては第5次調査で検出された不整形土坑で、縄文時代中期の船元式土器の出土が知られている。弥生時代になると南北方向に掘られた幅5m以上の大溝が約120m分確認されている。この溝の西側において堅穴住居や土坑などからなる中期の集落が検出されており、溝内から丹塗土器が多数出土している。古墳時代の遺構・遺物は検出されていないが、奈良時代には堅穴住居が確認され、平安時代～鎌倉時代には多数の遺物や土坑、溝、建物が検出されている。

今回の第18次調査地点は二本木遺跡の中でも最南端に位置し、第11・12次調査地点の南に位置している。第11・12次調査地点においては、弥生時代の大溝を検出しており、当地まで溝が続くものではないかと思われていた。しかしながら今回の調査では溝は検出したものの、弥生時代の溝ではなく、方向性もずれたものであった。今回の調査では調査面積が狭いながら、中世の集落の広がりを捕らえられ、南側に隣接する安養寺境内遺跡との繋がりもあり、一連の中世集落と考えられる。

第16表 二本木遺跡第18次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 第101・102図	SP3	土師器	坏	[14.0]	[9.7]	3.0	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り板目	ヨコナデ ナデ	砂粒		200405 - 00001
2 第101・102図	SP3	土師器	坏	[16.6]	[9.6]	2.6	にぶい橙	褐灰	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	赤色粒子 砂粒		200405 - 00002
3 第101・102図	SP3	白磁	碗			(3.6)	灰白	灰白			精選	V類	200405 - 00003
4 第101・102図	SP4	土師器	坏			2.7	橙	橙	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	砂粒		200405 - 00004
5 第101・102図	SP4	青磁	皿			(1.1)	灰オリーブ	灰オリーブ			精選	同安楽系	200405 - 00005
6 第101・102図	SP5	白磁	碗			(3.4)	浅黄	浅黄			精選	V類	200405 - 00006
7 第101・102図	SB1 P2	白磁	碗			(1.9)	にぶい黄				精選		200405 - 00007

（補記）調査時に用いた測量基準点の数値に誤りがあったため、本章では周辺地形図（1/2,500）及び全景写真を参考にして「略北」を弾き出している。よって方位は座標北とは数度程度の誤差が生じている。

IX. 久留米城外郭遺跡（第8次調査）

位置と環境

久留米城外郭遺跡は筑後川左岸の低台地上に位置し、標高12～13mを測る。江戸時代には、久留米城下町延寶・天保図に見える外郭（四ノ丸）で、上中級武士団で構成される武家屋敷地区であった。

今回の調査地は久留米城外郭遺跡第7次調査地点の北西側約120mにあたり、延寶八年図では戸田家、天保図によると稲次家の位置に当たる。

検出遺構と出土遺物

調査は専用住宅及び車庫建設に伴う事前の確認調査であり67㎡について実施した。層序は表土が約20cmのみで黄色粘質土地山面に達する。調査区は台地の縁辺部にあたり、試掘調査では、江戸時代の遺構の他に、弥生時代の遺構・遺物を検出しており、今回の調査においてもその様な遺構・遺物が検出されるものと想定して調査を実施した。検出した遺構は弥生時代のピット及び土坑、江戸時代の武家屋敷に伴う土坑2基とピットであった。土坑は隅丸長方形を呈しており、深さは約1.5mを測る。遺物は土坑内から江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器がパンコンテナー2箱と、ピットから弥生土器が出土している。

小 結

調査地は延寶図では戸田家、天保図では稲次家の位置にあたる。試掘調査では、対象地の西側は江戸時代の層もかなり攪乱を受けており、表土を剥ぐとすぐに地山面に達した。また、東側においては、遺構検出面が1mと深く、遺物も弥生時代中期の土器が出土している。今回の調査では、対象地の西側部分の調査を行い、江戸末から明治時代にかけての土坑2基と弥生時代のピットを検出している。土坑は瓦溜1基と穴蔵で、穴蔵からは多数の江戸時代末から明治時代にかけての遺物が出土している。

なお、本報告は平成17年度に行う予定である。



第103図 遺跡の位置図（1/25,000）



第104図 調査区全景（東から）



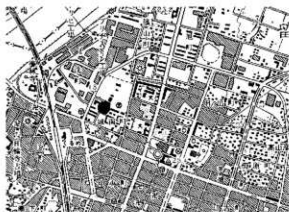
第105図 SK1 全景（北から）

X. 京隈侍屋敷遺跡（第4次調査）

位置と環境

京隈侍屋敷は久留米城下の南西部に設けられた中級の武士団で構成される武家屋敷である。第4次調査地点はこの武家屋敷の北東隅の一角に位置し、江戸前期の延寶図（1680年作成）によれば細見家、後期の天保図によれば水野家にあたる。

遺跡は筑後川左岸の低台地上に立地し、標高はおよそ15mを測る。当該地の東に隣接して県立明善高等学校があり、弥生時代の遺跡である明善高校校庭遺跡が広がる。本遺跡は近世と弥生時代の複合遺跡である。



第106図 遺跡の位置図（1/25,000）

検出遺構と出土遺物

調査は、専用住宅建設に伴う事前の緊急調査で、対象地の北寄りに3×7mの東西トレンチを設定し、調査を実施した。対象面積は178㎡で、調査面積は21㎡である。

検出した遺構は、江戸時代中期の土坑2基（1基は長方形の穴蔵、もう1基は円形の土坑）と、弥生時代中期の竪穴住居1軒である。竪穴住居は長方形で、壁面が35～40cmもあり、残存状態は比較的良好である。東西480cmを測るが、南北は調査区外で不明。床面中央部付近に炉及び焼土を確認した。多量の弥生土器に混じって、石鏃・石斧・砥石が一点づつ出土したが、黒耀石やサヌカイト片は一片も出土していない。

なお、石鏃は石剣切っ先の、石斧は石庖丁の再利用品である。

今回は、京隈侍屋敷遺跡としたが、明善高校校庭遺跡として取扱った方が良かったかも知れない。



第107図 調査区全景（東から）



第108図 竪穴住居全景（西から）

報告書抄録(1)

ふりがな	へいせい16ねんど くろめしないいせきぐん
書名	平成16年度久留米市内遺跡群
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第211集
編著者名	白木 守・神保公久・近澤康治・小澤太郎・大石 昇
編集機関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9718 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2005(平成17)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
やま した 遺 跡 第4次調査	くろめしちひのあいかわ 久留米市東合川 あびのうや あびのうや 三丁目字山下	40203	030274	33° 18' 44"	130° 32' 57"	2003.04.30 ～2003.05.22	197㎡	盛土造成に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山 下 遺 跡 第4次調査	集落跡	奈良 ～ 平安	土坑 ビット		弥生土器、黒耀石剥片、 須恵器、土師器、輸入 陶磁器、石製品		時期的に、ヘボノ木遺跡 の回廊状遺構などと併行。 関連遺構が断層崖下まで 広がっていることが判明 した。また、ほぼ完形の 猿面硯や転用硯の出土が 注目される。	

要 約

8世紀後半～9世紀代にかけての土坑やビットが検出された。この時期は、北に隣接するヘボノ木遺跡の回廊状遺構などとも併行し、その関連遺構が断層崖直下まで広がっていることが分かった。土坑から出土した猿面硯は、須恵器大甕の胴部を転用したもので、ほぼ完形品である。また須恵器坏蓋の転用硯なども出土しており、木調査地付近が寺院もしくは官衙関連施設の一角を構成していたことが想起される。

土木工事の届出日	平成15年4月21日	遺物の発見日	平成15年5月27日
----------	------------	--------	------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
くしはらばやしやうしきいせき 櫛原侍屋敷遺跡 第5次調査	くろめしちひのあいかわ 久留米市櫛原町 あびのうや あびのうや 字四丁目	40203	—	33° 19' 11"	130° 31' 01"	2003.05.07 ～2003.05.09	40㎡	車庫建設に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
櫛原侍屋敷遺跡 第5次調査	武家屋敷	江戸	土坑		1基 近世陶磁器		近世末の土坑を検出。	

要 約

今回の調査は櫛原侍屋敷の東端部にあたる。試掘調査の結果では奈良時代頃の遺構・遺物を検出していたが、検出された遺構は近世末ごろの土坑1基と明治時代以降のビットのみであった。土坑も調査区域外へ広がっており、全容は明らかにできなかった。出土遺物としては、近世陶磁器・瓦・鉄器(釘)・硯であった。

土木工事の届出日	平成15年3月6日	遺物の発見日	平成15年5月14日
----------	-----------	--------	------------

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
にししょうじ 西小路遺跡 第9次調査	くさめしひがしあいまち 久留米市東合川町 あぶらにししょうじ 字西小路	40203	030130	33° 19' 08″	130° 32' 46″	2003.05.27 ～2003.06.05	65㎡	共同住宅建設に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西小路遺跡 第9次調査	集落跡	縄文	包含層		縄文土器、石器		縄文期および歴史時代の包含層を検出。	
	集落跡	平安	包含層		土師器、須恵器			
要 約								
今回の調査地点は西小路遺跡の北西端に位置し、道路を隔てた北西側は筑後川の氾濫原となる。調査では明確な遺構は確認できず、包含層のみの調査となった。その包含層も縄文時代から歴史時代までの遺物が混在しており、一時期に形成された包含層というよりも、南東側の高台からの流れ込みによって形成された堆積層と考えられる。								
土木工事の届出日		平成15年5月15日			遺物の発見日		平成15年6月11日	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
うらやま こふんぐん 浦山古墳群 第4次調査	くさめしうらやま 久留米市上津町 あぶらうらやま 字浦山	40203	30860	33° 17' 10″	130° 31' 55″	2003.10.29 ～2003.12.22	400㎡	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浦山古墳群 第4次調査	古墳	古墳	前方後円墳	1基	土師器、須恵器、埴輪		6世紀前半の前方後円墳を調査。前方部上の祭祀遺構を確認。6世紀末の円墳を調査。	
			円墳	1基	土師器、須恵器、鉄器、玉類			
要 約								
耳納山地西麓の藤山地区には、5世紀代に3基の前方後円墳が築造されている。今回の調査では、これらの首長墓に後続する小形の前方後円墳を確認した。この浦山4号墳は、後円部が既に消滅していたものの、前方部上には祭祀遺構が良好に残存しており、大甕を初めとする多数の甕・高坏・脚台付甕・坏・壺などの遺物が多量に出土した。これらの遺物には年代差が見られ、2～3回の祭祀が繰り返されたものと考えられる。また、前方部先端にあたる西側墳裾部では、周溝が確認された。埋土からは、周堤部から流れ込んだ円筒・朝顔形埴輪が出土した。なお、形象埴輪は出土していない。また、4号墳上には、浦山24号墳が築造される。浦山24号墳は6世紀末～7世紀初めに築造されており、浦山4号墳の前方部を掘り込む形で石室が構築される。主体部は筑後地方特有の「胴張り」形の横穴式石室で、ほとんどの石が石材採集の為に残存しておらず、大破している。遺物は墓道部から主に出土しており、玉などの装飾品や土師器・須恵器が出土している。								
土木工事の届出日		平成15年10月27日			遺物の発見日		平成15年12月26日	

報告書抄録(3)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
速水遺跡 第2次調査	久留米市大石町 宇速水	40203	030072	33° 18' 56"	130° 29' 49"	2003.12.25 ～2004.01.08	61㎡	共同住宅建設に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
速水遺跡 第2次調査	集落跡	弥生	堅穴住居	3軒	弥生土器、石庖丁		弥生中期の堅穴住居3軒を近接して検出。	
			土坑	1基				
	集落跡	古墳	掘立柱建物	1棟	須恵器、土師器			
	集落跡	近世	溝	1条	近世陶磁器、瓦			
要 約								
調査地は久留米市街地の西側に位置する。調査では弥生中期の堅穴住居3軒・土坑1基が検出された。市街地において該期の堅穴住居が検出されたのは初めてのことであり、筑後川左岸における弥生集落の動向に一石を投じることとなった。また丹塗り土器や甕棺片も出土しており、周辺に甕棺墓が展開している可能性が考えられる。なお近世期における当地区は城下町の外れに展開する農村地帯に相当する。								
土木工事の届出日			平成15年12月24日			遺物の発見日		平成16年1月13日
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
中原遺跡 第1次調査	久留米市梅瀬町 宇原畑ノ二	40203	—	33° 18' 35"	130° 30' 15"	2004.04.07 ～2004.04.09	30㎡	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中原遺跡 第1次調査	集落跡	江戸	ビット				近世末頃のビットを検出。	
要 約								
調査地は金丸川左岸の標高約12mを測る台地上に位置する。中原遺跡は平成14年に新たに発見された遺跡で、当初中世末ごろの遺跡と推定されていた。平成15年に今回調査地の北西約100mの地点での試掘調査では古墳時代から奈良時代にかけての遺構や遺物を発見している。今回の調査ではそれらの遺構の広がりを確認すべく調査を実施したが、検出した遺構は江戸時代頃と思われるビットのみであった。遺物は皆無であり、時期の決定はできないが、南西約100mの地点での立会調査の際、黒褐色の埋土から江戸末期の遺物が出土しており、今回検出のビットも黒褐色埋土であり締りも悪いことから、江戸時代の遺構と推定される。								
土木工事の届出日			平成16年4月5日			遺物の発見日		遺物なし
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
二本木遺跡 第18次調査	久留米市御井町 宇籠	40203	030244	33° 18' 22"	130° 33' 12"	2004.06.08 ～2004.06.10	28㎡	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二本木遺跡 第18次調査	集落跡	鎌倉	溝	1条	土師器、青磁、白磁		中世の溝と掘立柱建物を検出。	
			掘立柱建物	1棟				
要 約								
二本木遺跡では18次に及ぶ調査を行っており、今回の調査地は二本木遺跡の最南端部に位置している。第11・12次調査で検出していた弥生時代の溝の延長線上にあることから、当地まで溝が続くものと考えられたため、調査を実施した。しかしながら今回の調査地までは弥生の溝は続いておらず、検出した遺構・遺物は中世のものであり、中世の集落の広がりを捉えたに過ぎなかった。								
土木工事の届出日			平成16年5月11日			遺物の発見日		平成16年6月16日

報告書抄録(4)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
久留米城外郭遺跡 第8次調査	久留米市篠山町 字四丁目	40203	—	33° 19′ 22″	130° 30′ 25″	2004.06.14 ～2004.06.30	67㎡	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久留米城外郭遺跡 第8次調査	集落跡 城館跡	弥生 江戸	ピット 土坑 2基		弥生土器、石包丁 近世陶磁器		概要報告	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
京隈傳屋敷遺跡 第4次調査	久留米市城南町	40203	—	33° 19′ 20″	130° 30′ 16″	2004.09.30 ～2004.10.07	21㎡	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
京隈傳屋敷遺跡 第4次調査	集落跡 武家屋敷	弥生 江戸	堅穴住居 1軒 土坑 2基		弥生土器、石鏃、石斧 近世陶磁器		概要報告	

平成16年度
久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第211集

平成17年3月31日

発行 久留米市教育委員会
編集 教育文化部 文化財保護課
印刷 香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15